十八年十月二十四日發行
第九十六號
東京國光社

女鑑第九拾六號

目録

山名氏清の夫人



文章は平易を貴ぶ

文章は、何がゆゑに、平易を貴ぶか。これ、他にあらず。其の主とするところ、辭を達し、意を通しむるに在ればなり。すなはち、讀む人をして、自在に、其の文義を會得せしむるに在ればなり。世の中に、文章の必要なるは、文字を研究し、章句を練磨せんがためにあらず、專ら、言語に代へて、思想を發表し交換することの一點に歸す。ゆゑに、吾人が、文章を要する時は、或る學科、技術を除く外、全く、直接に、言語を以て、談論しがたき場合に限る。以上の事實よりして、吾人は、文章を以て、專ら、言語代用の機關と爲し、言語代用の機關と爲すがゆゑに、また、專ら、其の平易簡明を貴ぶなり。

然るに、世の中には、種々の學者あり。ひたすら、窮屈なる文字を陳ね、新奇なる語句を造り、古來、曾て見ざる新熟語を濫造し、得々として、博學多才を衒ふもの

あり。また、意志と、文章との矛盾するにも拘らず、或は、いたづらに、纖巧浮華、或は、いたづらに、豪放疎漫にして、意志を以て、文章を發せず、章句を以て、意志を枉ぐる者あり。かくの如きは、もとより、文章の本義を解せざる腐儒に屬すといへども平易を貴しとする眼よりは、これを默過すこと能はず。而して、殊に、我が婦女諸子に關するものは、筆を執る者に於いて、ふかく、注意せんことを要す。何となれば、艱澁不明の文章は、其の眞味を解くこと能はざるのみならず、まゝ、其の誤謬を招かん處あればなり。

次に、近來、文章上の通弊とすべきは、一言以て、明に解釋し得べき事を把り、縷縷として、千言萬語を累ね、從ひて、無用なる蛇足の文字を挾み、其の結果、いたづらに、讀む人の煩雜を増すこと是なり。此の弊は、全く、彼の新聞、雜誌が、紙面補充策、すなはち、短小なる事項を、成るべく、長大に記載せんとする策に基きしものにして、今は、殆ど、世の中一樣に傳染せるが如し。それ、平易とは、決して、冗長の意味にあらず。たゞ、一個の文章を讀みて、理解し易きを指すのみ。ゆゑに、以

上の如き蛇足的文字は、斷じて、平易の主旨と、相衝突するを見る。
いづれの世の中、いづれの時代を問はず、所謂、學者といふものは、國民の少數に
限り、百中の九十五六は、殆、文盲者、一知半解者、もしくは、僞學者などを以て充さ
るゝるを、常と爲す。然れば、艱澁にして讀み苦しき文章は、所謂、少數の學者に
對しては、不都合なしとするも、最多數の國民に向ひては、はなはだ、不便利なりし
て、其の需要に應ずる能はざる次第なり。かくては、世の中の公私の事業におよぼ
す影響、果して、幾何ぞや。ゆゑに、いやしくも、公衆の便益を計らんとせば、こ
れに使用する文章の、平易簡明ならざるべからざることも、亦、明らけし。
平易の文章は、思想を發表しがたくば、則、已まん。然れども、吾人は、思想の深
遠なるだけ、議論の高尙なるだけ、事項の繁密なるだけ、其の文章の、簡潔明白な
らんことを望む。而も、世の中の趨勢は、おほく、これと反對し、いさゝかも、價
なき淺薄の思想、卑近の議論、瑣末の記事を述ぶるに、强ひて、怪奇難解の文字を
以てす。これ、未、天下に普及する大文明、大事業に、着眼せざる文字賣買人の謬

理見のみ。試に、聖人、賢者の著述を看よ。其の文章は、極めて平易、而して、其の理義、極めて神妙なり。是に於いてか、始めて、百世萬民の範と爲すに足る。これを要するに、誇大、疎笨、艱澁、冗長、粉飾は、當時流行の文章社會に於いて、務めて排除すべし。而して、平易、愼重、簡潔、至誠、確實の文章は、すなはち、大に、これを奬勵せざるべからず。若し、それ、理想、識見如何に至りては、本篇の範圍外に屬するものなりといへども、素、これ、文章の精神たり、骨髓たり、泉源たり、原力たるものなれば、これが涵養練磨の緊要なるは、今更、吾人の嘵々を要せざるなり。由來、吾人が、現今の文學上に關する所感、一にして足らず。今、わづかに、其の一端を言ふのみ。終に臨みて、吾人は、我が婦女諸子に代り、天下の識者志士に向ひて、敢て、本篇を反覆考慮せられんことを祈る。

論說

家庭教育の要

大町桂月

女子は、主として、家を治むるものなれども、たゞ家事經濟、裁縫、料理など、辨ふるのみにては、未だ十分なりとなさず。女子は實に家庭教育の主任者にして、將來の日本國民を養成すべき大任を、その双肩に負へるものにあらずや。彼等が膝下を圍繞せる三尺の童子は、將來或は出でゝ將となるものあらむ。或は入りて相となるものあらむ。今は頑是なき小兒の、鼻汁垂らして玩具など、ねだれど、將來は、社會の一人前の男となりて、國の爲に盡すに至らむ。女子は實に社會を生み出すものなり。その責任の重きを思へば、愼しみてもつゝしまざるべけんや。

女子が家を治むるに足る準備には、舅姑に事ふる道、夫に事ふる道、云へば更なり、讀み書きも、ひとゝほりは出來て、手紙も書かるべく、自から裁縫する遑はなくとも、せめては、衣服のあらましを知りて、夫や小供にみすぼらしき容裝をなさしめず、その社會々々につれて、親族などゝ交際を爲すに足るべく、また、衣食住の管理より、萬事つゝまやかに、しかも愉快に、能く一家を運轉するに足るべき素養なかるべからざるは、もとより言を待たず。而して特に子を育つるには、如何なる準備を要すべき乎。世の親達にして、もしたゞ單に子供を丈夫に育てゝ、學校にやりて、學ばしめさへすれば、それにて家庭教育の任は終れりと心得るものあらば、予輩未だ其の可なるを見ざるなり。

人生れて固より無知、唯教育によりて以て天稟の才能を啓發し、第二の天性を搆成し、智を開き、德を修め、

學問を積みて以て万物の靈たる實を擧ぐるに至るものなり。さてその教育にも種々あれど、大別すれば、家庭教育と社會教育との二種あり。社會教育の中には、學校もあるべく、朋友間の交際もあるべく、その他直接に、間接に、教育を授くるもの、擧て數ふべからず。家庭教育は、主として親の教にあり。社會教育は主として學問知識を授け、家庭教育は主として感情性格を養ふ。これ二種の教育の異なる點とす。

もし小兒の年齢によりて之をわかてば、生れて、五六歳までは殆んど家庭教育一方にて、學齢以後は社會教育家庭教育相半し、十四五歳以上、社會教育漸次その度を加へ、終に丁年前後にいたりて、社會教育其の主部を占むるものなり。されば、教育は家庭に始まり、社會に終はるといふべく、且つ人の性格は本にして、學問は末なり。岐路迷ひ易く、白糸染み易し。清淨無垢なる三尺の童子の行末を思へば、予輩、揚擧にあらずといへども、また一滴の涙なきを得ず。

人固より天性あり、されど、第二の天性は多く家庭の間に成るなり。家庭教育の要は、學問よりも、知識よりも、寧ろ性格人物を養成するに在り。學問、知識を閑却すべしとにはあらず、たゞ學問知識は、將來、社會教育の司る所なれば、その眞の教育は之に任せて、家庭教育にては、主として性格を養ひ、以て、將來、學問を修め、知識を得るに足るべき人物の資格を備へしめむことを勉めざるべからず。されば、家庭の間にては、學校の課程の豫習、復習に注意すべく、また萬事につけて知識を得せしむることに注意すべきは、勿論なれども、とりわけて注意すべきは性情の啓發にあり。性情の啓發とは必ずしも書を讀ましむるにあらず。また必ずしも理屈を云つて聞かするにあらず。燈下に團欒して嬉戲する際、火燵にあたりて昔話をする際、さては食事し、睡眠し、獨樂をまはし、雙六を弄び、

繪草紙を見る際などに、知らず〳〵小兒を感化して、以て第一の天性を善く導き、人格の基をよく養ひて、以て將來有爲の國民たる素を作るべきなり。

されど、家庭敎育の主任者は先づよくその身を修めざるべからず。清淨無垢なる小兒は、親の千万言よりは、親の一行が身に泌みて、これを見習ふものなり。百聞、一見に若かずとは、即ち是也。殊に小兒に於て其の甚しきを見る、孔孟の敎など說くよりは、まづ忠孝の實例を擧げて之を說け忠孝の實例を說くよりは、まづ己れの身を修めて、以て道德の手本を示せよ。これ家庭敎育の要義なり。道德の手本を示すに足れど、家庭敎育の大本は立てり。

己れ、親に孝に、夫に順にして、始めてその子に孝の道を說き聞かすべし、否、口に說き出さずとも、己の行を見習ひて、子供は己に孝の道を見習ふべき筈なり。万事之に準ず。要するに、一言一行、苟くもせず、一に眞の道にかなはむことをつとめよ、然らむ、家庭敎育は知らず〳〵その間に行はるゝなり。

己れの身をつゝしまずして、無闇に可愛りたれどとて、小兒は反りて侮りて、容易にその言を聽かず、又無闇に叱りたれどとて、小兒は反てすねて之を馬鹿にするに至らむ。愛に過ぎず、嚴に過ぎず。一に中庸を得て誠心をつくし、先づ實例を目前に示し、次に善例を面白く話して聽かせ、その體を大切にする餘、おかひこぐるみにして反りてその皮膚格體を損ふことなく、身體の健康と共に精神の健康をはかり、能くつとめ、能く遊ばしめて、愉快なる氣風性格を養ふべし。かくの如くにして能く有爲の日本國民たるにいたるべく、能く家庭敎育の要を得たるものといふべきなり。

予は、以上說ける所を左に約言して、以て此論を終へむとす。曰く、

家庭敎育の要は、學問よりも、知識よりも、寧ろ性

情人物の素を養ふを先とす。而して、徒に千萬言を費すよりも、己れの善き實行を以て之を感化することを主とせざるべからず。

羞恥の心

坂本三七郎

羞恥の心は、婦女子が、其天に禀たる所ろの婉柔謙德の性を現はす一端なり。婦女子にして羞恥の心を缺くものは、是れ既に女性の特質を害して、其謙德を失ふを知るなり。然れども、吾人が此に說く所ろの羞恥なる語は、敢て彼の耻辱を雪ぎ、或は耻辱を重んずと謂ふが如きを說くにあらず。耻を知り辱を重んずるが如きは、是れ人生を通じて貴ぶ所ろ、男女兩性共に存し而して、就中女子終世恒德の道に於て最も重きを置く所のものなり。故に耻を知り、辱を重ずるは恒德の道に屬して、吾人が今論ぜんとするは、謙德婉柔の一端たる、嬌羞遜容を謂ふの義なり。謙德を内に蓄へて、外貌婉雅なる道理心に存して、寡言敏行なる是れ婦女子が最上の美德にして、貴女と稱し、令夫人と呼ぶの資格全しと云ふべし。而して此の羞恥の心ある者は、其婉雅敏行を裝飾する錦上花を添ふるの美と云ふべし。梅花の清秀なる雪を帶びて、妍に櫻花の艶麗雨を含んで更に焦色あり。羞恥の心何ぞ、婦女子に缺くべけんや。唯だ思ふ今の貴女と稱へ、令夫人と呼むるゝ女子、果して、此の羞恥の心あるか、是れ吾人が今日に於て、憂ふる所なりとす。

吾人頃日、事を以て宴席に列す、紳士貴孃來り會する霞の如く、夫妻雙々手を携へて、席上を來往周旋す、燕尾の嚴裝、蜂腰の麗飾、美は則ち美なり七子の羽織、仙臺平の袴、白襟紋付と、相伴ふ。是又美は則ち美なり、美更に美、而して醜の其間にあるを如何せん、醜とは何ぞや、是等の稱して貴女なり令夫人なりと呼稱

せらるゝもの宴席盛開の間だ喋々として談じ呶々として話し、少しも謙讓遜容なし、獨り其女輩同流に對して喋々たるのみならず、貴賓盛客に會して、傲然相話し相戯笑し、傍人をして始めに之を笑ひて、終に之を疾ましむ。其れ偕樂共和の宴、吾人は決して其和樂の情を共にするを咎めず、然れども其禮を失し、女性の謙德を缺くに至りては、吾人甚だ之を好まず、羞耻の心吾人は是に於てか更に婦女子に必要なるを知る。貴女令夫人とは蓮葉女、阿夫婆の綽號にはあらず。然れども是等の綽號は多く貴女令夫人なる者と相伴ひて其實を表するを如何せんや、是れ吾人の論或は苛言酷論に過ぐるが如しと雖ども、豈に敵なくして矢を發するものならんや。

故に當今の識者及び教育に從事するの士は常に憂ふ女子を教育して完全の妻たらしめ、又賢良の母たらしめんとして、之を教育して、學あり識あらしむ。然るに教育愈々高く、學才益々長ずるに及んでは、其弱點を現はし、驕慢に失せざれど、懦弱に流れ、禮を習ひて法度の外に逸出し、學ぶ所、徒に其弱點偏性を助長せしむるに過ぎず。教育の道未だ十全の域に進まざるの故か、將た之をなすの遠因あつて然るか、吾人は甚だ之に惑ひ世上女子教育の任に當るの士に問ひ、且警戒せんと欲する所なり。今の貴女令夫人と稱するもの悉く十分の教育ある者のみとは云はず。然れども多くは是れ高等の教育を受け、一家經理の事、仰事俯育の道を知るものにして、市井の婦女と同じかるべからず、徒に美衣を纏ひ、車を馳せて、往來喋々するのみを以て名くべきにあらず。獨り怪しむ、車上麗衣の貴女飜て車夫糟糠の妻が夫を助けて一家を經理する人に耻ぢんとは、此の如くにして恒德は變じて節操なく、謙德顧みず、何ぞ遜容あらん。何ぞ況んや、吾人が稱する羞耻の心をや。是等のこと獨り貴女令孃を責むる

のみならず今日の女教師女學生者流往々此弊風あるを知る何ぞ日夕對照する所の鏡面の外に心理を照鑑する菱花一面を購はざるや。

吾人曾て之を某氏に聞く、歐米各國に於て婦女子の最も家政の道に長し、育兒の法を知り且つ德義の心厚きものは初等教育を終り、教會の薫陶を受けたる者に多しと、吾人其然る所以を知らずと雖ども、之を我國今日の狀態に鑑みるに大に其說の然るを見る今世の女風の正しきは上流にあらず、又た下流にあらず、其中に位する女流の裡にあり、端正淑德の日本女德は慥かに中等孃等の掌中に歸したり。故に吾人は是等の淑女をして流せず、失せず、中正を守りて教育は受け以て國民の賢妻良母たらしめんことを望むや切なり。近頃感ありて、羞恥心の一篇を草し、合せて女界の弊風を警戒して之を寄す。

婦女の高尚══其の教育の重んずべき所以

藤田武三

吾人は、高尚なる孃君達に對して、小言を申すほどの經驗は、未だ有らざるなり。

人世莫爲婦女身　百年苦樂由他人

此の二句は、吾人をして、いたく、○○の艱難辛苦を感ぜしめたり。此に於いて想ふ。これ、舊世界の談ならんのみと。

然れども、また、虚心平氣に思ふ。……………我が國婦女諸子の境界も、亦、憐むべしと。

今、これを大別すれば、三時期、甲、乙、丙、

甲　王朝時代の婦女
乙　封建時代の婦女
丙　明治時代の婦女

婦女を教育すと、一言に云ふのみにては、何事もなか

るべし。然れども、其の我が國婦女に敎ふるに、甲、乙、丙、三期あることをも辨へざる人にては、今日の敎育を、眞正に遂げ得んこと、まことに覺束なかるべし。

婦女第一の德を、淑德といひ、貞節といふ。然れども、これ、甲期時代の淑德なる乎。將又、乙期時代の淑德なる乎。否又、丙期時代の淑德なる乎。…………貞節とても、其の通、甲期時代に、貞節なるもの、乙期時代には、貞節ならざることも有るならん。

然れども、…………然れども、…………これを、困難とは申すなれ。

試に想へ。王朝の時代…………

○○式部、○○納言、…………二十名、或は、十餘名、…………明月の下に、玉琴を彈じて、想夫憐を歌ひたまひし其の昔の夕を。

又、試に思へ。

○○式部が、緋の袴の色、もゆるが如く、白き絹の繻袢、紫のうちかけ、…………

是ぞ、即、甲期時代の婦女の風俗なりける。猶、此の外に、甲期時代に於ける一種の風俗とも申すべきものは、三十一文字といへるものを、使として、申し難き遊を、擅にしたまひしことならん。

甲期時代の事、あまり、永く申すも、益なし。唯々、此の如き風に、今の世の孃君達の、染みたまはぬこところ願はしきなれ。

封建時代の婦女の如き、飽くまで、婦德、貞操あれども、其の活用、其の利用を知らず。而も、徒に、神經…………神經を惱ましたりき。これ、豈、乙期時代婦女子の弊にあらずや。

甲期時代には、甲期時代の長處あり。乙期時代には、乙期時代の長處あり、何人、何事と雖、みな、其の長處、其の短處あらざるはなし。ゆゑに、甲期時代は、甲

期時代、乙期時代は、乙期時代なるべし。これを痛罵するまでもなし。其の活用なからんには、乙期時代も、乙期時代にわらず。況、甲期時代をや。況、丙期時代をや。其の困難必死の場合に至りて、婦徳、貞操を、如何にして用ゐんか。所謂、志ありて、家庭教育なし。學問なし。經驗なし。ゆゑに、良人ともぐ〳〵、困苦に陥る如きこと、ま丶有り。豈、哀むべきことの限にあらずや。これを以て見るも、學問と、經驗とは、乃、双子の如くにして、何れか劣り、何れか優るといふことを得ん。されど、堪忍勉強して、婦女、貞操を施すころ、何より肝要なれ。

今日、即、明治の時代に至りては、甲乙期時代の善なる所、婦徳、貞操を重んじ、家に在りては、父母家庭の訓導を受け、外に在りては、學校教師の教育を受け、後々、孝貞兩道を辨へ、父母に、孝を盡し、嫁ぎては、其の夫に、貞を盡すべく、人の親となりては、前の兩道を辨へて、子女を教育せんこと、尤、肝要なり。世の孃君達、ゆめ〳〵、甲乙期時代の艱苦、耐忍、經驗、孝貞の美事を捨てず、今日、大切なる學問を勵みて、後來、必々、良妻賢母と成りたまはんことを願ふになん。

女子教育一斑（五）

三輪田眞佐子

最も講究すべきものは、人倫道徳の主義なり。抑、遠くは一國の光榮を有ち、近くは一身の安堵を求めんとならば、如何なる主義を採るべきか、如何なる道心を重うすべきかと、豫め考へて後、女子を教育すべきものぞかし。元來道理は宇内に充ち、千古に渡りて、變易なしと雖、古人の是なりと信せしもの、今人これを非となす例あり。あるは西の洋の人眞なりとするもの

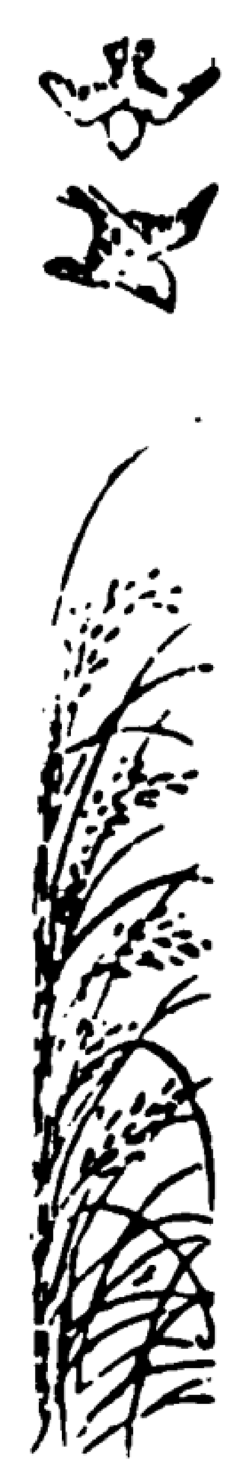
を、東の國の人これを僞なりとする差なきにしもあらず。こは全く道理實体の變易にあらずして、ひたすら、人民の懷く信向の相違なりけらし。さはれ、かゝる信向にもとらんか、あはれ國体動き人道亂れん。いみじう恐るべきことにこそ。故におのれは女敎に於て害なき限りは、古の歷史に徵し、今の人情を察し、適當なる主義を撰ぶべきものこそよけれと思ひ侍るなり。すなはち徒らに哲學上の理想に訴ふべからず。さりとて他國の風習にも倣ふべきにあらず。蓋しかゝる適當なる主義の根源は、かしこき敎育勅語ならん。且つわが古來の歷史も一種の經典として崇むべきものならんも他にこれと等しき主義の學派を待ちてこそいよ〳〵布敎に便ならめ。思ふに孔孟の學派は仁義忠孝を說く一種の人倫的哲學にして、幽玄に流れず、卑俗に失せず、さながらわが民人固有の道德と符合するのみならず、旣に二千年來わが民人の腦裡に感銘して、もはや一般人々の先天的理想となりぬと言ふを得べし。試に一例を見よ、むかし鄭となんいひける國に祭仲なるものありて、いと威權を專にせしかど、その君鄭伯これを患ひ給ひて、かの娘の夫なる雍糾をして、祭仲を殺さしめんと謀り給ひけるとき、その妻忽ち母に問ひけらく、夫と父と孰れか親しきかと、その時母の答ふるやう、たらちねの父君は世に二人は得べからざるも、夫ばかりは始より定まりぬるにはあらず、たゞ偶然嫁きたる人をかくぞ定めつるものなるをもて、人は盡く夫となさぞなりなん、いかで父をもて夫に比ぶべきものかは、云々と、春秋左氏傳なる桓公十五年の傳に見ゆ。されど古人もいたくこれを難じ、今人も亦これを疑ふなり。さてもしかゝる感情及び信向をして、歐米人に見せしめんには、彼ら何とかいふらん、加之わが國には夙に武士道なるもの行はれけるより、今なほ特得の氣風存せり。苟も善良なる日本女子を敎育せんとならば、

わが國民の信向及び感情に和する主義を忘るべからず。

前に述しごとく、女子教育の主眼は女子天然の智情意を養ひ、幷に體質を培ひもて正路を踏み、天與の幸福を享けんための、ものにしあれど、先づ女子の天命は如何なるものなるかを知るべきなり、去かるになほこの理を忽にれもふもの多きにや、多年の經驗を積みし今日すら、高等教育は女子を獨活せしむるものと誤了するものあり、これ天然に背くものなれど教育するもの、及びせらるゝもの、共に戒めて後悔なまねきそ。到底天命に違ふものは、世路に跌するに至らん、勿論女子の偶生するは、自然なれど、外國の如く女子の數**男子の數より多きときは、勢ひ時機を失ひ婚嫁するこ**と能はざるものもあらんを以て、獨存を免れざることなれど、わが國は之に反し、女子は男子より數少きを以て、かゝる患なし。且つわが文物の情態より、女子は內事を主どり、男子をして內攻の患なからしむるを以て、任とせど殆、餘力なかるべし。かゝる理由に基きけん、今年京都なる教育大會に於ても、女子教育は內助的方針を採るべしと定められぬ、實にさあるべきことにころ。

かくものすれど、人あるは訝しうれもふらん、こは進步主義にあらで、保守主義なりと、されど教育なるものは、自然の大成を助くるに過ぎざるものにしあれど、豫め主義などものゝしう、人爲の標準を作り、世に不適當なる人物を養成せんは、國家のため利益なきのみならず、一身のため不幸の至りなりと信ずれど、徒に進步とか保守とか定めん理やあるべき、獨り我**が國の精神に基き、事の宜きに**適ひなど足りなん、則ちかゝる有爲の女子を教育せんとならど、現今なる社會の情態を見、將來なる家內の大勢を察すべし。されどもしわが教育制度にあしきものあらんには、速にこ

れを棄るに止まらず、かの國の智識にても善良なるものあらば、疾く採るべきなり。思ふに女子の學ぶべき化學、生理、衛生、植物、編物等の智識は、かの國の長所なれば、宜しく採るべきものならんかし。必竟以上の如き道理なるを以て、毫も偏せず、黨せず、虚心に考へ、后ち定めたらんには、始めて敎育の大本畫一に歸し從ひてその普及を願ふに足るべし、されど主義の爭ひより、各我を聖なりとすれば、誰か烏の雌雄を知らんと、互に嘲り、且つ罵らるゝ如きことなくして、反りてその制度を共に美を盡し、善を極むと相信じ、以て遂に女敎の隆盛を見るに至らん、あはれ國家の慶事何ものかこれに過ぎん、もしおのれの信ずる敎育の大本に誤りありとするものは、山水明美なるわが國土に問へかし、彼れ豈に人をあざむかんや。





山名氏清の夫人

鹽井ふく子

富貴は浮べる雲のごとく、榮華は風前の花にひとしき世のさまとはいへど、とりわきて、あはれなりけるは、山名氏清の滅亡なりけり。

そも、此の山名氏は、山陰、山陽、南海諸道にて、其地十州ばかりを略して、勢いと强く、世の人に、六分一氏とさへ唱へられしに、氏淸、足利義滿をうらむことありて、元中の八年十二月といふに、兵を擧げて京師を攻めけるが、利あらずして、遂に義滿が刃の銹ときえ果てしは、世にも果敢なき次第なりけり。其子時

清、滿氏も、父とおなじく軍に加はりをりしが、父は討れ、將士も多く散ずるを見て、淺ましくも、難を逃れむとおもひて、走りて丹波にいたり、畑城にたよらむとなしゝが、その事かなはずして、潜に有馬の温泉にかくれ、兄弟髮を剃り落し、姿をかへて尼ヶ崎に至り、商船に便りて、忍び〳〵て紀伊の國に至り、伯父なりける山名義理にまみえむことを請ひぬ。さるに、義理は、父を捨てゝ生を全うして、此處まで逃れ來る不孝の子を、我は見む事を欲せずとて、罵りて逢はざりけれど、兄弟は是非なくなほも忍びて熊野にかくれたり。

これより先き、氏清の夫人某氏は、ひとり堺といふ港に、とゞまりてありしが、軍の摸樣、夫の安危、子のゆく末など、種々と心元なく思ひわびて、食事をもせず、唯京の空をのみながめありしが、日來より病多き身の、やう〳〵、よわりて、枕をもえもたげえずなりにけり。

かくて、正月元日のあした、家僕の走り來りて告ぐるやう、昨日大殿の戰敗ぶれて、殿は討死せられ、一門の方々も、大方は陣歿せりと云ひければ、夫人は大に驚き悲しみたりしかど、されども、なほ、奴僕のいふことなればとて、半信じ、半疑ひて、心もこゝろならず、案じわづらひてありしほどに、さきに軍に從ひ行きし僧、及び子息時清の從者二人歸り來りて、氏清の死を報じたり。こゝに至りて、夫人は、さりともと、わづかに頼みたる、はかなきたのみの綱も切れはてゝ、いとゞ悲しく、しばしはものも覺えず、泣きかなしみ、あこがれたりしが、武士の妻が、かゝることありとは、兼ねての覺期にてありけるものを、今更歎きて何かはせんとて、漸くに涙を收め、僅に聲を出して、さて、時清滿氏等が最期は如何にと尋ねらるゝに、恙もなくて丹波におちのび給ひぬと答ふ。夫人聞きて、家僕の面を、暫くはものもいはずしてうち守りしが、

軈て、はら〳〵と涙をこぼし、さても淺ましき兄弟の子や。むかし平の知章は、わづか十六歳ばかりにて、かしこくも父に代りて、一の谷にて討死し。藤原の阿新丸も、また、十二歳にて、父の資朝公の流されし佐渡の島へはる〴〵とあこがれ渡りて、遂に敵のやからをきり殺したりとか。楠の正行公も、また十二歳の折り、櫻井驛にて、父にさとされし言の葉を固く守りて、遂に四條畷に戰ひてうち死せしといふ。敵にても、身方にても、かくありてこそ人の子と呼ばれ、武士の子と稱へらるゝものなれ。かゝる子を持ちてこそ、武士の親ともほこるべきに、あさましや時濟、口惜しや滿氏、ふたりははや弱冠は越えながら、たま〳〵戰に臨みて、父のみを先きだてゝ、敵に後ろを見せ、おめおめと逃れさり、天下に嘲りを遺すとは、言語に絶えし果てし淺ましき行ひ、賤夫下郎にも劣りし未練なるこゝろ、潔よき子を持ちてこそ、譬へ後るゝも、捨らるゝも、少しは慰さむ方もあらましを、さぞかし穢なき子を持ちて、共に天を戴き居りて、恥かしきおもひをなさむよりは、せめて己れのみは、夫の後を追ひて、はやく黄泉の下にゆかんとて、涙を袖にせきとめせきとめ、傅姆なりける難波の局に向ひて、ねむごろに後の事ども賴みきかせ、たゞちに刄を手にして、自害せんとしたりしに、悲しさと、いとはしさに、なぐさむ方もなく、唯泣きに泣きをりし難波の局は、かゝるさまを見て、大に驚き、急ぎつきて、刄を奪ひ、さて、思召のほど、御歎きのほどは、誠にさることながら、あながちに此の世を急ぎたまふばかりが、大殿へつくさせ給ふ道とは覺え侍らず。先づ御心を靜めさせ給ひてよ兎に角に存命させたまひて、此の世ながら、弔らひ給はんこそは、中々に死ぬるにはまさる御志とおもひ奉るなれ。さりとも、なほ此の世を急ぎたまふならば、此の身をも共に連れさせ給へ、生ひ立ち給ひし折

りより、從ひまつりし身の、御身を先き立て奉りて、老の身のひとりながらへて、何かはせんとて、くどきつなぐさめつ、やう／＼に死をとゞめ奉り、家の奴して、夫人をば肩輿に乘せ參らせて、堺を發して、土丸に走らむとて、日根野といふ處へ着きて、暫時やすらひしに、輿のうちにたゞならぬもの音のきこえたり。人々驚きあやしみて、うちを伺ひしに、夫人は刀を取りて、胸のあたりをつき給ひしかど、なほ息は絕えずおはしたり。人々は悲しみ歎きて、急ぎて土丸に到り、療養を加へて、根來といふ處へ匿れ居りしほどに、夫人はきつと思ひたちたれど、湯藥をものせで、ひたすらに死をのみ俟ちぬ。

去るほどに、兄弟の子は、此のことを遙に傳へ聞きて、馳せ來りて、姆の難波の局によりて、母なる人に、まみえむことを請ひしに、夫人は頭を掉り、聲をふるはせて、叱りていふやう、父の討れたるをも顧ず、徒らに、生をむさぼる、きたなき子、匹夫の子を持ちしと思ひてだに、淺ましく、口惜しく、今生の遺憾におもふものを、其の行ひを耻ぢもせず、悔ひもせずして、此の母に逢むとするおろかさ、さばかりの忘れものは、我子にはあらじ、聞くもいまはしとて、衣ひきかつぎて、又ものもいはざりきとぞ。誠に潔ぎよくも、道理ふかき事共なりけり。

兄弟の子は、大に耻ぢて返す言の葉もなくて、何處ともなく走り去りたりしが、婦人は遂に、明德の三年正月の十三日に、果敢なくなりてけり。げにあはれなる最期なり。難波の局及び侍婢の三人、夫人のなきがらにとりすがりて、前後も知らず泣き悲しみたりしが、今は此の世に誰を待ち、誰を賴まむとて。遂に傍野川に身を投じて、死にたりとは返す／＼もあはれのことや。

婦人死にたるのち、あらためし見しに、掌中に物ありけ

り。よく〳〵見しに、去年の冬十二月七日、氏清が八幡の陣より、夫人に送りし文なりけり。其の末に。

とりねずばきえぬとれもへ梓弓
　ひきてかへらぬみちしばのつゆ

とありたり。なほほかに一枚の疊紙に、

しづむともれなじくてえんまてしむし
　くるしきうみのゆめのうきはし

といふ、夫人の答歌を、水ぐきのあともあはれに記しありけれど、見るもの、涙をこぼさぬはなかりけりとぞ、あはれ、古の女子は、かく死を以てその夫にむくひ、又其の子をも敎へけるなり。

烈女山本りよ女

重田星江

この一篇は烈女が姻戚、播摩國、神東郡、西田原村なる藤本達次氏より送り來されたり。故人大河原徇賢氏の撰文をもとゝして、假字文に書き綴りたるものなり。烈女が傳説、漸く亂れゆくことの悲しく、且つは烈女が名を表し、藤本氏が志をも成さんとての業なり。

國に法度なしとにはあらねど、武家の昔は今の大御代と事かはりて、裁判と云ひ警察と云ふものゝ、よくは備らでともすれど、いつまでも怨をのみ、耻をしのぶもの多かりしかど、復仇といふ事ぞ〳〵物の文にも見ゑたり。

播摩の國、姫路の城主、酒井雅樂頭忠實が家臣に、山本三右衛門といふ士ありけり。さして重き際にはあらねど、上に事へては忠實に、下に臨みては峻嚴に、聖賢の教を尊みて、身に非禮を近けず、藩中にも重ぜられけれど、三右衛門いよ〳〵忠勤を擢んでけり。されど終には擧げられて、江戸に在りて、會計のことを奉行してありしが、はかなくも日頃又なきものとたのみた

る龜藏と云へる僕の爲に、非業の最期をなんとげたりける。

三右衛門は直ぐなるものゝふなり。龜藏も亦すぐなる下部なりけれど、聞くもの疑はざるは無く、今も其故よしを知るものなし。されど主従が間より考ふれば、同僚の心曲れるが、三右衛門を憚るあまり、龜藏をたのみかりて、主に刄を加へさせたるにはあらじかといふものあり。

天保四年、しはす二十六日、年もくれになりて、日數も殘り少なになりにければ、質素を守れる武士の家ながらも、さすがに萬づに忙しきに、三右衛門は奥まりたる一室に、黄金の箱を右に置き左よりさすともしびに兩鬢の白髪の數をよませて、端坐したり。筆執りてさら〳〵と書きつくるは、出納のことなるべく、ひとへに見入りつゝうちうなづくは、思ふ節にかなへることのあればなるべし。何時の程よりか降り初めけん、庭の呉竹音するは雪の積ればなり、夜も深けて東叡山の鐘の聲に、臥戸へとうながさるゝに三右衛門もやをら立ちあがらんとする折しも、門に人馬の響して、内よりも應ずるけはひなり。やがて龜藏は三右衛門があたり近う進みて、消息様のもの差し出せば、三右衛門は手に取りて披き見んとす。龜藏は立てり、三右衛門が後ろにまはれり、腰なる一刀に手をかけたり、刄は鞘を脱けいでたり、三右衛門は神ならず佛ならねば、露心づかず、讀み了りて心におちぬことやありけん、龜藏と召す、アといらふ一刹那、ひらめく劍、うちこむ鋒、迷へるかといふ聲叫びはやがて無念とひゞき、逃さじとてあはたゞしうも騒ぎたてりしが無慘にも仆れて跡は寂寞、唯聞ゆる見越しの松の雪を拂ふ音は、落ちゆくものゝあればなるべし。ろの物音に驚きて一族のもの出で合へど三右衛門あけに染みて事きれたり、歎きつゝ、涕ながらに遺骸をを

さめ公儀にも聞ゑて、厚く野邊のいとなみをして年は明けにけり。

三右衛門に一女あり、名をりよと云ふ。今年十七になれるが、庭の教嚴かなりしまゝに世を羨む心も無く、人を妬む事もせで、此日よりは髪も結むず、容をも顧みず、朝夕に父が魂ともせし遺物の業物とりいでゝは前栽の立木に己のが力をぞ試みける。あはれ婦女子のかよわさには、二振三ふり、早くも雙の腕は動かずなりぬ。肩も摧けよ、腰も折れよ、摧くるまで折るゝ迄と、心を勵ましつゝ、四振より五ふりに、五振より六ふりに、疲れ果てゝは、假ろめの轉寢のゆめにも亡き父を見る事の度重りけれど何時までか公儀の沙汰を待ちすぐさんとて、狹き心の一筋に思ひつめて、明日にもと志したること幾度か。

りよ女が叔父に九郎右衛門といふものあり、國老本多意氣揚が家臣なり。りよ女が切なる志にめでつゝもろ共にとは思へども、妻もあり兒もある身なれど、後髪ひかれて日をへしが、何時なにかもれたりけん、意氣揚聞きて九郎を召し、深く其が志を喜び、力を盡して専ら仇を尋ねよとて、助光が大刀一口に黄金さへ添へて、與へけれど、今は心易うなりにたれど、悲しきは仇と目ざす、龜藏が面ざしを九郎もりよ女も露知らぬ事になんありける。

くもりなき心の誠は神もめで給ふなるべし。りよ女が奴なりける文吉といへるものゝみともにもと乞ふに二人はこをどりして、今はとて急ぎ立ちて、先づ山陰をたどり、北陸にかゝり、隈なくさがし求めありけども、雲より雲の旅路なれど、心細さ云はん方なし。殊にりよ女は習はぬ事にしあれど、ともすれどゆく道のはかとらで、なか〱に心許なければ、江戸に殘し留めて、九郎は文吉を率て四國より九州へと志しゝが、播州室の津に渡りし折、九郎ふといたづきの床に臥してけ

り。初めはかりそめの事とのみ思ひしが、日々の疲れの一と時にもやおこりけん。追々に重りて、黄金も何も、藥の代となしはてつ。殘れるは枕邊の太刀なれど、流石に主が情の賜なれど、是を金に代へんも本意なくて、文吉がまめ〳〵しきをせめてもの慰めとはして、心ならずもあたら月日を旅の宿に過しゝが、何時しか姫路藩に聞えければ惠み送れるものも少からず思ふがまゝに藥をも服しえて、危き命を拾ひ得て、大坂にかへりたる頃、風のたよりに、讐なるもの、、尙江戸に在りときけり。時は天保六年の六月なり。

二人にも增して憐なるは、りよ女が上にぞありけれ。二人が文のおとづれも絶えて久しく、春過ぎて夏きたり、秋とうつり冬とかはりて、今は一と年のめぐり來ぬれども、尋ぬる仇には廻り逢はず、昨日も今日もおくつきの前に打ち伏して、涕と共に詫言を繰返すさへ悲しきに、手向る香花の間にも、ありし〳〵と亡き父が面影の眼に映れど、はなたじと慕ひよりつゝ、聲をかぎりに泣き叫ぶなど、女子の憂さとつらさはとり總べて、りよ女が上にかゝりけり。

明くれど天保六年。月も數を重ねて、七月とはなりにけり。その十二日と云ふに叔父が主從、大坂より上り着きしかど。りよ女が心も勇みにいさみて、いよゝ佛神の冥助を祈りぬ。次の日共に淺草に詣でゝ、行かふ人毎に怪しき迄、咏め入りてありけるがふと心づけど、足もとなる放生池より上りくる龜の甲の二つにさけたるが此方を指して這ひ寄れど九郎は、掌をうちて、さてもめでたき兆にぞと取り上げて、押しいたゞき、もとの池に放ちて、いでたちぬ。兩國の橋つまに來どし息ひし折しも、群れゆく内の一人の男の、よくも龜藏に似たりと、文吉が云ふまゝに、近きて窺へど、まがふ方もなき讐になんありける。いざとくとはやる文吉を制して、龜藏があとを慕ひゆき、淺草寺院原と云ふ

所に至りて難なく龜藏を捕へたり、りよ女後れて走りより、一聲父の仇と呼ばゝりて身を躍らしつゝ斬り込めば、刄はうなぢより胸に透りて、唯だ一と太刀に打仆してけり。九郎も繼きて吭をさしゝかば、こゝに年來の宿望を遂げて、父の仇をぞ報ひたりける、人して公儀に聞えしかば司人も來りて、唯だりよ女が太刀業を歎くばかりなり。時の町奉行、筒井侯三人を召して、ねもごろに、此年の靈迎へに上なき手向草を得たりと說き。姬路の二侯もあまたかづけ物えたまへり。やがてりよ女は父の家を嗣ぎ、祿も更に加へ賜はりしかば、知る知らぬ其が孝烈を稱へぬ人は無かりしとぞ。

あはれ天保浮華の世に生れ、眇々の少婦にして、不俱戴天の仇讐を擊ちとめたる孝烈りよ女が如きは、今むかし多く得べからざる女子なり。其行はいはゆる權道に過ぎざれば、明治の聖代に求むべきにはあらざるべけれど、其志の高きと心根の健な氣なるは、今日の姬達にも望まざるべからず。婦女子の地位はやうやく上りて、やがて神代の樣にもかへりなんは、心ある人の限なき喜なり。されど姬達心して才學の末にのみ走せたまはずして、願はくは、りよ女が古に鑑みて、今の世に適ふべき女子の道を修め給へかし。

わりなしや
こゝろにかなふ
なみたゝに
みのうきさきは
さまりやはする

たらちねの
おやのまもりさ
あひそふろ
こゝろはかりは
せきなさゝめそ



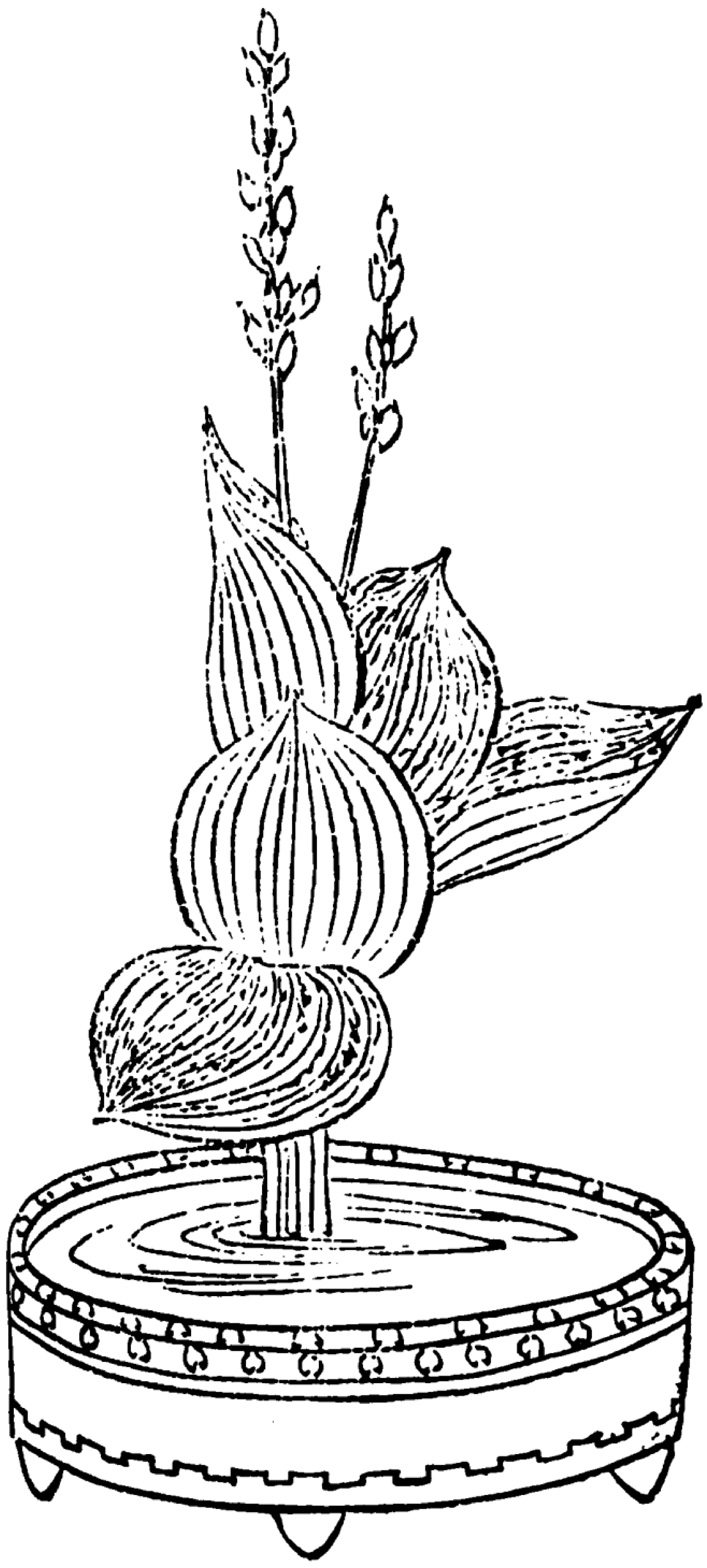


活花（第七）　田邊わけ子

玉くしげ二度三度吹あれし野分の後のせんざいとかり、哀れに口をしきものはあらじ、あかず見し花の錦も、かるかやのしどろもどろに折れ伏してせんすべなくぞ、見わたさるゝ、されど何をか花瓶にさゝむと駄下駄にむちてそうたね、とび石づたひあゆませてこなたかなた求むれどさるべき花もあらざりけり、はるかあなたの松かげなる、立石のほとりを住どころとしたり顔に咲殘りたるは葱花なりけり時過たれど一とせに二たび匂ふこゝちして中〳〵にめづらしけれど、手折來て活花に心をよするをとめ連に見せ侍らむ、そも此葱花はゆかしげなき花なれど葉物の一種にして、普通の花の活かたに變れは、花瓶は砂鉢を用ゆ、いかはとあまた活まほしくおもふとも、はなは二本にかぎるなり、葉は五枚七枚また八

第六（第二圖）





九枚、花の丈けによりて見はからひ給ひねかし。

葉物とは葉を主として眞副體の容ちを見るものなれども、かくはいひならはしたり。されど他の花の體に用ゐることなく、他の花を活交せざる定則なり、世にはこの法をわすれもひあやまりて、薄の體に葱花を用ゐて活たりとか傳へきゝぬ、さるひがごとなからしめむためおこがましくも左に葉物のあらましをかゝげて參考にそなふ。

葉蘭　菖蒲　紫苑　葱花　萬年青　芭蕉　蓮
水仙　杜若

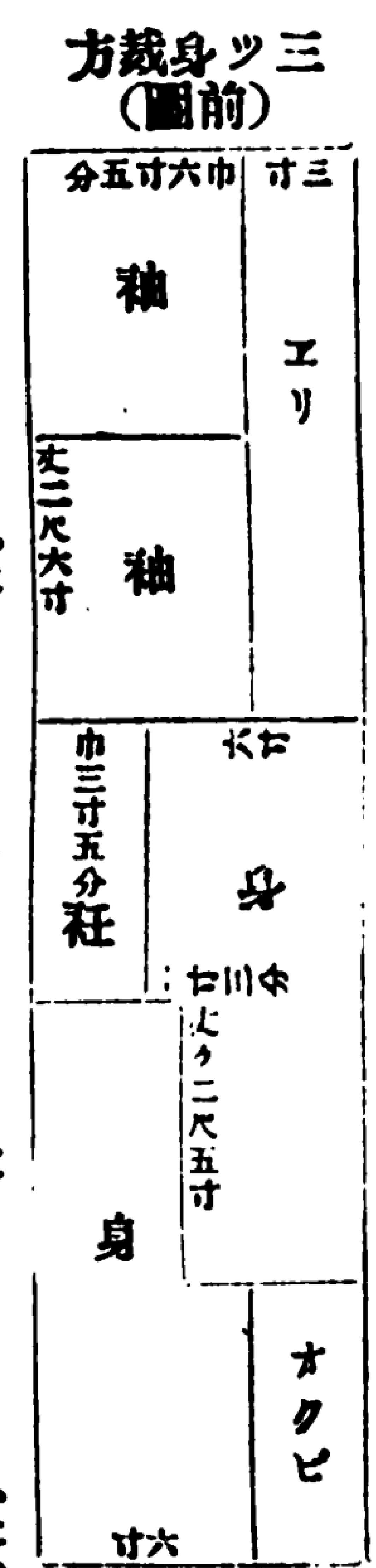
又葉物にして、他の花の體に用ゆるものは、などなり、されど用ゐるにも時期あり、そは其花の活かたをかゝぐる折にとかきのこしつ。

西山たい子

（九）三ッ身の裁ち方

三ッ身は、三歳より六歳までの、小兒の着用と定めあるものなれど、其の子の大小によりて、年には應じがたきものなり。三ッ身は、並なるは一丈二尺七寸にて裁てるものなり。

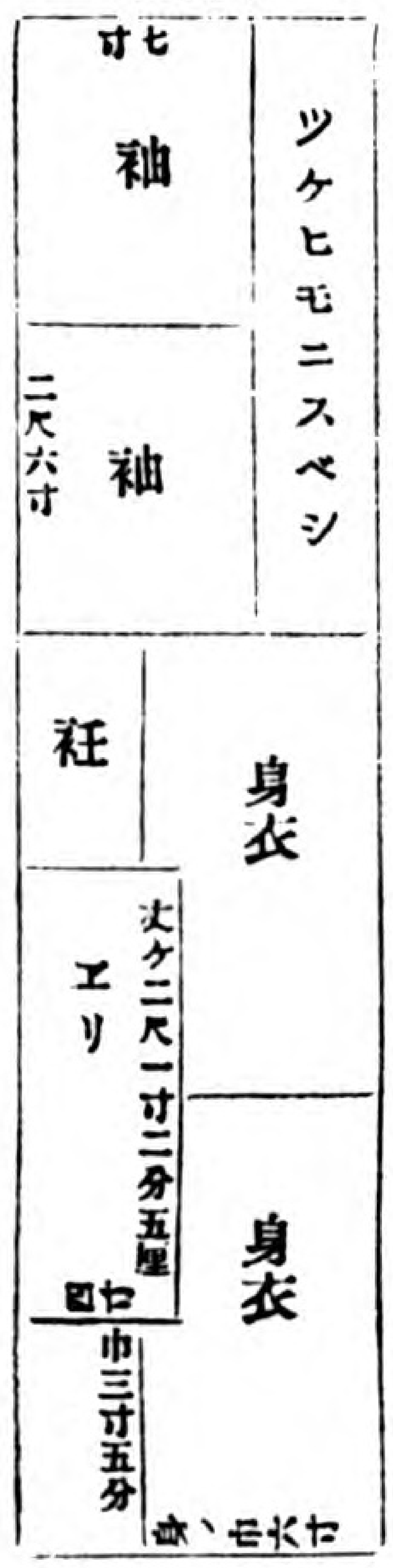
三ッ身襦袢をたちし如くに、まづ袖丈四つぶりをとり、その袖の披より、襟をとりて、例の如く、袖を二つに切りて、兩袖となすなり。そこにて殘りの切をとりて、三つ折りにして、裁ちゝがへて身衣となし、其の背のわきより衽をとるなり。三ッ身襦袢の裁ち方に、委しく云ひたれど、此處には大方に記るしおきぬ。よく前圖の方を見合すべし。



去かし、此の裁ち方は、兩面のものに限るなり。片面にては叶はざるなり。されど同じものを、二枚たつには、身衣を讓り合はすれど、宜しきなり。少し丈けはみじかくても宜しと思はゞ、左の後圖の如くして裁てど、片面のものにても出來、前巾も少しは

廣くできるなり。よく圖を見合すべし。

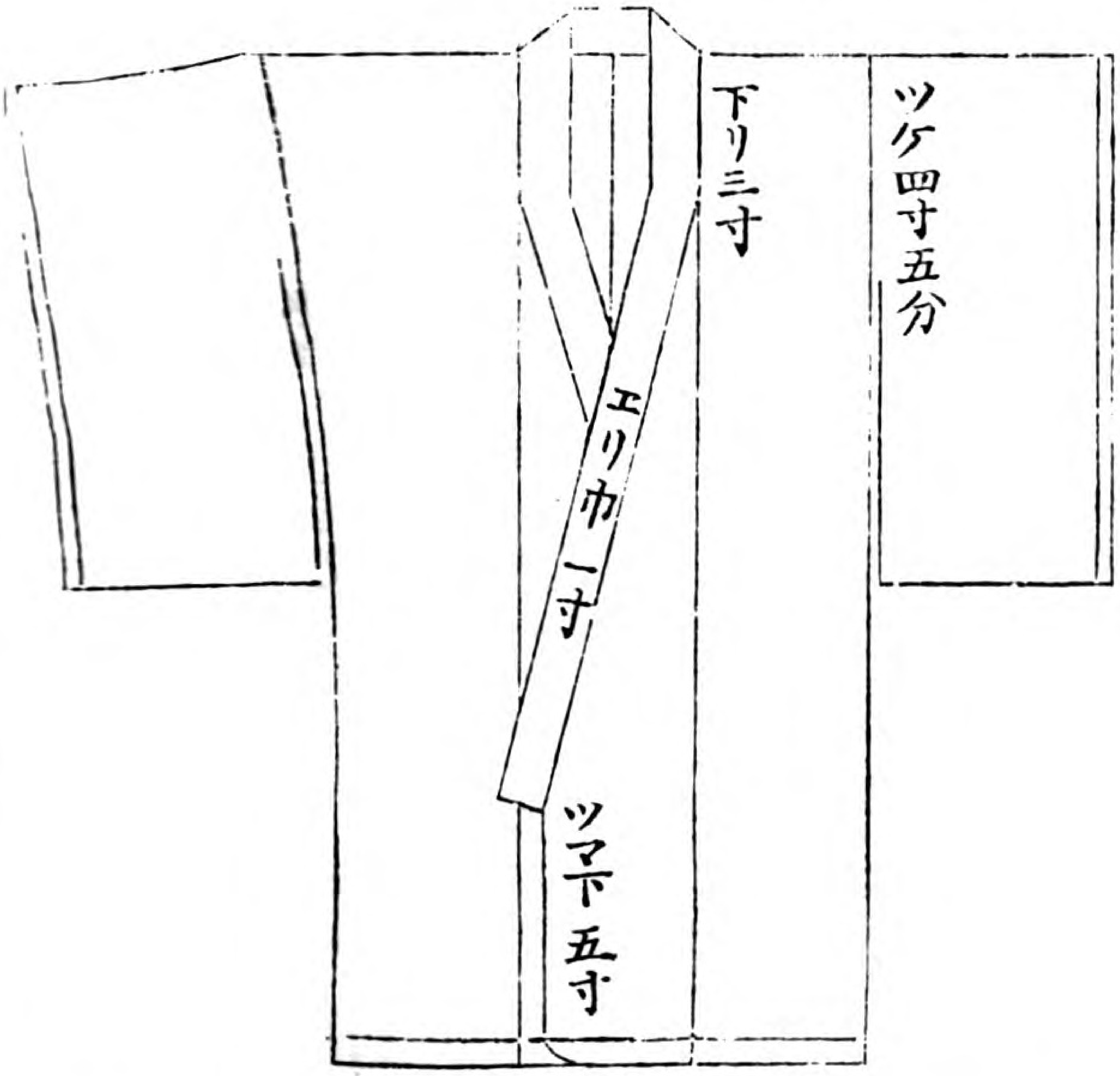
三ツ身裁方（後圖）



寸尺は、圖の中にかきこみたれど、此處には云はず。

（十）三ッ身綿入の縫ひ方

三ツ身綿入縫上り圖



三ッ身は一ッ身とは、たゞ〳〵背を縫ふことの、加はるばかりにて、あとは皆同じことなり。先づ袖を縫ひおき、背、及びわきをぬひ、衽をつけ、襟を附け、一ッ身の如くにして、綿を入れ、ひきかへしてくけあげるなり。單物、袷等も、一ッ身にたゞ背の、ふゆるばかりにて、皆同じなり。

寸尺は、縫ひ上りの圖にあり、よく見合すべし。

だいどころ

豆腐料理四種

煎豆腐。『清潔なる布巾の類に豆腐を包みて、其水を絞り取り、之を沸騰したる湯の中に投じ、其湯の再たび煮立ちたるを待ちて、豆腐を絞り上げ、煮出と味淋（砂糖を味淋に代用するも宜し）並に醬油にて鹽梅し、之に雞卵を掛け、汁の盡くるまで煎り、別に細かに截りて味を付け置きたる椎茸、人參、蓮根、の類を之に混和すべし。生薑を加ふるならむ、生の儘なるをよしと

す。

擬製豆腐。」前の煎豆腐に更らに鶏卵を加へて好く攪き回はし、之を鶏卵焼に入れて五分間程焼くときは出來るなり。但し豆腐三個に鶏卵一個位の割合にすべし

空や豆腐、鶏卵を割り、之に煮出しを加へて好く攪きまはしたるものを、茶碗に盛り、其中に絹漉豆腐の適宜に切りたるものを入れ、蒸籠にて蒸すべし。扨て別に薄きアンを拵へ置き、其蒸せたるを待ち蒸籠より出してアンを掛くべし。山葵又は生姜杯の摺りたるを添ふるを佳しとす。

白菊豆腐。」豆腐を稍々丸形に切り、之に縦横の庖丁目をいれ、煮出しを鹽梅したる汁の、煮立ちたるを待ち、此豆腐を入れるなり。豆腐の切口開らきて菊花に似たる形になるゆゑに此名あり。

漬物五種

蕪のアヂヤラ漬。」蕪の後先を切去りて皮を剝ぎ、之に細かく格子形の庖刀目をいれ、鹽水又は酢の中に一時間程浸し置き、扨て砂糖のアクを引きたる汁に唐辛好き程を入れて、煮立て、其冷たるを待ち、前の蕪を其中に投じて、一日程漬け置くときは、蕪の形花の如くになり味も亦たよきものなり。

茄子芥子漬。」先づ小茄子の後前を切り、好く洗ひ置き、茄子二升に對する一升位の割合に鹽水を作り、之を煮立て丶冷し、其冷却たる處に茄子を入れて一夜の間壓漬となし、翌朝其茄子を出して乾かし、扨て好き程の瓶に芥子一升麹五合味淋一合(瓶の大小其他の割合は茄子の多少によるものと知るべし)を入れ、芥子と麹の能く混和して、ヤハラカになるまで酢を加へつ丶攪きまはし、芥子のき丶たるを待ち、其中に前の茄子を入れて、漬込むなり漬込たるとき、上層に茄子の形の出ぬ様、芥子と麹の混ぜたるものを充分厚く上に置き、其上に竹の皮を粘附け、又其上に小石をのせて、壓となし。夫れより瓶の口を厚つ紙の類にて充分に包み、氣の泄れぬ様に爲すべし。五六十日を經れば茄子の味いづるなり。

茄子麹漬、小茄子の後前を切り去りて能く洗ひ置き、鹽水を煮立て丶後、冷却たるを待ち、紫草實と麹に唐辛少量を細かにキザミたるものを前の茄子と共に瓶に盛り、冷却たる鹽水にて漬け、上に壓を置くべし。十日間程經れば出來るなり。但し鹽加減はあまき方宜ろ

し。

菜漬。」先つ菜の株を切り去り、庖刀をいれて、好く洗ひ、清潔なる樽に菜一層を詰むる毎に、鹽を撒り掛け、其一杯に詰まりて後、上に押蓋を置き壓石をのせ強く壓し、水の上がるを見て後、其壓を緩くすべし。始終壓を強くするときは菜コハクなるなり。注意すべし。但し鹽の分量は早く用ふるも貯へ置くとにより、異なれども、四斗樽に漬けるなれど七八合より一升位とす。又た茲に菜と稱するは唐菜。三河島菜の類なり。

淺漬。」大根を好く洗ひ、別に麹と鹽を能く混和し置き、樽に大根一層を詰むる毎に、此混和物を撒り掛け、一杯に詰めて上に押蓋を爲し、壓を強く置くべし。水自然にあがりて、大略二十日間にて漬かるなり。樽は酒樽のあきたて最もよろし。又た分量は大根五十本に麹一升五合鹽一升位の割合なれども、大根の大小並に鹽のアマキとカラキ好われど、見計ひ加減すべし。



學園

わが學園（五）

鹽井正男

古代の歌謠の形態に就きては、四五回既に伸べ來りたれど、大概これを盡くしたり。唯五句三十一言の短歌につきてのみいひたるやうなれど、あながちに五句三十一言の歌謠にのみ、限りていへるに非ず。前條のべ來れる形態上の事は、大かた、長き歌謠にもわたりたる形態なり。すなはち、其の五七調なる事、同音、同語、同句を繰り返へす事の頻りなる事、又懸詞など稱すべき言語上の細工なき事、順々たるなだらかなる句調の多き事など皆然りこれ前にもいへる如く、古代には長歌短歌などいふ區別も規則も在らざりしなり。長きも短きも、皆一樣の歌なりしなり。これは長歌といふものなり、これは短歌といふものなりなどいふ區別は、決して存せざりしなり。唯感情の複雜したるも

の、大なるものは、自ら長くうたはれ、感情の單純なるもの、小なるものは、自ら短くうたひ出でられたれど、さてころ〳〵さま〴〵長き短きがあるなれ。長きも短きも、皆おなじく、まのあたり事物に感動せられて、人情の自ら言餘にあふれ出でたるものにて皆おなじ歌謠なりしなり。決して後世の如く、五句三十一言のを短歌なるものと稱し、其の上の長きを、長歌と稱するものとなり、短歌は斯の如く詠むべきものなり、長歌は斯の如く詠むべきものなりなど、種類に規則に區別する如き事は古代に決して無かりしなり。故に、古代の短き歌長き歌皆一樣の歌にて、一樣の形態の歌にて、唯短さと長さとによりて、かつ〳〵別ありしのみ、故に五句三十一言の歌謠の形態に就きて、前條いひたる事は、大かた其以上の長き歌謠にもいふべき形態なり。其の上に、長きものは、感情もと複雑なれど、其の形態も又自ら複雑にして、對句聯句疊句或は對語聯語疊語と稱すべきもの自ら巧みなるあり、又詞のあやも、後世の如く殊更に歌人といふ技術家が彫刻細工したる如きあやには非らざるも、自然に成りたり自然に面白き詞のあやあり。また自ら抑揚波瀾の妙あり昭應起結の美あり。

例へば、第九十三號の學園欄内に、十七首あげたる古代の歌謠の中なる第十三の日本武尊の御歌より、第十四番なる大國主の御神の御歌及び、第十五なる神武天皇の御製、及び第十六なる吉野國樔が歌、第十七なる雄略天皇の御歌など、皆心して讀みて見られよ。おのれが殊更にいはずとも、自ら孃たちが胸に、おのれが云ひつる事の影の、明にうかびいで玉ふらむ。其の時の例歌に擧げ置くべきを泄らしたれど、今一首神代の歌を加へむ。

あめなるや　おとたなばたの　うながせる　玉の
みすまる　みすまるに　あな玉はやみ谷ふたわ
たらす　味耜高彥根の神ぞ。

これは、天若日子の薨ぜられし時、其のいもにませる下照姫の御歎きの限りなきをきゝづけて、下照比賣の同母兄なる阿遲志貴高日子根神といふも、常に天若日子神と親しきおん中にましましたまひしかど、その喪をとぶらひに來たまへり。天つ國よりも、天若日子の父や家族やなど、悲みまどひてとぶらひ來たりしが、阿遲志貴高日子根の神の御容姿の、大に天若日子の

御容姿に似たまひしかど、天若日子の家族どもがこれを思ひたがひて、天若日子はなほ死なでありけるかとて悦びけるをきゝて、阿遅志貴高日子根神は、吾は親友の喪をとぶらひに來つるなるに、吾を汚き死人やと見るとは腹立しやと、大に恚りたまひて、喪屋を踏み破りて飛び去りたまひし時、其の妹にまします下照姫が、兄神の御名を示さむとてうたひたまへる御歌にて、後に宮中の大御歌にて、夷曲と稱してうたひはやしたるものなり。これと共に、同時に同姫のよませたまへる歌あり、やはり夷曲とて大御歌にてうたひたる歌なり。それは、

天さかる　鄙つ女の　い渡らす瀬戸　いしかは片淵　かたぶちに　網はりわたし　女ろよしに　よし寄り來ね　いしかは片ぶち。

といふ歌にて、此の二首を夷曲と稱するは、則ち、天さかる鄙つ女の鄙より附けたる名なり。此の二首をかりても古代の歌謠の長きもの、疊句詞のあやなどの面白さを知るを得む。對句聯句の有樣に附きては、第十四にあげたる大國主の御神の御歌を見よ、よき例なり。

古代の歌謠の心

古代の歌謠にうたはれたる心情は、やがて古代の人の情なり。今それをかいあつめて、うちあむずるに、君をあがめ、國をほめ、夫をこひ、妻をかなしみ、親をしたひ、子をおもふなど、忠孝節義のまめやかなる情にあらざるはあらず。殊に、其の中にて最多きは、男女の間の情、即ち夫婦の間の情をのべたるものにて、ゑかのみならず、歌謠の中の美妙なるにも、此の情をのべたるが最多く見ゆるは、自然の事ならむ。其の他に耳立ちてきこゆるは、天皇を尊み、大君を敬ふ心をうたひ出でたるものにて、古代の人の順々朴々たる素直のさまの見ゑて、なつかしき限りなり。

古代の人の、天皇につかへてまめやかなりし事は、著き事にて、垂仁天皇の大御代には、三宅の連の祖なる多遅摩毛理といふ者、常世の國の橘の實を採り來らむ詔を賜はりてけれど、直に其國にわたり、其木の實を採りて、急ぎ歸り來りたるに、かなしや、天皇は既に崩れさせ給ひし、後なりければ、多遅摩毛理の悲嘆、いふべうもあらず、なく〳〵も、天皇の御陵の戸に其木の實を擎げて、常世の國の橘の實をもちて

參りのぼりて侍るよしを奏し、遂に叫哭び〳〵て死にたりといひ、又仁德天皇の大御代には、口子の臣といふ者、山城の筒城に籠らせ給へる大后の御心をのどめて大宮にかへりわたられむやうに、はからふべき天皇の旨をうけたまはりて、直に山城にまゐりのぼり、筒城の假宮のみ庭にひれふして、頻りに大宮に歸らせ玉はむことを乞ひ奉りてさからず、雨いたうふりて、庭たつみは、腰をひたすばかりになり、紅き紐つけたる青き摺衣を着たりけるが、水にぬれそぼちて、青き衣の紅になるまでになれゝど、なほ乞ひ奉りて、退かざりしといふ。かゝる昔語りは、なほ多かり。さどかり君を思ふ赤心の深かりける世の中のさまなりければ自ら歌にうたひたる心にも、君を思ひ君を敬ふ心の切なりけむ。

かしのふに、よくすをつくり、よくすにかみし、

いやしき吉野の國樔人が、大御酒を獻せる時の詞にも。

大御酒、うまらにきこしもちをせ、まろが父。

とうたへり。言の葉は鄙びたれど、君をおもひ君を尊める赤心は、何となく言葉の外にはひこばるゝやうおぼゆ。

或は春日の袁杼比賣が歌

やすみしゝ、わが大君の、朝戸には、いよりたゝし、夕戸には、いよりたゝす、わきづきが、したの板にもが、あせを。

天皇が朝夕よりたまふ脇づきの下の板にも成りて、始終天皇がほとりに添ひまゐらせたしといふ、何ぞ其の心のまめやかなる。

或は八田の若郎女が、仁德天皇に答へまつる歌

やたの、ひともとすげは、ひとりをりとも、大君し、よしときこさば、ひとりをりとも。

大君さへよしときこさば、此の身は一本菅となりて、むなしく一人り居るとも、更に惜しむ所は侍らずといふ。誠に天皇をたうとみ、有り難きものにうやまふ心、君が一言の誠には、妾が百年の命も、更に惜しからじといひけむ心にも立ちまさりて、あはれにおぼゆ。なほ古代の心情に就きていふべき事多かれど、今回は餘り長くなる故に、次號へ讓る。



漫録

歸家の日記　故人　井上通子遺稿

堀田璋左右寄贈

しきしまのやまと
にしきもから綾も
手にまかせたる
たつ田姫かな
あつ子

年經てすみし武藏鐙、さすがにかけはなるゝ東路のなごりをしくかなしさをかきあつめて見むもよしなしや。一とせ故君の仰を承り、御言の葉のふかきめぐみによりて、身のつたなきをもおもひわかで、はるけき海山のさがしきをしのぎてまゐれる心ざし、あさからずおぼしわきて、御側にのみ朝夕ならさせ給ひて、萬づに御心をくはへておぼしいたらぬくまなく、いたはりおはせらるゝをぞ、いかでかはいとゞおろかにも思ひ奉らむ。いとになうたのみきこえ奉りて、十とせにちかき年なみの立かさなれるも、たゞきのふけふの心地ぞする。あくよなうつかふまつりし御かげに、かく俄なるやうにて別たてまつりしかぞ、夢うつゝのさかひもおもひわかたれず、いとゞうき身をえうなきものにおもひすて侍るを、とゞまらせ給へる御子達御はらからをはじめまゐらせて、有し御心に叶ひておぼしめしつるものをとて、いとかたじけなくねんごろにおはせまつはして、何事をもおもたゞしきさまにおぼしおきてたる御めぐみを見奉るにつけても、なほこしかたのかへらぬむかしとなりぬるはかなさのみかず〲におもひつゞけられて、かきくらしつゝ過すほど、つ

き日のうつりかはりて、わかれ奉りしをりのへだゝり行も、かなしくおぼえらる。親の年老てせちにこひしと覺ゆめるは、げに周公の聖にてだに、東山の三年をなげき給ふ、ましておろかなる心のやみに九とせの久しきながめもことわりに悲しくて、古郷をかへりみんとおもひなりぬるを、とゞめまほしくおもほしたる御かたぐ\の、御心どものあさからぬ御言の葉の、なさけもかず〳〵にわすれがたきふしども、おほかれど、かく草まくら思ひたちぬるなごりをしみまゐらせんと、かなたこなたに、よかいつかのほどゝ、おもひてまゐるに今一日〳〵とせちにとゞめさせ給ひて、卯月の廿日頃より、さつきのつごもりつがたまで、外にさむらふ。おゐ待せ給ふらんと思ひ奉る主君もなければ、家路忘れてをのゝえくたしけん人の心ちして歸るを、こなたにも獨り御心ぼそくて詠め給ふ。女君おろかりつと待うらみさせ給ふ故君の、御はかに參りて、是やかぎりと御いとま申程のいと悲しさ物にも似ず。此御國にだに侍らましかば、かくかひなき御跡にもたえずまうでまゐりて、なほそのかみ、おまへに侍ひし心地のし侍るべきを女にてさへあれど、一つ心にまかせぬぞかなしき。

あは雪のきえにし君があとをだに
きつゝ見んとは思ひかけきや

苔の下にあはれとやみるいまはとて
かけはなれゆく袖のしづくを

靈魂何處去遊衍　仰二見蒼穹一俯見レ泉
今別二高墳一歸二舊里一　空留二涕淚石碑前一

立かへる心地もせず、くらきにまどへるか如くになん。頃日まゐりしは、宗の君のおまへにてぞありし。石川の君の御家にわたらせ給ふ御かたよりもめせば參りて、日頃さぶらひぬ。いづく〳〵も今はとかけはなるゝほどの御名ごりをおぼしめしなやませ給ふもかたじけなく、侍らふ人々も袖引わきがたきまでぬらしそへ給ひつ。おなじふるさとにしたしきゆかりもたるなどは今一きは瀧まさるもおほかり、邦君の北の方の御まへにけふの晝つがたまでさぶらひて、なにくれと仰せらるゝ事どもつきせず、御ぞかづけさせ給ふほどなど、ゆゝしきまでこぼれ落るを御袖のうへにも露かゝる御けしきいと忝見奉る、御子達の日にそへてうつくしうをよすけさせ給ふを見奉るにも、祖ぎみのいか

むかり大事とればしかしづきつるものを、かく人とならせ給へるを御覧ぜさせたらましかど、とれもひ出奉れど、いとゞ別れまゐらせなん事わかず口をしう、侍らふ人々に、

恩情何浅九年好　別恨難レ堪萬里身
想見歸レ家隔二山海一　月前相望涙痕新

ふる里にひとりかへらむゆまつ鳥
　うきねをのみそ鳴わたるべき

をさなくよりつかふまつりて、かしらの雪となるまでかた時さらず、たのみきこえまゐらせし老びと、それより若きものりの道に心ざしあるは、かゝるみきはによをうみのあまとなりて、心ふかくおこなひ居たまへるなどそことにわらはが別をもかなしみ給ひて、かゝるはかなき言ぐさをいひすて侍るを見ても、いとゝ苔の衣の袂はかはきだにせず。心よわきけしきもあはれなり。其外日頃おなじみやづかへにて、なれ睦じかりつる人々の、たのがちら〳〵行わかれぬるなど、俄にかくと聞て、れどろき思ひて、出きたるそこらうとひて、とり〴〵にうしろみものしたゝめ、なにくれと、いとなみ出たる、いとうれしくたのもし。今宵はかなたこなたと文ともおほくかき、御歌の御返しなどつかふまつる。かしこけれどこゝにはもらしつ。夜ひとよ認めて、曉がた名殘をしくて、一ところによりふすほどもなく明ぬれど、いそぎ起出て、旅衣さうぞきかへ侍るほど、かたみの袖の雫はかきなかずも、玉しひの消る心ちすれど、其ほどの事とも、皆とゞめつ。わらはおいてのぼるは弟の益本なれど萬にうしろやすくたのもしき事限りなし。是も君の惠によらずは、いかでかは、まだ明はてぬほどにきて、あないしてとくたち給ひねといそがし侍れど、上下のある人馬々のはなむけすとて、盃出してとり〴〵に名殘つきせず、ゆたひ給ふもあれど、すが〴〵しく出もやられず。馬のたかくいはへたるなど、はなやかに聞ゆる物からいとかなし。

昔是來時飛二雨雪一　旅人墮レ指望二江東一
今將レ歸日苦二炎熱一　匹馬回レ頭嘶二暑風一

たびごろもわかるゝ袖に雲のなみ
　けふりの浪をたちやかさねん

女の飛さへたいはしめ給ふなる箱根、今切、二ところの關通すべきよしの御ゆるし、きのふ益本に下し給りぬ。元祿二年、己巳、夏六月十一日、出たちて、とは

き古郷にとて歸り侍る。御門出るほどなど、物もれば之すみな簾のもとによりていとま乞し給ふ。芝のさと品川とかいふ驛に出づ。しれる人々自から送り給ふも有、人おこせたるもあり、うちつれていづる商人の家ども町たてわたし作りならべたるわたりを打過ゆけど、海の面はるゞゝと見やらるゝいとめづらかなり。送の人人にも是より歸り給ひね、といふも、又逢見る事も有まじくやといと名殘をし。益本に物聞えかはして、是よりみな歸り給ひぬ。晝つがたゆくゝゝうちねぶられたるに、なほ有し御かたゞゝの御そむに、さぶらふと覺て、打驚て心むかりやかようらんの、御言の葉もわすれがたく思ひやりまゐらせて、こなたをればしめしれくらせらるゝにやと、

　したひこし君がこゝろかとゞめこし
　　わがたまひしか　かよふ幻

晝つがた立寄たる宿、いと涼しげなりれくなるれましに居て、とのがたを見やれむ、雲につらなりたる海原むかふざまにたかく見えて、げに末の松山をもこゑつべく、浪のたちかへるなどおもしろくて、爰に住む人さへにうらやましき。それよりいでゆけむさつき頃早苗とりつらんと見ゆる田面に、緑のいな葉いとうるはしく、まだほに出ぬほど草ぎる者の笠のみ見ゆ。田歌いとをかしく歌ふ。げになりはひのたやすからぬいとなみも、見るごとには一しほに思ひ知られて、素餐のとがおそろし。又山ぎはにはたうつ者の、身の色はすみの如くにて、汗おしのごひたる暑たへがたげなるは、夏畦よりもやめりと、苦しきたとへに、曾子ののたまひし、げにもとればゆ。今夜は戸塚といふ所に宿る。海づら近くならはぬ旅寢なり。まして女ぐしたれむ、益本もいと心ことに戒めありきて、戸ざしよく固めよなどいふ。されど今正しき道の末とほりて、武藏野の草ふす風、枝をならさず、よもの海靜に治まれるをりなれむ、白浪のたちよるべき恐もなし。

十二日あけぼのゝほどにやどりを出づ。

　露むすぶ草のまくらのかりふしに
　　やがて明ゆくしのゝめのそら

藤澤より相模河渡りて、大磯こいそを過、浪の音松の風にひゞき合て、いと高く聞ゆ。沖より汐風の吹上げたると、いふこまかなるいさご地にて、いとあゆみかたげなり。松の葉ごしに浪のよるなど繪にかきたるや

うにてをかし。晝やどる所大磯なり。親の敵討てはいとげたる曾我十郎が、はやく隙をうかゞふ便りとて、かよひなれけん女、とらと聞えしも此わたりに住みけるとか語りつたふ。

大磯歌舞地、昔日各爭レ研、虎媛其殊絶、十郎亦偏憐、墮樓觀二石氏一、宴席殆和田、不二是時宗至一、使二讎獨戴レ天、

夕がゝりて酒匂河わたる。いかなるにか水まさりて、乘物も漂よひながら人あまたかき渡して、事なく心ざす岸につきぬ。今夜は小田原に宿りぬ。此處に外郎がつたへし透頂香ればし。

十三日けふは箱根山こゆべしとて、とく夜をこめておきつ。よこ雲たな引ほど箱根山をこえかゝる。左も右もかさなれる峰々そびえて谷ふかく、落合たる水の岩間を行なやみて、むせぶ音なども恐ろしきまでに聞ゆ。松柏いと茂りたる麓の梢より、朝霧のたち渡りたるを見るに、そのかみ下りしをりの面かげ覺えて、

箱根山ふたゝびこねて見つるかな
ふもとの霧のあけぼのゝそら

登りいくほど、さがしく恐ろしき事かぎりなし。むかしこえきたりし跡ともたはえず、なづかしからぬわたりなりや。年ふりにたる大きなるいはほども、家のごとくにて、さし出たるも有。のぼる所はあふぎ、たふれぬべく下る坂には、まろびや落ぬべき、とあやうく心をくだく事たび〳〵なり。つねのことぐさに、わらはべもいふなる、かしの木坂、さるすべり、とてことにけはしきは、げに猿もあしをとゞめがたくやとぞみゆる。重き荷など負せたる馬どもいとあやうげに、かはゆくみゆ。

箱根山上幾崢嶸　古來回レ巖雲霧生
地利自然如レ設レ險　人瞻君德共和平

畑といふ茶店にしばし立よる。山の岩はを水ふねの如くしなして、落くる水をうけ入たり。瀧の如く流れたる、いといさぎよく見ゆれど、よりて掬ぶとて、

山水を手にむすびてぞおもひしる
ひさごをすてし人のこゝろを

山の上なる湖水を見る。もと行かよひし箱根路とて、さしゝめす。今は楊朱か哭しけん岐のごとくにて、いとふようにみゆめり。權現の宮とかいふ松の間にしろき壁など見ゆ。けふはさるべき日にや近き三島のあた

りよりとて、人々多くかしこに詣でぬる事道もさりあへす。水のほとりの河原に石をつみて、小さき塔のかたちに作りて、ねぶつなど、なふる僧有、地藏堂二つ三つ見ゆ。そこを過行て、關所にいたりぬ。ありつる御しるし益本もてまゐりて、かくとあないきこゆるほど、輿たて、待つ。こなたへとて、番する所ちかくよせたれは、そこなる人々老たる女よびせて、われもずさの女も、かれに逢つべきよしのたまふなり。と益本いふにより、たいめしぬ。髮筋など懇にかきやりつ、見る。むくつけなる女の年老たれど、すこやかにていとあらましきかちかやかによりきて、だみたる聲にて、物うちいひ、かくするもこゝろつきなく、いかにする事にかと恐ろし。居ならびたる人々、老女にくはしく問き、て、御印にたがふことなしとて益本に關とほしぬるよしのたまふ。げにいづくもあやまりなし、とおもふ物から、かつ威めしきわたりにたち出ぬれど、なほいかならんと胸つぶる、心地しつるに、いとうれしくて、人々よびせて過ぬ。峠にいたりて髮わけぬ。やゝ下り行坂になりぬるもうれし。三島を過るとて明神の御前にしばしやすむ。

まことあるこゝろばかりを手向るを
ぬさと三島の神やうくらん

今宵は沼津にとゞまる。　（未完）

蘆野婞女の上書

大林弘一郎

昔もろこし漢の文帝の代に淳于意の子に堤縈といへる少女あり、父の罪からむれるを嘆き悲みて、書を朝廷に上りて、父の刑をゆるされんことを乞ひしことは、彼の國の書を見し人のつとに知れる所なるが、この蘆野婞女が、父東山の罪を蒙れるをりに、上れりし書いことをぞ、却りて、知れる人も少く、從ひて、その事情のいかに哀れなりしかをも察するものなかりき。

東山は、世に名高かりし學者にして、その著書無刑錄は、さきに、元老院にて出板せられしが、東山、はじめて此の書を著述するに就きては、種々の辛苦をきはめたりといふ。はじめて、その稿をなすす時は、すなはち獄にありし時なれど、筆硯を得るにみちな

く、手の指をかみて、血をいだし、揚枝にそめて、書きはじめたりしが、後、筆硯を近づくることをゆるされたれど、墨にて之を草することを得たりといふ。

東山は、奥州磐井郡澁民邑の人にして、三宅尙齋、室鳩巣等に就きて、學問せり。仙台侯に仕へて、儒者となり、大に重んじ用ゐられしが、或時學校を廢にせんとて、建白する所ありしが、その言用ゐられざりしかど、また書を上りて、大に之を論じたり。これによりて、つひに、罪を被り、石母田長門の領地宮崎といふ所に幽せられたり。その頃、親族より上書して、赦されんことを請ひけれども、ゆるされず。娖女も、細にその事情を述べて、石母田氏に嘆願したりしかども、またゆるされざりき。

かくて、數年を經て、藩侯の代かはりて、始めて、赦されて郷里に歸りけり。安永丙申の年、八十一にて歿す。東山、名は、德林、字は世輔、又の字は、仲堀、又、茂仲、玩易齋、梅隱、貴明山下幽叟等の號あり。通稱を、勝之助、又、善之助、幸七郎といふ。晩年には、又、東民といへりとぞ。

娖女、同じ國なる仙臺の人、畠中太仲とて、號を荷澤といひし人に嫁ぎてき。

蘆娖女願書

拙者親、蘆幸七郎義、先年御下中、學問所講席之事申上、支配頭衆、指圖違背仕候不屆至極之罪科を以、御預被仰付、元文三年より當年迄、十九箇年羈管幽閉の住居、憂然困苦無限、六十余歲老衰甚敷き上、御預の身分、書物借寄、相考候始末、其外の學用も不寄、何指滯病身保養の筋、別て難相叶、先年以來編集草稿の刑書も、生涯の內、成就仕兼候に付、此段當屋形様、初て被仰出、御祝儀之御赦宥を以、幸七郎羈管御免被成下、故郷磐井郡東山亡祖白欒と申者、草莽の舊跡に罷歸、東山農民共養育介抱を得、一生相愼存寄の通、刑書段々吟味仕、師山様御大恩を蒙り、幼少より學問稽古仕候甲斐有之、相果申様に被成下度、御憐愍奉願候。

幸七郎、十五歲の節、被召出、享保六年三月、初て御參勤御供仕、江戶御屋敷に相詰、此秋閏七月七日、松前釆女より、明後九日御講釋、被仰付候由、申來、同日暮前岡本彥十郎を以、大學傳文淇澳之一節、

講釋可申上候、品々別て被仰渡、和姫様、御夢中、顔淵に御會見、大學淇澳之一段、能御吟味可然と、顔淵被申候、御瑞夢、御覧被遊候由、奉承知候、九日晝九ッ時、前御表は、姫君様、和姫様、（師山様御女和姫後常姫村子嫁備前侍従繼政朝臣後離絶法名慈眼圓通院心定院葬于東禪寺）富姫様、被爲出、御簾中に御列座、屋形様、（仝上定姫後富姫徳子伊達遠江守村昭室法名雲光妙惠日巖號玉蓮院葬于深川浄心寺）御曹司様、御簾前江御着坐、屋形様、御直に御簾前近く、御書案を御設被遊、午上刻幸七郎、御簾前江被召出、平伏、御意有之、御書案を戴き、淇澳の一節、講釋申上候。凡、人君に進講仕候は、平常の者に講授仕候と品違、文字訓詁、不意之事を除き、緊要の義理講述仕候事、先儒經筵進講の説を以、明白成義に候故、先づ本文の正意を講解仕、此傳文江引申候。淇澳の詩、元來衛之武公を稱美仕候、品々申上候、武公九十餘に及び、學問精被出國中え命令を降して、群下之直諫を求被、衛國第一之賢君と相見得申候、總て國を治給ふ主君之急務は、必武公之如く、外言路を開て、能諫諍に從ひ、内倖門を塞て、克く聲色を遠け、賢に親み、學を勉て、切磋琢磨する事、德を明にし、民を新にして、至善に止るの要道に御坐候、

其夫人も亦、夫人相應切磋琢磨すべき至善之道、有之、其道を吟味せざれは、内閨房之陰禮修、外、邦君之陽德を輔る事、難成候、愚論大略申上、講談終り、平伏仕候内、難有御意有、御次え退出、又御近臣を以、非常御意を蒙、於支配頭詰所、屋形様、御召衫拜領仕、姫君様より御曝布、兩御姫君様より御金被下置、不思儀之御殊恩、冥加至極、重疊難在仕合奉存候、此月廿九日、和姫様、又御夢中、御覧被遊候奇語、岡本彦十郎を以、其後、段々御用被仰付候。同年、十二月十四日、屋形様、夕御膳過、論語顔淵喟然之章、講談申上、別て難有御意有之、退出仕候、其翌十五日、於木村久馬御長屋に、古今之政要論談に及び、此春幸七郎、御供罷登候當坐より、寸志有之、大學經文、先儒之論、幷愚説書立申候冊子、一箱、久馬に相渡、翌十六日、又久馬え會談、同二十八日、又熟談仕、本朝刑法之書、兵亂之世燒失、律格、僅殘篇有之、令式も全備不仕、縦律令格式、不殘有之候共、隋唐之法に倣申事故、後世之時勢に難用、多和漢律令格式之書よりも、先以、經傳、史集、刑法之論説、根本準則に成申事、相考御吟味之爲に成

候書物、幸七郎一生之內、撰述仕、指上申度、內心懸罷在候、其外義倉義錢之法、饑饉荒歉之備は、猶更大切之義、御儒役之內江被仰付、平世無御油斷、御吟味可被遊筋、不及申上、近世明儒編集之書、荒政要覽之類、全備不仕候得共、大低考に相成候事も相見得候品々、委細申述、荒政要覽、幷義倉之諸說等、久馬御長屋江持參、夜分迄、反覆論辨、厥後數年を經、荒政要覽之吟味、高橋與右衞門に被仰付候、幸七郎、書立申候大學經文之論說は、姬君樣に指上候由、久馬より申傳、承知仕候、享保六年、幸七郎、二十六歲、經學甚未熟之節、初て御供被仰付、每度狂醉迂昧之僻論申上、老來悔悼無限愧嘆仕候、其翌年五月、御供仕、御國江罷下、役目相應指當り申、急要之經義、講習仕事有之、不得閑隙、刑法之書編述成兼、相過申候、享保十三年、九月六日、木村久馬より指紙を以、御城に罷出、江戶御屋敷、儒役交代被仰付、同年十月九日、發足、四月十六日、御屋敷江登着、十八日、願指上、御留主中、御用少く、他所學官共、出會仕候義、如願被成下候に付、律令格式之逸書、經傳、史集、

刑法、論說、諸方より借聚、一々熟覽抄錄仕、其翌年、御國江罷下候、而、先年久馬江申談候、存寄之通、段々書立申度、其心懸仕候處、翌年八月、晦日、夜中屋形樣、御參勤被遊、御着役目相應之御用有之、九月廿二日、伊達支族系譜一部、淸書可指上由、小島運五郎を以、被仰渡、御書物一覽、翌閏九月、朔日、右御書物異同不審之處、數ヶ條奉伺、御書物、幸七郎被相渡、御國元江持參仕候樣に被仰付、同月廿七日、御屋敷發足、十月五日、下着仕、遊佐淸左衞門、片山可散、高橋與右衞門に相談、追て品々奉窺、支族系譜、吟味相濟、與右衞門、幸七郎兩人、淸書指上、其後品有之、御代々考御系圖、御過去蝶等、吟味仕候樣、小島運五郎を以、被仰渡候に付、兼て抄錄之刑書、撰述可仕樣、無之打捨、元文三年、六月迄、段々相考、草稿書立罷在候內、同月十一日、於評定處、御尋等も無之、御預被仰付、配處へ罷、御代々考、伺書其外、御本書之通り寫取、其頭に異同書付申候、草書取合二千枚餘、御步目附印符を以、配所江被相下、紛雜之麁書、上江難納候故、當坐不殘火中仕候、品々寶曆二年、九月、御過去蝶、折本御奉

行乘より相納候節、委細申上候、刑法、論說、編集之義は、延享二年二月朔日、願書の內、大低申上候得共、享保六年、始て御供仕、江戸ゑ罷登候節、木村久馬え申談候、根本由來、此紙面之通之寸志迄は、不申上、猶更深奧之品、有之左樣之事、此度も相扣申候、

享保六年より、當年迄、三十六箇年、如一夢過去、師山樣、雲松院樣、心定院樣、玉臺院樣、忠山樣、皆御永逝被遊、昔年非常之御意を蒙り、當所に被相預、六十一歲、憔悴甚敷、僅之生涯、死を相待申迄に罷成候、縱一生御免不被成下候樣、師山樣、御嚴命被仰置候御事御坐候共、既に御逝去被遊候ては、天地高明廣大、一般之御神靈に被爲成、其御神靈、即當屋形樣、御心胸之中に被成御坐、師山樣、忠山樣、御在世被遊候同然之天理、不及申上、幸七郎、不屆至極之罪科、皆學問筋之事にて、別段之品も無之、其上、享保六年、閏七月、和姬樣、御瑞夢を以、御講釋被仰付、非常之御意、難在骨髓に感徹仕、徹忠之心底より、何事も相扣不申、講堂講席之事も無限品々有之、紙面難申盡候、愚書之眞情、乍恐御胸中、御神明を以、被思召分、幸七郎存命之內、故鄕東山え罷歸、享保六年以來、心懸候書、吟味仕候樣、被成下度、奉願候。

幸七郎、書附申物、五ヶ年以前、御奉行聚より御見屆相受候節、申上候通、凡人を殺傷仕候、大惡之外、一時一同不殘御赦宥被成下候得ど、雷雨之萬物を霑申同然、所謂作解之恩、更始之政に相叶、歷代名臣碩儒、赦宥之說、諫爭之論、甚明白、其上去年、凶荒細氏飢困、當年五月、大變、衛武公、群下之直諫を被求候如く、萬事御吟味可被相盡、御大切之御時節、御家御相續被遊、御赦宥被仰出、御先代之御仁德を御顯し被遊、至極之御大孝、御城下、在々山谷之間、海濱之末迄、有罪無罪、老若男女、感動歡舞、踊躍仕、惡を改、善に遷り、汚俗一新申樣に可罷成候、乍憚御武運は長久之御根本、之に過る事無く奉存候、御國中放臣か如き、罪人共、天に仰き、日夜顒望、一時一同、解散之御霑澤、奉待候、自古、讒逐、廢錮之罪臣、志有之候者、願書之內えも、何れも其身、至極之存寄申上候事、其例數々有之、諸役人取次、不申相返候は、言路を塞き申筋、至て不宜候、品々は

凡君臣なる者、平生、吟味相心得可申、肝要之事故、是又不及申上候、幸七郎義、幼少之節、民間ゟ被召出、右紙面之内、申上候通、享保六年、閏七月五日、御近臣を以、非常之蒙御意、何程御預被仰付候ても、存生仕候内、好序有之節は、何時も寸志不相叶申上候、幸七郎、當然之道と覺悟仕候、是又幸七郎、師山様、其時々御宥免被成下、難有思召を以、不顧毎度身分不相應之愚論申上、天罸難遁、御預被仰付、僅之余命於配所、憂死仕候も、天命之當然、此紙面一生最後之願にも可罷成候故、編集の書物、三十六年以前、於江戸御長屋、木村久馬江論談、其由來有之、品品五ヶ年前申上候事迄、書添奉願候、重疊不届至極之罪臣、又々右之様成願指上、冒昧狂瞽、不勝戰慄屏營之至、數日思案仕候處、螻蟻惓々之微忱、難相扣、師山様、御前江罷出申上候は、無相違事奉存候、品々愚暗之女子に委細申聞、親子感涙無限、老父草案、**拙者請取不自由至極、見苦敷手跡を以、漸書立願申上**候、拙者義、當正月、忠山様、御意を以、御預御免被成下候に付、去冬十二月二十五日、幸七郎書立申候願書、拙者淨寫仕、當二月御町奉行江、相出申候處、御吟味不被成下、此度又以願申上、女子之身分、重疊恐多候得共、當二月、委細申上候通、愚暗之心底、難忍仕合、御憐愍御吟味被成下度、奉存候。

右願之内、

師山様、御法號、師之字、元來獅之本字にて、佛書、儒書共に、獅師同通、用之証例、數多有之、師之字書申候、昔年御講釋申上候事等、其節幸七郎日記覺牒之通にて、御逝去、今日書立申願に候得共、御當日之如く、書付御法號は、相扣始終之文言と別段に御坐候、其外前後格例を以、見申候得ども、幸七郎身分、難申上事に候得共、古來放臣獄囚等、自明之書、陳情伸訴之文、同前其來曆、証據有之、御披露奉願、如斯に御座候、以上。

寶曆六年九月七日　蘆幸七郎女子

蘆　娽

長門殿　娽(花押)

妻の操

故人　仲丈敬甫

女の品は、種姓のたかきのみをたふとぶにあらず、けぢめとする際は、たゞ貞好にありとぞ。本姓さだかにて、心だてよきを云ふならし。重衡中將の妻、大納言典侍、女は貴き、賤しき、品あまたありとも、一すぢに心をまもるを第一とす。たとへば位貴き人のよろづの道にかしこくとも、貞心もつぱらになくば、女とは云ふべからずといへるは、此心なり。又後花園院の御母うへ敷政門院ののたまひける、なべて昔より女ははかなき者にて、をとこのいろ〳〵にいひしろふには、百人は百人ながらもくだくる心いできて、ながき名をながすものなり。此れもむきに心をつけて、骨は粉にくだけ、宍ゝむらは、泥になるとも、名を思はむ女は、道をまもるべき事なりと、世の中の女のためにありがたき御をしへなるかな。むかし、魯の國に、秋胡子といふものあり、妻を迎へてわづかに五日なりしに、秋胡は人の國にゆき、五年をへて歸りけるが、ふるさと近くなりて、道のほとりに桑つむ女あり。いときよげに見えければ、秋胡ちかづきて物云ひければ、ひとめもかへりみず。もたりける黄金を取りいでゝ、さまざまにすかせども、つひに從はざりければ、せんかたなく家にかへりつきて、妻をよびいだしてあひ見ければ、ありつる桑つみし女なり。夫婦のちぎりいくかもあらで、ひきわかれつゝ、あまた年經にければ、たがひに見わすれにけり。秋胡はふかくはぢて、とかくを云はむ方なし。女はうらみにたへかねて、はしりいで、身をなげて、死にけり。此事を葉清逸といふものゝ作りける詩の心に、をとこの恩は葉の如く薄く、女は氷の如くに淸し。男黄金を出しかたらへど、女いらへず。もし一たびもほゝゑむ事あらば、さびしきねやの燈火を年來まもりゐたる事、たれかはまことゝするものあらむといへり。それ貞心をまもる事、女のつねの道ぞとは、大かた、誰れもふみしることゝいへども、つゆ心にかゝる事なきまでに、一生まもりなすことは、いとやすからぬわざなるべし。白樂天が詩に、君が一日の恩の爲に妾が百年の身をあやまると作り、女論語のことば、一行失はれば、百行なることなしといへり。へだてゝも隔つべく、つゝしみても愼むべきは、男女

の間、嫌疑のさかひなるべし。

子を育つる要

故人　貝原益軒

子をそだつるには、おごりと、ほしいまゝなるをはやくいましむべし。衣服器用以下萬の棒養、わが身の財祿よく輕く、うすく、ぞうろくなるべし。愛を過してものごとにゆたかに、華美なるは、これ子におごりを敎ふるなり。いとけなき時よりおごれば、年長じてますく\甚し。はじめゆたかにして後におさゆるはあしし。はじめかゞみて、後にやうやくのぶるはよし。いとけなきよりいましめて、僞なくして誠を本とす。よろづの事質朴にすべし。又おこたりわがまゝなるをはやくいましめて、へりくだりゆづる事を敎ふべし。子をそだつるに、はやく敎ふると、左右の人をえらぶとにありといへるは、賈誼が名言なり。此二に心を用ゆべし。はやく敎へざれば、惡にうつりやすし、付きしたがふ人あしければ、惡きことを見聞きて、一生のわざはひとなる。幼よりあしきことを見聞しては、先入の言、主となり、後に善事を見きゝてもうつらず。あしき癖つきては、後にならひとなりて改りがたし。

ことわざ

太刀の屋主人

「ことわざといふ」語は、常に人のいふ所なるが、さてその意味をたづぬるに、日本大辭林といふ字書に「常に云ふことぐさ」、とあり。言海といふ字書には、更に精しく「古くより言ひ習はし來りて、經驗よりして、訓誡など籠めたる語、雨降りて、地固まる、唇亡びて歯寒し。などいふ類」、と解釋せり。おのれもふに「ことわざ」とは、一二言の中に、無量の意味と、道理とを含みたるものにて、之に間接に、敎訓を寓するものと、直接に敎訓を寓するものとの別あり。直接に敎訓を寓するものとは、例へば、孝行したい時に親はなし」とか、「可愛子には旅せしめよ」、「旅は道づれ、世は情け」、とかいふごとく、直にその事を正面より言ひあらはして、別に譬喩など設けざるを云ふ。格言の一種これなり。間接に敎訓を寓するものとは、例へば「立

つ鳥跡を濁さず」、とか「小くても針は呑めぬ」、とか、「鷹は餓うるとも穗啄まず」とかいふ如く、譬喩を借り來りて、人をして之を人間の事にあてはめて、悟らしむるをいふ。これを本來の「ことわざ」とかいはまし。「立つ鳥跡を濁さず」とは鳥に托して人の終りを善くせざるべからざることをさとせり。奉公人など、主人より暇貰ひて、その家を去るともなほよくつゝしみて、決して後に迷惑を殘すやうなることあるべからずといふことをさとせるものにて、この例なほ他にもあるべし。また「小さくても針は呑めぬ」、との、諺には「强き國は小さくても馬鹿にしがたし」、とも解るべし。「鷹は餓うとも穗を喙まずとは「武士は零落ても賤しき根性を起さず」、といふ意にも取らるべし。我國にては、二種類の間に明かなる區別は立ち居らず、直接のも間接のも、共に『ことわざ』といふも、差支なかるべし。さて諺といふものは、よく其國の文化と氣風とをあらはすものにて、開けたる國ほど、諺の多きを見る、西洋にて尤も諺の多き國は、獨逸といふ國にて、その國には、「諺の字引」とて、諺を集めたる書ありて、諺の數幾千萬の多きにいたれり。我國にては、未だ「諺の字引」といふものはなけれども、諺の多きことまた、諺の面白きものあることは、決して獨逸に讓るべくもあらず。姬たちよく「ことわざ」を味ひて、古人の苦心を知り、自から悟る所あるべし。

もとより、數多き諺について、一々とり出でゝいふ遑なけれど、特に女子が自から戒めまた子を育つるに敎ともなるべきもの、二つ三つ茲にとりいでゝ云はむに、

飯をこぼすと目がつぶれる

とは、何ぞ子供をさとすことの切なるや、米はもとは粒々辛苦の汗より取れたるものなれど、粗末にすべからざるは勿論にて、また飯をこぼすは行儀の善きものにあらず。されど目がつぶれる、と威して、子供の行儀よく物を粗末にせざらむことを敎へたるものなり。

人に影を食はすとからだが瘠せる

人が食事する前にたちはだかりて、燈光を掩ふは、いと行儀惡しく、また食するものも快きものにあらざれど、からだが瘠せるとて、之を戒しめたるものなり。

物を食て臥ると牛になる

食後たゞちに臥すことは、消化を妨ぐること至て大なれど、牛になると威したるなり。

茶を澤山呑むと色が黒くなる
月夜の出歩きは月やけで色が黒くなる

此の二つの諺は、女子を戒しめたるものにて、茶を多く呑めど、消化に害あるのみならず、女子にして、之をがぶ／＼呑むは、体裁のよきものにあらず。また月などに浮かれて、女の夜散歩するは危險なるものたれど、色が黒くなると諷したるなり。かゝる類、數へ來らば、はてなかるべし。兎に角に、諺は經驗上より得來りて、家庭敎育の參考に資すべきもの、いと多かり、女子たるものよく平生、口にする諺の眞意を考へて、身に悟る所あれ。

牛のあゆみ

鹽井ふく子

牛のあゆみも千里と云ひけむ、げに、覺えわろく、才拙けれども、志固く、うまず、たゆまず、忍びに忍びだにすれば、いかでか、その思ひの達せぬと云ふ事のあるべき。

昔、近江聖人と呼ばれたる、藤樹先生と云ふ人の許に、大野了佐と云ふ弟子ありけり。この了佐、いと覺えわろく、才拙くて、人々にあなどらるゝのみか、その親さへもあかれて、かゝる子には學問などを習はすも甲斐なしと云ひて、いやしき業を授けんと爲たりしに、了佐はいとゞかなしく、はづかしく思ひて、この藤樹先生の許に來りて、涙を流してひたすらに請ひて、醫學をうけんことを賴みたりければ、藤樹先生も、その志のほどをあはれに思ひて、うけひきつ。さて、之に素讀を授けて、僅々數字を敎ふるに、數百遍もくりかへせど、しばらくすれど、はや忘れぬ。更に敎ふること、數百遍に及べど、翌日には又忘れぬ。されど、先生は諄々としてうます敎へ、了佐また汲々としてたゆまず習ひて、遂に志を達し得て、醫を以て世に立つに至りきと云ふ。あはれ、千度八千度きたへにきたへだにすれど、あらきあらがねも、遂には、いとめでたき名刀ともなりぬべし。おのれ、もと、了佐よりもおとりたる身にしあれど、幸に藤樹先生と賴む師の君もあり、おなじ賤しき業はさづけじと、心がくる同胞もあれど、心自からはげまれてなむ。

收獲

二十二木生

米といふものは、飴の如き甘き味あらず、生薑の如き辛き味あらず、また鹽の如き辛き味もあらず、梅干の如き酸き味あらず、千振の如き苦き味もあらず、これと云ひて、とりいでゝ云ふべき味あるにあらねど、さて、この米といふものは、その淡泊なること、よく日本人の口に適して、一日も欠ぐべからず。他の旨きものといへども、二三日も喰ひつゞくれど、忽ち飽くにいたらむ。たゞ米は日に三度、一生喰ひても、毫も飽くことなし。これ他なし。その味、中庸を得て、よく日本人に適すれどなり。

女子もまた此の如くなるべきもの乎。妄りに容を飾り、媚を呈して、飴の如く甘きは好ましからず、妄りに四角張りて理窟など云ひて、生薑の如く辛きは好ましからず。又温和なるさまなくて、しかみづらをして、梅干の如く酸く、千振の如く苦きも、また好ましからず。詞数は多からずして、而かも沈默に過ぎず。愛敬はありて、而かもなれ／＼しからず、一に中庸を得て、以て、人に飽るゝことなく、よろづ謹みふかくして、常に世の尊敬をうけ、一日も其人を欠ぐべからざること、なほ米の一日も欠くべからざるが如くなるべきなり。

さて米といふものは、日本人の常食となり居りて、我々の之を得ること、たやすけれども、その粒々辛苦よりなれることを知らざるべからず。春風のまだ寒き頃、農夫どもは、鋤とりて、荒田をすきかへし、苗にせむとて、種まき置くなり。かくて、時鳥啼く頃にいたりて、早苗とるなり。早苗とるとは、稲の苗を引き抜きて、これを田に植うるなり。時鳥の一名を、死出の田長といふ。そは、古の人、この鳥は死出、即、黄泉よりわたりくる鳥と思ひ、且つ、そのわたり來る時、恰も耕作の時節にして、百性ども、その聲を聞くと共に、時にれくれてはならずとて、即、時鳥に敎へられて、早苗取る故、かく、死出の田長とは、よべるなりけり。

古はまた「た」といふは、「さ」といふ音にかよへり。かの催馬樂の曲、青馬といふ歌の中に「しのいさや」といふ語あり。「しのい」は「しのき」の音便にて、即、稲置なり。昔は稲を「しね」ともいひけり。また、「さや」

とは田屋なり、「た」「さ」相通へばなり。されば「之のいさや」とは「稻置田屋」にて、稻を置く草屋なり。かく古は「た」と「さ」と相通へり。されば、稻の苗を早苗といふは、早は假字にして、田の苗といふ事なり。、苗は色々多けれども、田の苗と云へば稻の苗の事なり。又五月を「さつき」といふは、即ち「田月」といふ事なり。五月にいたりて、はじめて、早苗を取ればなり。すでに早苗取りたる上は、第一に水の灌漑に注意せざるべからず。天氣長くつゞけば、水乏しくなる故、晝夜水車にて川の水を田へ引き入れざるべからず。天氣いよ〳〵長くつゞけば、川の水も乏しくなり、空よりは一斛の雨も下らず。折角のびたる稻も黄ばみて、ばや枯れむとし、百方水を得るの術つきて、唯空を仰いで嘆息するばかり、一村こぞりて菜色を呈して、天に祈り神に祈りて雨乞ひといふことゝする苦しさ。幸に旱天の苦を免るゝも常に雜草を拔き去らざるべからず、**實やう〳〵生ずれど、案山子、鳴子など設けて、雀な**どの來りついばむをふせぎ、常に鳴子ひきて、田の番せざるべからず。東京の近郊にては見ざれど、余が郷里などには「虫送り」とて、鉦大皷をならして、稻の蟲を除くことあり。その強き響の爲、稻の虫自から萎縮すとかや。一村に少くとも五個の鉦、五個の太鼓あり、「虫送り」は、面白半分のわざとなりて、平生多くは小供の爲すに供す。余は九歳より十一歳まで田園に退居しけるが、士族の息子と押したてられ、所謂餓鬼大將となりて、毎夜出でて、鉦太皷うちて田の中をめぐりあるきたることありき。「蟲送り」は始めより小供にまかさす、蟲害の甚しき時節は、百性自から出でゝ、鉦大皷うちつゝ、滯りなく田をめぐるなり。村々、各蟲送りして、其鉦大皷の多きさを爭ひ、其音の高きを競ふのみならず、村々の若者ども、血氣のあまり、鉦大皷うちつゝ、相接近し來りて喧譁などすることもあるなり。かゝるわざして夏を過すほどに、時にまた洪水などありて、田は悉く水に沒して、一面海となり、稻爲に廢れはつることもあり、二百十日、二百二十日など、幸に變化なくして、漸く蘇生の思をなして、竟に**收獲の時節とはなるなり。**

先般、皇國の版圖に入りたる臺灣の如きは、熱國なれど、年に三回收獲すと聞く。余が郷里にては、二回の收獲あり、一度苅り取りたる後に、更に苗を植うる

なり。之を二番稲といふ。東京あたりにては、たゞ一度收獲あるのみなり。その收獲は、十月にいりて之を爲す。西風冷かに、秋氣身にしみて、百舌の聲聞え初むる頃なり。

田植うるときは、田植歌とて、男女うたひつれて調子合はせていさましく歌へど、田苅る時は、別に歌ふべきうたもなし。翁となく、嫗となく、夫となく、妻となく、みな田に出で、鎌とりもちて、苅ることに餘念なく、家にはただ足腰のたゝぬ人のみぞ殘れる。いわけなき小供も、もりする人のなきまゝに、はだしにて田にいでゝ、稲刈られたるが爲に、捿家失ひたる蝗を捕へて、その背を稲の莖に珠數つなぎに通したるさま、玉のみすまるも、かくやと思はれぬ。時に或は螳螂が怒りて、斧をふりたてゝ來るにあひて、恐れてあとじさりするも可愛らしく、仰いで赤蜻蛉などの群をなして舞ふを見て、ほゝゑむなど、いはん方なくをかし。早稲、なかて、おくてなど、稲には色々通りあれど、全く刈りつくすまでには一月もかゝるべし。飛鳥山道灌山などより見渡したる十里の黄雲も、今は跡なくなりて、殘るは、雨にうたれ、風にさらされて、見る影も



なくなりたる案山子のみなり。

收獲終れども、之を米にするには、なほ幾多の時日と勞働とを要するなり。まづ刈りたる稻をいなぎに掛けて、之を干し、干し終りて、拖把を扱き、連枷を打ち、然るのち、臼にて引きて、籾をとりて、箕といふものにて、籾と米とを別ちて、こゝにはじめて玄米を得るなり。この玄米を水車の力や人の足の力にて、つきて篩にし糠と米をふるひわけ、さて、白米となれるものを、炊女が井戸端にてとぎて、釜にてたきて、始めて飯となりて、我々の口に上るにいたるなり。一粒の米もかくの如き勞苦を費さゞるべからず、まして人生れて一人前の人間となりうるまでに用ゆる勞苦はいくそくぞや。米が日本人の常食となりて、一日も欠く能はざるにいたるまでには、げに、かゝる困難あり、女子たるもの、また世の尊敬をうけて、一日も其人を欠く能はずといはるゝまでは、素養といふもの、なくして可ならんや。

收獲終れども、刈取餅とて、新米にて餅をつくもあるべく、やがて、鎭守の神の祭を行ひて、神の御惠を謝しまつり、一村の老若、神前にあつまりて、喜びあふべく、今年の豐年に一家親族こをどりして祝ひう、祝はれつゝ、つどひあふうたげの席に、爺が手製の酒の風味を誇れば、媼は自から積けし澤庵の味を誇るなど、互にうちとけて、わらひどよめきて、くむや杯の中のさゝならみも、君が代のめぐみのなごりなるべし。

わらひ草（三）

柴刈翁

相撲人私部宗平鰐を投げ上る事

今は昔、駿河國の私部の宗平といふ名の相撲人ありけるが、取手とも賢かりけれど、出來て後、左の方にも、右の方にも、負くる事なかりけれど、ほでに立て、いくほども へずして、脇に成りにけり。其時、同方の相撲にて、參河國に伴の勢田世といふ相撲ありけり。勢いかめしくて、力きはめて強きものなりけれど、取り上て、ほでに立て、久しく成にけるを、此の宗平が脇にて有けるに合れたりけれど、勢田世打れにけれど、宗平はに立て、勢田世脇に下てぞ有ける。然れど、此の宗平、極たる相撲にてなむ有りける。去かるあひだ、此

の宗平、駿河の國にて、四月ばかりに狩をしけるに、鹿の背を射られて、内海のありけるをよぎわたりて、向ひの山ざまに逃げむとするを、宗平游ぎ行く鹿に付てれまぐ。鹿は三四町ばかり游ぎ渡りけるを、宗平立れよきをして、鹿に追ひ付て、鹿の尻足を取て、肩に引きかけて、れよぎ返るに、奥の方より白浪の立ちて、宗平が方樣に來りけり。濱に立たる射手ども、音を高くあげて、およぎ來る宗平に、其浪は鰐にてろむらめ、くひころされなんとするはといひて、集りてのゝしるに、其の浪宗平が許に來て、浪宗平に打ちかくと見る程に、今は宗平くはれたらむと思に、浪もとの方へ返る。亦宗平もとの樣に鹿をさゝげて來るに、陸今一町ばかりに成ぬるに、ゑぞしばかりありて、又此の浪宗平が許ざまへ來る。前の如く宗平に打かゝると見るほどに、ゑぞしばかりありて、浪また返る。宗平なほ鹿をさゝげ持て、渚今三丈ばかりに成るほどに、陸の者ども、見れど、宗平鹿のしり足二つこし骨とを持ちたり。ゑぞしばかりあれど、亦此浪立ちて來る。陸の人集りて、宗平をとく上りねとのゝしるに、宗平耳にもきゝ入れずして立てり。浪既に近く來るを見れど、鰐の目鏡の樣に見なして、大口を開いて、歯は劒のごとくなり、近く寄り來て、宗平をくらふと見るほどに、宗平持たる鹿の足を、鰐の口に入るゝまゝに、鰐の頭のわきどに、手をさし入て、うつぶしに成て、相撲を投る如く、こゑをおめきて、陸ざまに投げ上たれど、鰐一丈ばかり陸に投げ上られてふためくを、陸に立て見る射手ども、箭射立けるは、鰐鹿の足をくらひながら、射殺しつ。其後射手ども集りて、宗平にいかにしてくはれざるぞと問ければ、宗平がいはく、鰐はものをくふには、ろこにてくはずして、持行て必ず巳がすみかに置て、其磯り有をまた返てくひに來るなり。さはろれを知て、前のたびにくらひに來りつるに、鹿をさしやりつれど、鹿の頭おとがひくひ切て返ぬ。次の度來りつるを、前足腹骨をくはせてやりつ。次のたび來りつるは、尻足をもちてくはせて、投げて上たりつるなり。此をかくゑらぬものは、一度に皆手を放て、みな喰せて、次の度は我必ずくはれなむとす。案内を知らざらん人は、此の樣にしがたきなり。また力なからん人は、さしやりてくはせむほどに、必ずつきたふされなんとぞいひければ、これをきく射手ども、けうの事にぞいひあへり

ける。舜の國にて、此をきゝて、はやしのゝしりけりとなむ、語りつたへたるとや。

左京の大夫　異名付る事

今はむかし、村上天皇の御代に、ふる宮の御子にて、左京大夫經○といふ人ありけり。長少し細高にて、いみじくあてやかなる樣はしたれども、有さま姿なむ、をこなりける。頭のあぶみかしらなりければ、纓は背につかずして、はなれてなむふられける。色は露草の花をぬりたるやうに青白にて、眼かぶらは黑くて鼻あざやかに高くて色少し赤かりけり。唇はうすく色もなくてわらへば、齒がちなるものゝはしゝは赤くなむ見えける。こゑは鼻ごゑにて高かりけり。物いへど、一内ひゞきてぞ聞えける。あゆめど背をふり尻をふりてぞありきける。その人、殿上人にて有けるに、せめて色の青かりければ、○の殿上人皆これを青經の君とぞ付けるを咲ひけるなかに、若き殿上人共の勇みはこりたるは、此の青經の君を、起居につけて、安からずいみじく咲ひければ、天皇これをきこしめし。餘りて、殿上の男ども、これをかくわらふ、いとびんなき事なり。父の御子これをきかど、かく制止するをぞ知らずして、我をこそ恨みむとすれと仰せ給ひて、まめやかにむつがらせ給ひけれど、殿上人ども、みな舌なきをして、これより後はわらふまじきよしをいひ契ひてけり。さて起請しける樣は、かくむつからせ給へど、今より後、永くこの青經といふことをとゞめぬ。もしかく起請して後、青經と呼びたらむ人には、酒肴菓子ども取いださせて、贖はせむといひ契ひてけり。其後いくほどもなくて、堀川の兼通の大臣の中將にておはしましけるか、起請をきと忘れにけれど、あぶなく此の人の立て行くうしろを見て、彼の青經丸はいつちゆくぞと宣ひけるを、殿上人共これを聞て、かく起請をやぶりつることはいとびむなき事なり、されどいひさだめしやうに、すみやかに軈て酒肴菓子とりに遣して、其事あがなふべしと、集りて責めのゝしりければ、堀川の中將たはふれて、せじとすまひ給ひけれども、集りてまめやかにせめければ、中將さらば明後日ばかり、この青經よびたることどあがなはむ。其の日殿上人藏人あるかぎりあつまりたまへといひて、里へ出で給ひにけり。其の日になりて、堀川の中將青經の君呼びたるあやまち贖ふべしとて、殿上人まゐらぬ人なく、皆

まゐりたり。殿上に居並びて待つほどに、堀川の中將なほし姿にて、形は光る樣なる人の愛敬はこぼれにこぼれてえもいはれずかうばしくてまゐり給へり。なほしのなよゝかにめでたき裾より、青き出しうちぎをしたり。さしぬきも青き色の指貫を着たり。隨身四人に、皆青き狩衣袴あこめを着せたり。一人には青くいろどりたるをしきに、青じのさらに箔を高く盛てすゑたるを持せたり。一人には青瓷の瓶に酒を入れて、青き薄樣をもて口を包みて持せたり。一人には青き竹の枝に、青き小鳥五ッ六ッむかりを付て持せたり。此らを殿上の口より持つゞけて、殿上のまへにまゐりたれど、殿上の人ども、これを見て、みなもろごゑにわらひのゝしることおびたゞし。其の時　天皇これをきこしめして、こは何事をわらふぞとゝはせ給ひければ、女房兼通が青經よびて候へど、其の事によりて、殿上の男共にせめられて、其の罪あがなひさふらふをわらひのゝしり候なりと申しければ、天皇いかやうにして贖ふぞとて、日のおましに出させ給ひて、小しとみよりのぞかせ給ひけるに、兼通の中將、我が身よりはじめて隨身も、みなひた青なる裝束をして、青き食ものゝかぎりを持たせてまゐりけれど、これを咲ふなりけりと御らんじて、をかしくおぼしめしけれど、えはら立せ給はで、天皇もいみじくわらはせたまひける。其の後まめやかにむつからせ給ふ事もなかりければ、殿上人共いよゝなむわらひのゝしりける。されど青經の君に異名つけてやみけりとなむ、語り傳へたるとなり。

九十九髮

桂月漁郎

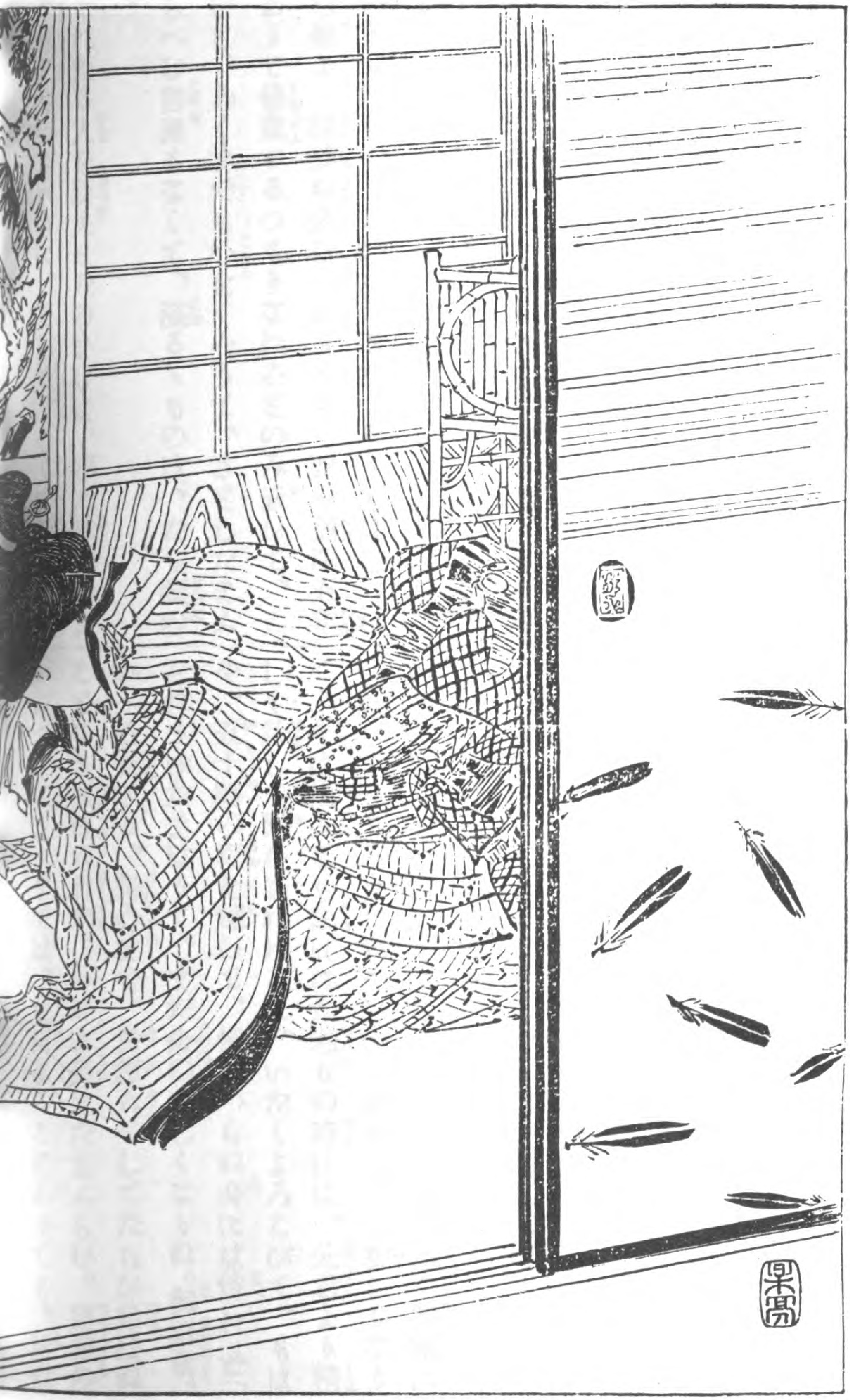
（四）

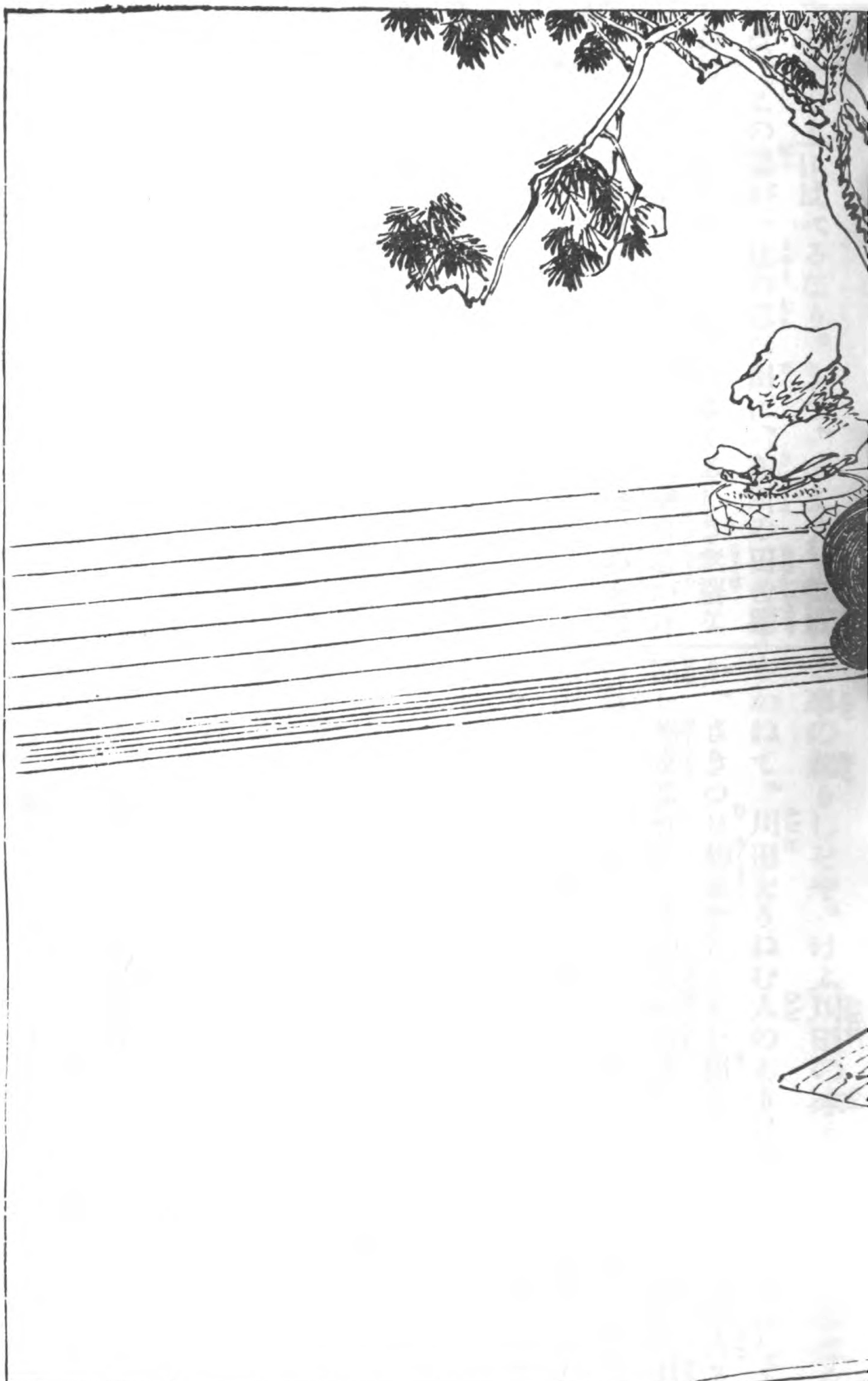
學のわざに暇なき兄君の、我身のために、かくまで心を勞したまふかと思へどうれしくも、またかたじけなくも、はや涙のおつるをとゞめもあへず。いたはしや、亡き親の世にいましたまはむには、かゝる俗事の、學問のさまたげにもなるべき事ども、心配したまふに及ばで、ひたすら、學の道にいそしみたまはむものをと思へど、また亡き親の事まで思ひでられて、涙のひときは溢るゝも、云ふ甲斐なき女の身の恥しや。兄上樣のよしと思はるゝことに、もとより、よろづ兄

上さまを仰ぎまつる身の、いかでかことざまに思ふことのはべるべきとぞかり、涙のひまに、からうじて洩れいづる聲音もて、いらへけれど、それ聞きて、全く安心せしぞや。今より三年のちの事か、四年のちの事か、しかとは分らねど、さきより人して申込のあるまでは、なほ、これまでの通りの處女の身なり。たゞそなたの行末の事は、この兄の心にこめてあれど、その間は、よろづ謹しみ、いそしみて、人の家を治むるに足るだけの資格をそなふべし。もと、この事は、たゞかたみの心の中の約束にして、いまだおもてだちての縁談にあらねど、時の來るまでは、かろがろしく披露すべきことにあらず、さらでだに、世にうるさき人の口、如何にかきゝ誤りて、よからぬ噂たつるやもはかられず。もし他より縁談申込む人ありとも、たゞ猶四五年は家にありて修業するつもりなれどとのみ云ひて、ことわらむと、あくまでも心をくだりて、さとしたまふに、いらへむ言葉もなくて、溢るゝものは、たゞ涙のみなり。

世にすぐれたる人を所夫とたのまむは、げに身にあまりたる果報ともいふべきに、まして、あくまでも親切にして、あはれみの深き人の心、身に取りて、こよなきたよりと思ひて、ふつゝかなる身の、なぐさまるゝ由もあれど、すぐれたる人には、すぐれたる身ならではふさはしからず。たらはぬを如何にせむと思へど、胸はちゞに亂れて、たとひ榮華をうくるとも、出でゝ人の家にとつぎて、浮世の仇浪にたゞよはむよりは、いつまでも心置きなく、親しきはらからと共にあらまほしく、まゝになるならむ、世に老といふことも、死といふこともなく、父母もとの如く世にあらせたまひて、わらはも老ゆることなく、昔のまゝに膝下に侍りてむと思はるゝも、わりなしや。

わざとかくすべきことにもあらねど、年久しく我家につかへて、よろづまめやかに、親戚よりも親しくなりて、今は他人とも思はれぬ老女の時には、先君より精しく話して聞かされけるに、いたくよろこびて、もはや、五十路の坂を越ゑて、惜しからぬ身には侍れど、それうけたまはりて、また命のほしくなりぬ。御器量、いへど更なり、御心まで、貴婦人としてたらひ給はぬことなき孃樣の行末、いかに榮えたまふらむ。孃樣のかたづきたまふまでは、如何なることありても、死ぬ





べからざる身の上にはべるなり。さて、いよ〳〵御祝言の時には、この姿が一生の思ひ出に、在所の田舍躍をどりてお目にかけまゐらせむ。むさくるしき老婆なりとも、きらひたまふことなく、相變はらず御心がけたまひてやと、はや、取越し苦勞する詞の底の心を汲むも、亦、涙の種なりけり。

ねむられぬ夜を、やうやく明して、茶柱にも心置かれ、空しく窓にうつる鳥の影に、小さき胸の躍りしこと、いかばかりなりけむ。今は我れと我心にとがめられ、二年も三年も、修業つみて、人並の身となるまでは、ふつゝかなる身の、穴にも入りて、人の目にはふれざらなむと祈るも、いとくるしかりけり。

花落ち、水流れて、春もいつしか暮れぬ。ふりつゞきたる五月雨に、時ならぬかきはの雪むなしく、くだされて、いとどさびしき夕まぐれに、看病以來絶えて來りたまはざりし川田の君、意外にもおとづれたまへり。平生の爽快なる氣象には似ず、いとうち萎れて見えさせたまふに、如何なる故にかと、怪しく思ふのみにて、ひとり部屋にとぢこもりてありけるに、一時間ばかりたちて、兄君入らせたまひ、こや玉子、世にこまりたる事の起りしぞや。けふ川田の來りしは、他の事ならずかねて、川田をそねむ人のありけるが、如何にしてか、さきつ日約束せしことを聞きしりけむ。その人も同じ學友なれど、その人柄好ましからず。いつぞや、君の妹くれぬかと、うちつけにいはれしことありたれど、虫がすかぬ人なれど、誰がやるものかと、はねつけたりき。かゝれど、川田をそねむこと、ひときは強くなりて、あしざまに言ひふらし、さきつ日看病にかこつけて、いふに忍びざる行ありとさへ、讒言しけるとかや。川田はもとたよりなき身にて、やうやくその鄕里の先輩どもより學資をうけて勉强せるなり。さてその同鄕出身の先輩は、それ〴〵分に應じて金を出し、すぐれたる同縣の學生をえらびて、之に學資を給しけるが、川田は、やがて、その學生の一人なり。ことに同縣出身の顯官に、北村正春といふ人ありて、いたく川田を信用して、その子たちに見習ひにもとて、その家に置きて養ひけるなり。さるに、はからずも、こたびの讒言、まことに看病に來りしことありたれど、あざむくにその道を以てすれど、君子もあざむかるゝ世のならはし、曹參の母も、その子、人を殺せりと告げ

らるゝに及びては、遂に機を下りしとかや。されど、かたく信用したる北村氏をはじめ、諸先輩も今は川田をうたがひて、怒ること一方ならず。かく嫌疑を蒙りたる上は、先輩だちの恩にそむかざらむとせむ、未來長く我家との關係をたちて、その身の潔白を示さゞるべからず、又我と約束せし一言の信を守らむとせむ、うけし恩義にそむかざるべからず。いづれに從ふが人の道なるか、萬事我に任かして、よろしきやうに敎へくれよとなり。われも意見あれど、そなたは、まづ如何にか思ふと、思ひもかけぬ言の葉に、胸まづふさがりて、とみに答へむ詞も出でざりけれど、兄君いらちたまひて、すぐと返答せずともよし、よく〳〵考へ置くべしとて、立たむとしたまふ袂を押へ、またせたまへ兄上さま、數にも足らぬわらはが身は如何にもなりなむ。わらはの故を以て、正しき人をきずつくべうもあらずと、なみだながらにいらへけれど、兄君は、しばし沈吟したまひしが、やがて、つと身を起して、たち去りたまひぬ。あとには、老女の時、來りて、なぐさめむとすれど、これも悲しみに堪へでや、同じさまに伏し沈みぬ。空には五月雨、いよ〳〵ふりしきりて、血を吐く時鳥の八千八聲の、身に浸みてかなしかりける。

文林

月前祝　　德大寺實則

さかづきに滿たる月のかげうけて
曇らぬみよをいはふよはかな

山月　　近衛忠熈

吹わたる秋かぜ見えてやまゝつの
このまもりくる月のさやけさ

行路萩　　堀河康隆

朝露にそではぬるれどあきはぎの
はなずりうれしのべの中みち

名所菊　　東久世通禧

大ゐ川まつのしづくやかゝるらむ
ちよのいろそふ白ぎくのはな

田上雁　　鍋島直大

ねらふ人ありとしらでや秋の田の
稲はがくれにかりのなくらむ

秋眺望　久我建通

かの岡に里の子あまたつどふなり
はやしの栗やこぼれそめけむ

閑中荻　諏訪忠元

しづかにとれもひし庭に秋のきて
なか〳〵さやぐをぎのひと村

山路霧　千家尊福

谷川のおとをしるべにかへるまで
ゆふぎりふかし秋のやまぶみ

萩露　植松有經

秋はぎの花もこぼれておくつゆの
そゞろにさむき夕まぐれかな

月下薄　宮地嚴夫

月かげのくまなき庭のはなすゝき
ひる見るよりも面しろきかな

庭前月　北郷久政

何もなきわが庭なれどてるつきの
かげはくまなく滿てけるかな

月前鹿　阪正臣

月見にも人はとひこぬやまかげの
しはの戸ちかくをしか鳴なり

かゞ見　三浦千春

うつりけむおやのかげ杜戀しけれ
形みのかゞみ見るにつけても

琴　三輪義方

遠き音の其ことゝだにわかれぬは
こゝろつくしの秋のしらべや

妓王　佐々豐水

やす川やふかきこゝろは末つひに
流れての世にあらはれにけり

秋懷舊　永石徳文

この秋もなき世の人をしのべとか
むかしながらに月もすむらむ

秋旅行　小池道子

足引のやま田のをしねかりそめの
旅ねせしまにあきたけにけり

庭上月　柳原愛子

桐のはの落ばのつゆも見えそめて

つきさしわたる庭のおもかな

海上雁　北島以登子

秋ふけてきりたちこめし海ぞらの
沖にきこゆるはつかりのこゑ

岡紅葉　日野西廣子

ひえどりのこゑかしましき我岡の
なみきのかへで色づきにけり

霧中山　蜂須賀隨子

富士のねをたびの栞と見つれども
くもらむけふもかひ無らまし

旅宿鹿　中島歌子

小はぎさく野守が庵にたびねして
男鹿のこゑもきゝてけるかな

朝秋風　鶴久子

おりたちて今清めつるあさにはの
やなぎちらして秋かぜぞふく

閑居燈　田邊和氣子

人目なきよもぎか宿のともしびは
蟲のみとひていぶせかりけり

月古思　同

たらちねに小指さゝれて仰ぎ見し
むかしこひしきあきのよの月

水邊草花　安東菊子

山さはの清きみぎはにおもしろく
かげさへうつる月ぐさのはな

秋田家　内田遊歌子

おのづから風に音するおやまだの
なる子にさわぐむらすゞめ哉

月前懷舊　彥坂尊子

物おもふ身にはあらねど秋の夜の
月をし見ればそでぞぬれぬる

祇王　小町谷りえ子

是ぞこの憂世のさかのあきぞとや
そでうちふりて露はらふらむ

孝の歌

武島羽衣

うちきらしみぞれし夜半の空はれて、
ゆきよりこらむ雁がしま、

うらゝにのぼる朝日子の、
光りまばゆくかゞよへば、
みぎはのこほり且消えて、
ほの見えそむるした草を、
まくらにゆひておともなく、
伏したるひとや誰ならん。
年まだわかきをのこにて、
二人手に手をひきつれつ、
かしらの笠もうちやれて、
はだへをおほふ衣もなく、
氷るあらしに身のなべて、
むらさきだてる哀れさよ。
をりしも雪をふみしだき、
こなたにたどる老びとは、
ものをやしたに思ふらん、
皺めるまみもうちしめり、
はこぶあゆみも亂るなり。
今しもこゝをうちすぎて、
伏せる若うど見るよりも、
やよ我子よとさけびつゝ、
あとは言葉もいへばえに、
積れるゆきにふしまろび、
消えいるばかりなき沈む。
やま菅の根のねもごろに、
畑うつわらべゆきあひて、
なげくおきなを慰さめて、
その故よしをたづぬれば、
なげきこりつむ種ながら、
こゝろの端もくづし出て、
かつは思ひをはるけんと、
やう／＼眉をおしぬぐひ、
とだえがちにも語りける。

春の日の長門の國の國内なる、
小畑のむらのかたほとり、
山がたつけるよもぎふの、
萱がのきばもかたぶきて、
甑にすがくさゝがにの、
蜘蛛の糸よりなほほそき、
けむりたてつゝやく鹽の、
からくもくらす夫婦あり。

ふたりのなかに設けたる、
　わには權藏と名に負ひて、
れとゝは利吉と呼にけり。
　去も月師走のふかではり、
てる日くまなき水無月の、
　てりはたゝきも物とせず、
あしたは星にたとりいで、
　くるれむのぼるゆふ月の、
光りを浴みてかへりつゝ、
　親をやしなふこゝろ根は、
冬の夜堀りしたかんなの、
　雪もいかでかふかゝらん、
鯉のをどりしいけみづの、
　こほりもいかで厚からん。
あるとき母はかりそめの、
　かぜのこゝちと打伏して、
やまひの床につきしより、
　日にけにやする顔かたち、
くれまどひたる兄弟が、
　こゝろを砕くかひもなく、
ろが身は影とうすれつゝ、
　こがらしさゆる秋の野に、
聲よわりゆくむしのいき、
　今はと見ゆるすがたなり。
兄はなみだにかきくれて、
　をとゝに向ひいへるやう、
「母君いたづきましてより、
　ちからの限りつくせども、
をこたりたまふ樣もなし、
　よもぎか島の生くすり、
仙びとののむきくのつゆ、
　得てんと思どかひもなし、
いざさは今はかみぐを、
　祈りまつりてひたすらに、
こゝろのまことと磨きつゝ、
　こひのむほかの術やある。」
きゝてれとゝは躍りたち、
「兄うへさらむこよひより、
程とはからぬうぶすなの、
　神のやしろへまうでなん。」

かくと定めてはらからは、
其日のきはみうちつれて、
斷食けつさいたゆみなく、
夜ごとにやしろへ通けり。
うれしやな、けふは滿願七日なり。
こゝろにこめし月ごろの、
ねがひかなふもこの時と、
勇みたちたるはらからは、
ころもも笠もぬぎすてゝ、
うす墨おほふたそがれに、
かよひなれたる野中みち、
やしろをさして走りけり。
やがて彼方に着きけるが、
御井の傍へとたどりより、
打見もさむきましみづを、
かしらの上ゆうちそゝぎ、
やをら神前にひれふして、
よろづもわかず一向に、
祈りをへつゝはらからは、
むすぼゝれにし胸のうち、

すが〳〵しうや成にけん、
いとうれしげに立あがり、
我家のかたをこゝろざし、
歸らんとする折しもあれ、
ゑぐれの空のさだめなく、
俄かに湧けるくもりいろ、
する墨しもやながしけん、
天つそらこそ焦ぐるらし。
吹まく木の葉さきだてゝ、
遠のたかねのやまおろし、
さえまざるよと見る中に、
はら〳〵雪はこぼれきぬ。
まだゝく隙もあらでこそ、
千重に五百重に降しきて、
空もひとつにかきくらし、
かたへの竹のゆきをれの、
聲もかず〳〵きこゆなり。
「いそげやいそげ、やよ弟、
われらは笠ももたぬなり、
降りこめられて迷ひなぞ、

凍えて失することあらん。
　うれしやこゝは雁がしま、
家路のほどもはやちかし、
　こゝろのこまに鞭うちて、
なたゆみそ」と勵まして、
川ぞひづたひいそぎゆく。
されども雪はいやますに、
　いきはひたけう狂ふなり、
鷺のつばさかつきかげか、
　織る初瀬女がしらゆふか、
あら浪むせぶまつもとの、
　川べにれもる木々のゆき、
浪やこずゑをこゆるらん。
　あらしのやいばゆきの針、
はだへつきさく寒けさに、
　いでいる息もやむばかり、
手足もこほりはてたれど、
　雪をはらはんちからなく、
やう〳〵身さへ包まれて、
　心ばかりははやれども、
ひと足ごとにうちたゆみ、
　見る〳〵まみも暗みつゝ、
結べるくちもこむらさき、
　あはれやあはれあな哀れ、
眞手差かへてはらからは、
　あへなくそこに倒れふし、
雪よりさきに消えにけり。

感思在秋天

三輪義方

軒にさし入る日影の、やう〳〵薄うなりぬるも、何となう、物哀にて、只暑し〳〵とのみいひつゝ、過ぐしし頃、思ひ出づるもあやし。やをら、門べに立出て、打眺むれど、澄渡れる空に、白う、ほろやかなる雲の、棚引たるに、風の音の、いと高う聞ゆるも、うら寂しくて、道行人の、逢ては別るゝも、心細う、遠き烟の、打靡けるも、哀に見やられてなん。いでや、四の時の中にも、四方の草木の、枯行く頃計、悲しきはあらじ、さるは、一葉散りてと云ひ、霜を履

みてとも云へる心を、思ふにも、いと身にしみて、老のゆくへ、如何なるべきにかと、打思はるゝより、やがて、あだし人の上さへ、心に掛かる物なりけり。此頃、別れし人の、おなじ世には、在りながら、逢ふこと、かたきなどは、更にもいはず。みそとせ、よそとせの昔、あひうるはしみせし人の、今は、ありやなしや、こと問ふべき、よすがだになきなど、夢にも、疎くなりぬるをさへ、折節の、けはひに催されて、打忍ばれつゝ袖をぬらすも、あぢきなしや。何處もおなじと、いひけんも、かゝる折の、ことなりけらし。

されど、是等の物思は、たれも〳〵、有りぬべき、世の習ひなるを、彼の千里の海路を渡りて、うての御使に、まけられけん人々の、妻や子の、此頃の空を、打ながめて、思ふらん心、いかならんと、返す〳〵も、思ひやられてなん。

久米幹文の大人のうせたまへるをいたみて

永石德文

ことしはいかなる年にて、かゝる禍事のうちつゞける、いぬる五月の末つがたばかり、高平の大人にわかれ、またいくばくもあらぬ、今、大人の君をうしなふ。このかなしさ、何にかはたとへん、一年が内に學の親二人までなき世の人になりたまへり。今よりはいかにしてか、文の林にわけ入らん、いかにしてか、道のおくをもきはめん。おのれ大人にしたがひはべりしは、年やうやく十八のときなりき。さて大人の君は高平の大人といとわりなきみなからひなりければ、そがゆかりに、次の年より高平大人がり居て、もはら神の道のをしへをうけ、歌文などは大人の君に學びつゝ、ふかきみめぐみをかゝふりつれば、これにむくひまつらんと朝霄あさからず思ひわたれるを、天地の神もしろしめさゞりしか、あへなくもむなしき人となりたまひぬ。あなかなしきかも、あなうれたきかも、只肝つぶれ胸いたくて、いはんすべせんすべもしらず。せめてはとて、このことばをさゝげはべるになん、あはれ現身はすべなきものなりけり。

千年もとかねてあふぎしおい松は
　たのむかげなくなどかれにけん

しら露の玉ときえにしあとゝひて

ろのはかなさをおもひころやれ

十五夜の興

竹園女史

いとふるきころより、秋毎の最中の月を愛る事、貴き賤しきのへだてなく、なべて待思ふならひ、今の世もかはらざりけり。されど大かたはくもりがちなりといふ。ことしもいかならむと思ひわづらひしに、ひるの程より空よく晴わたりぬ。かくては雲のさはりもなからましと、暮るを待わびゐたるに、打わたす岡邊の松をはなれて、やう〳〵に光りすゞしく立のぼるさま、えもいはれず。かゝるさやけき月をひとり見むもあたらしくて、近き邊りに住る友許人をやりてまねきたるに、とみに二人三人打つれて入來りぬ。いとうれしくて、夕つかたものしたる團子枝豆など取いで、こはわら〳〵しきものにしあれど、三ッ栗のへだてなき中は、山柿の赤き心もしり給ふらむ、月にさゝげし豊神酒の殘りあり、いざくみたまへといへど、おのも〳〵よろこびて、さす程に、のむ程に、秋子といへるが何思ひけむ、あはれなる事どもかたり出て、さめ〴〵なくを桂子といふがはらたゝしげに進み出て、あないまはし、かく打解たるまとゐにひとりなく事やある、とく歸り給へとて聲高に罵じるを薫子といへるが詞をつぎて、妾日ごろたしまぬ酒なれど、今宵ぞかりて、ちよきをりはあらじ、さるをなきもしいかりもしたまふ事のをかしさよとてふしまろびて笑ふ。竹園かたはらに在ていひけらく、かゝる酒の癖は物えらぬ人の上にころあらめ、いづれの君たちも年ごろ學の道ふみ分給ひしに、かくはしたなき事ないひたまひそ、さる事はおきて、かたみに好める歌よみかはしたまはずや、とすゝむれど皆々こたへて、誠にさなり、えかれども先主人より讀出たまへといひければ、取あへず、

わが宿のものならなくに月見よと
こよひは友をつどへつるかな　竹園

うれしくも思ふ友どちまとゐして
こゝろくまなき月を見るかな　薫子

名におへる秋のもなかの月見れど
こゝろの雲も晴れわたりけり　秋子

ちりほどの雲もかゝらぬ秋のよの　桂子

つきや眞澄のかゞみなるらむ

かゝるをりしも、客人の家より迎の車來れりといふ、又の日をちぎりて、外の方までおくり出るに、月のあたりむら〳〵と雲のかゝりければ、

ものよの月の面わをこゝろなく

などむら雲のたちかくすらむ

ひとりつぶやきつゝ門さしかためて、枕につきぬ。

兼題

十一月
- 五日
  - 歌……殘菊
  - 文……鶏中時雨
- 廿日
  - 歌……寒草帶霜
  - 文……歌の添削を乞ふ文



●御救恤　本月三日、北海道、根室火災に付き、罹災者へ御救恤として、天皇皇后陛下より、金千三百圓下し賜はれり。

●野津大將令夫人の淑德　野津大將令夫人かねて淑德の譽あり。年は四十路を四つ五つ越えたるばかりなるに髮も强ひては梳らず、身には洗ひ晒しの衣を着、木綿博多の帶を結べるなど、誰かは之を武勳赫々たる野津大將の令夫人と心付くべき。訪ふ人あれば自ら出でゝ迎へつゝへだてなく、語ふに、威儀を衒ふ人々は慚づるもありといふ。夫人は高島將軍の令妹にして、妙齡の頃野津家に嫁がれしが、その頃は家貧くて、日の衣食にさへとぼしき程なりければ、晝は麻布を着け、夜は四の布團一枚に、一家のものもろともにいねたるなど、くるしさいふばかりなき境遇を經たり。左

れど今日幸に人並の生活を營むに至れりとて、我良人は軍人なり、その家族として徒らに飽食暖衣して、昔を忘るゝ振舞あるべけんやとて、平素節約儉素を旨とせりき、この程久し振にて、東京へ歸へられしが、餘儀なき用事ありても、日中は敢て人の家を訪はず、其所由を問へば、微笑して曰ふ、京童の口は五月蠅し、廣島や鹿兒島ならば、左ばかりはあらざれど、東京には苟にも目に觸るゝものは何爵夫人は何、何子令孃は何と容貌の妍醜扨は衣服の如何に至るまでも品評する習ひぞかし、左れどこそ晝は成るべく、世を忍ぶなれといへり、夫人又一領の古き單衣を人に示して曰ふ、是は良夫が貧しかりし時召したまひしものなり、依りて鄭重に保存して子孫に遺し、長く貴に居り賤を忘れざるべき鑒戒とせさせんと思ふなりといふ。これ今は縞柄も朧なるまでに洗濯し、十重二十重に綴り合せたるは、昆布の如くなりといふ。此誠に野津家の重寶にして、令息令孃も、亦能くこの節約の家憲を守り、未だ紋附の服を着せしことなく、夫人は勿論如何なる衣服にても、十二三年着用するを期せらるゝとなん。夫人の美德世の華奢者流を愧死せしむべし。

●**小中村博士逝く**　古典學を以て、一世に推さるゝ博士小中村清矩大人は去十一日急に膓加太兒に罹りて、俄に長逝せられたり、博士元來攝生家の聞ありて、酒も烟艸も用ゐず、されど毎年冬季に入れば膓加太兒を起すが例なれば此の度のも例の持病なりと思ひたりしがその病の激しきより醫師に見せたれば類似虎列剌との診斷なりしに十分の手當せしかども其の効なかりしは遺憾といふべし。博士生平讀書に耽り、夜十二時迄は、端坐して書籍に向ふ、こたびも學士會院の講演を約したれば其が下調べせんとて八日の日根岸なる別邸より本宅に歸り、書籍を取出したるが、其の儘病臥せられて遂に起たずなりしかど其の臨終までは、枕頭卷を繙き居れりしといふ、篤學の人といふべし。博士の傳は其の自著に詳かなり、異日世に公にせらるべきか、ことし齡七十五歲なり、今此の人を亡ふ古典の爲に惜むべき限にこそ、さて十六日神葬式をもて、谷中の岡に葬むられたり、貴顯有識、會葬せるもの千有餘名なりしといふ。

●**女丈夫蓮壽院逝く**　第五銀行頭取、有村國彦氏の母堂、蓮壽院は本月二日八十八歲を一期として、みま

かられたり、母堂は薩摩の藩士、森元某の長女にて、幼きときより最も文學を嗜み、分けて國歌を能くし、閨秀の譽れ夙に高かりき。長ずるに及び、同じ藩士有村善兼氏に嫁せりき、をさ〳〵男子に劣らぬ氣節ありけれど若き折は常に女丈夫を以て目せられたりとぞ。男四人を擧ぐ、長は今の樞密顧問官海江田子爵にして、次を雄介氏、三を治右衛門氏と呼ぶ、二人は安政五年三月、水戸の浪士十餘名と共に、井伊大老を櫻田に要擊せし人にて、電光一閃其首級を落しゝは即ち治右衛門氏なりしとぞ、四を今の國彦氏となし、有村家を嗣ぐ。氣節に富みたる蓮壽院は雄介、治右衛門の二氏が彼義擧に與みして身を果しゝ時の如きも毫も愁傷の体を現はさず、却つて海江田氏國彦氏を激して、益々尊攘の事を努めしめたりきとぞ、蓮壽院また曾て京都に遊び、彼の有名なる近衛家の老女村岡と交を結びしが、爾來友情益深かりしとぞ、其遺詠並に老女村岡より贈りたる書翰を、いま讀みもて行けば、健氣なる二人のをうなの、昔しのむれていとゞ床かしき心地ぞせらるゝ。

櫻田の事ありし前に讀める歌

弓張のつきもしぐれにくもるかな
　おもひはなたむ隅なからまし

旅中の歌

故郷のかきねのつゝじさきぬらん
　たよりきかせよ山ほとゝぎす

近衛殿には親しく參り給ひけるよしにて陽明殿の花の宴にめされて

糸ざくらかゝるめぐみの露をへて
　くむもかしこき花のさかづき

陽明殿の御裏の君嵐山に渡らせ給へるとき

のどかにもきみがめぐみに大井川
　流れをくみしけふのさかづき

村岡老女の贈りたる書

御めで度御文下され恭く久々に御目もじの心地にて拜見いたし候御揃被遊御機嫌よく御前さまにもさはりなく御逗留被成事御めで度扨私事此度は結構に仰せ蒙り御布知頂戴質に〳〵めうが至極難有とも何とも言葉にあまり只々夢とも身の置處なくありがたく御目もじ致候はゞ御吹聽御禮も申入たく候はんと樂み居候處少々風氣にて御座候處又々御出立

も御近くに相成とても此度は御目もじは不叶云々
御たにさくの事仰下され承り存候安き御事誠に八
十七歳の老筆見ぐるしく候え共年に御あやかり被下
候樣御遠慮なく明日あげ候つもり云々
村　岡

蓮壽院樣

思ふ事ありける頃

山のはにかゝるうき雲ふきわけて
くもりなき世の月をまたるゝ

●如意輪寺の再興　小楠公の鏃に其の名を止めたる吉野山の如意輪寺は、正平の昔し、不幸兵燹に罹りしより、僅に假堂を存するのみなりしが、今回奈良縣、吉野郡、川上村の豪農、土倉庄三郎氏は川上村並に自己の名義にて金二万圓を奇附し、尙ほ良材を喜捨し之を基金として、廣く同志の寄附を募り、伽藍を再興して名刹を千歳に傳んとて有志者は奔走せりと云ふ。

●貞婦袈裟の碑　千歳の下、貞操凜として朽ちざる袈裟の碑も、こゝらの歳月をへて今は殆んど朽腐に歸したるを以て、山城國、紀伊郡、上鳥羽村の有志者、發起となりて、義捐金を募集し、新たに碑を建てんとす、碑文は林羅山翁の撰文を再刻し、また細川潤次郎氏にも更に撰文を依賴すべしと聞く、いとよきくはだてなりけり。

●湊川を埋めんとす　これにひきかへて楠公、忠死を以て、有名なる湊川を埋めんと、企つるものあり。旣に市役所の調査に上れりといふ。そのよしをきけど、土地を拓くと、兵庫と神戸とを密接せしむるとにあり。かゝる舊蹟の風致に關係あると、名勝のその土地に光彩をそふることは所謂る事業家といふもの、かへりみざるなり。あはれ、くちをしのわざや。

●臺灣の烈婦　國亡ぶるも尙ほ、後庭華を謡ひ、紅閨深き處ろ、徒らに粉黛を凝すは、支那婦人の常なるに、臺灣の婦人は之れと異りて、健氣にも戰場にいでて、或は兵糧を運び、或は間諜をなすなど、敵ながらも其の覺悟感ずべし。先頃我軍の臺灣府に進めるをり、頭家厝の土匪は之を防ぎ、合戰二日に渡りたるがこの地に住める婦人あり、十一歳と八歳なる二人の兒を育てけるが我兵の入り來るを見て敵に面を合すは女子の恥辱なりとて、二人の小供を抱きて、井戸に飛込みたり。然るに水淺くて死なざりしかど、再び他の井戸

に入りたるを、我兵來りて之れを救ひ上げ、携へたる寶丹などを與へて介抱せしに、婦人は息を吹返したり、されども四邊に我兵の居るを見て、又も奮然として、ありつる石もて小供を擊殺し、自らも亦た石に觸れて死にたりと云ふ。其行は狂に似たれども、其の情を察すれば、實に悲酸の極みならずや。

●文部大臣の教育意見　西園寺文部大臣が、このごろ帝國大學をはじめ其他の學校にて、卒業證書授與式のをりに陳へられたる祝辭中にて、教育上の意見の大體を知るに足るべきものを集むれば、

(帝國大學に於て)

諸君が今日を以て各専門所修の業を卒へられたるは本大臣の殊に賀する所なり昨年日清戰を交へて以來連戰連勝して能く帝國の國威を宇内の表に宣揚したり而して此の交戰中に在て我教育社會は毫も其步武を亂すなく益ます其の秩序を進めたるは我帝國教育の爲に頗る名譽とする所とす今や我國は戰勝の名譽と共に大に國運の上進を异せんとするに當り社會進步の爲に最も與つて力あるものは學者にして又實に世人を啓導し文運を上進せしむるものは實に學者の責任なり諸君は多年螢雪苦學の功を積み各専門の學科を修め今後其の學ぶ所を世に施して國運の隆昌を助くべき任を負ふものにして其責や重く大なり本大臣は諸君が決して其責を空しくせざるを信ずるも尙ほ一言を述べて以て諸君に告ぐること爾り云々

(第一高等學校に於て)

今日の我國は昨日の我國にあらず宇内萬國に對して將來國威の宣揚を期する諸君の責任の頗る大なりと謂はざるべからず通商に貿易に文藝に政治に此等文明平和の戰爭は日に月に益々激烈となるは誠に方今の大勢なり此競爭に打勝て凱歌を揚ぐるの責任は懸りて諸氏の肩頭に在り本大臣は彼の百里の道を行く者は九十九里を以て其半程とせざるべからずとの俗諺を以て諸氏の前途を餞し併せて此盛典を賀す云々

(高等商業學校に於て)

今の時に當り外列國に向て國威を宣揚し內富國の道を立つるは先づ國家經濟の發達を計るを急務となす而して國家經濟の發達如何は通商貿易の消長に因て決す維新以來本邦の通商貿易は實に長足の進歩をなせるも商界の前途は猶は遼遠にして卒業生諸氏の責任は誠に重大なり凡ろ文明の商人たる者は常に正大

有爲の四字を記臆して事に當らざるべからず云々

(音樂學校に於て)

音樂を以て敎化を禆補するは古今東西の共に同じき所にして國民の性情を調和し風を移し俗を易ふるの道之に過ぐる者なし文明の步を進むるに從ひ益々其用の廣く且つ大なるを見る本校創設以來日尙は淺しと雖も內外の音樂を參酌考定し獨り之を校內の生徒に授くるのみならず偏く全國の學校に施設し其進步頗る見るべきものあり茲に第八回卒業式に當り本大臣は諸子が光榮ある卒業證書を受領するを見て欣躍に堪へず益々其學修したる技藝を錬磨し之を家庭に學校に施し以て我敎化を禆補せんことを望む云々

(國學院へ贈れるに)

本大臣は未だ親しく國學院を觀るの機を得ずと雖規則の示す所に依て一の重要なる敎育上の建設たることを信ず國文の改善發達は國運の進步と相關すること甚だ密にして宜しく夫の開物成務の學と並進して相悖らざるべし本大臣は本院卒業生諸子が今後益々研精の勞を積み國文の改善發達に力を竭し我が國運の進步を禆補せんことを望む云々

●不就學女兒の少數なる原因　秋田縣にては、同縣敎育會へ「學齡女兒の就學數僅少なる原因如何」と云ふ問題を發して意見を徵したるに各員の陳述せし所左の如くなりしと云ふ

一　就學督責規則を勵行せざること

二　現今の敎則は男兒の爲めに設けたるが如く女兒に必須なる學科を輕視せること從て其敎則は女兒に不適當なること

三　前項の結果として學校卒業後も家事經營上敎育を受けざるものと徑庭なきこと

四　市町村に於て就學督促をなすに女子を督責するは男子を督責するが如く嚴ならず

五　學科の男女別ならざるによる

六　女子に必須なる裁縫科輕きに失す

七　女子の爲めに敎則を設けざるによる

八　女子特種の薰育を度外視したるによる

九　男女敎室を區別せず又女兒も男子と同しく椅子に倚らしめ平座せしめざること

十　授業時數現今の女兒に適せず

十一　女子には生活上敎育なきも差當り差支なしとの誤解をなせること

十二　舊來の弊習により父兄が女子敎育を無用視す

十三　近鄰の惡習慣(誰々の子弟は就學せしめぬ故自巳の子弟も出さずと云ふこと)

十四　子守、留守番、食事調理の補助等家事の補助

をなさしむること

十五　母親が深く舊慣に泥み居るの結果即ち母の敎育の行届かざること

十六　見苦しき衣服を纏ふて出校するを耻つること

十七　農家大抵かて飯（米に他の穀類蔬菜類を雜へ炊くもの）を食するも行厨にはこれを携へしめ難しと云ふこと

十八　富の程度低きによる

十九　各府縣と交通不便なる爲め刺戟を受くること少なく舊藩時代風を墨守し居るによる

二十　早婚の弊あること

●わが國の辭書（つゞき）

○色葉字類抄寫本十卷は、作者詳ならず、元來治承年中、内膳ノ典膳橘ノ忠兼の著はせる、色葉字類抄三卷有しを、後人の增加して十卷となせる者にして、其增補者は、洞院左大臣實熈公にはあらざるか（康正長祿頃の人）思ひ合さるゝ事有と、黑川春村氏はいへり、伊呂波の次序を以て言詞の文字を記し、其中を又天象、地儀、植物、動物、人倫、人體、人事、飮食、雜物、光彩、方角、員數、辭字、重點、疊字、諸社、諸寺、國郡、官職、姓、名字、等に部分せり、後の節用集の祖書にして、即今世競ひて顯はるゝ、日本辭書の濫觴なりといはまし、三卷の原本は天保中黑川春村氏の始て購ひ得たるものにて、今も傳本至て少し、本朝書籍目錄に、世俗字類抄とみえたるは、此書の初の名なりと同氏はいへり、次に○下學集二卷は自序に文安元年東麓破衲とありて、天地以下十八門に分ち、字義を注し、傍訓を加へたり、たゞ伊呂波を以て分けざるのみ、これは專ら文筆の爲に、五山の僧の著はせるものとみえて、刊本數種あり、古く學生の用を爲したるものと覺ゆ、但し空賢の注に、上古之時、倭漢兩國、未レ知ニ家居一、人々居ニ土巣一、恙虫螫レ人、故本朝書札、往來相勸云ニ空賢一也、言土窠之穴賢閉塞、可レ防ニ恙虫一云、とあるをみて、當時既にわが邦語の古義を取失へる事久しきを知るべし、此書のみならず、此時代に著はせる塵袋、埃嚢抄の類に、まゝ古言を誤解して記せるが多かり、○節用集は、群書一覽に、予が藏する處の古寫本、卷末に明應五年五月三日としるして、花押あり、とみえたるに據れど、著作の時代の大かたを知るべし、今に傳はれる古板の横本も、年號を記さゝれど、明應に遠からぬ刊行と覺ゆ、南都の饅頭屋林宗二の作と云傳へて、饅頭屋本と稱せり、爾來德川幕府の世より今に至るまで、此書名によ

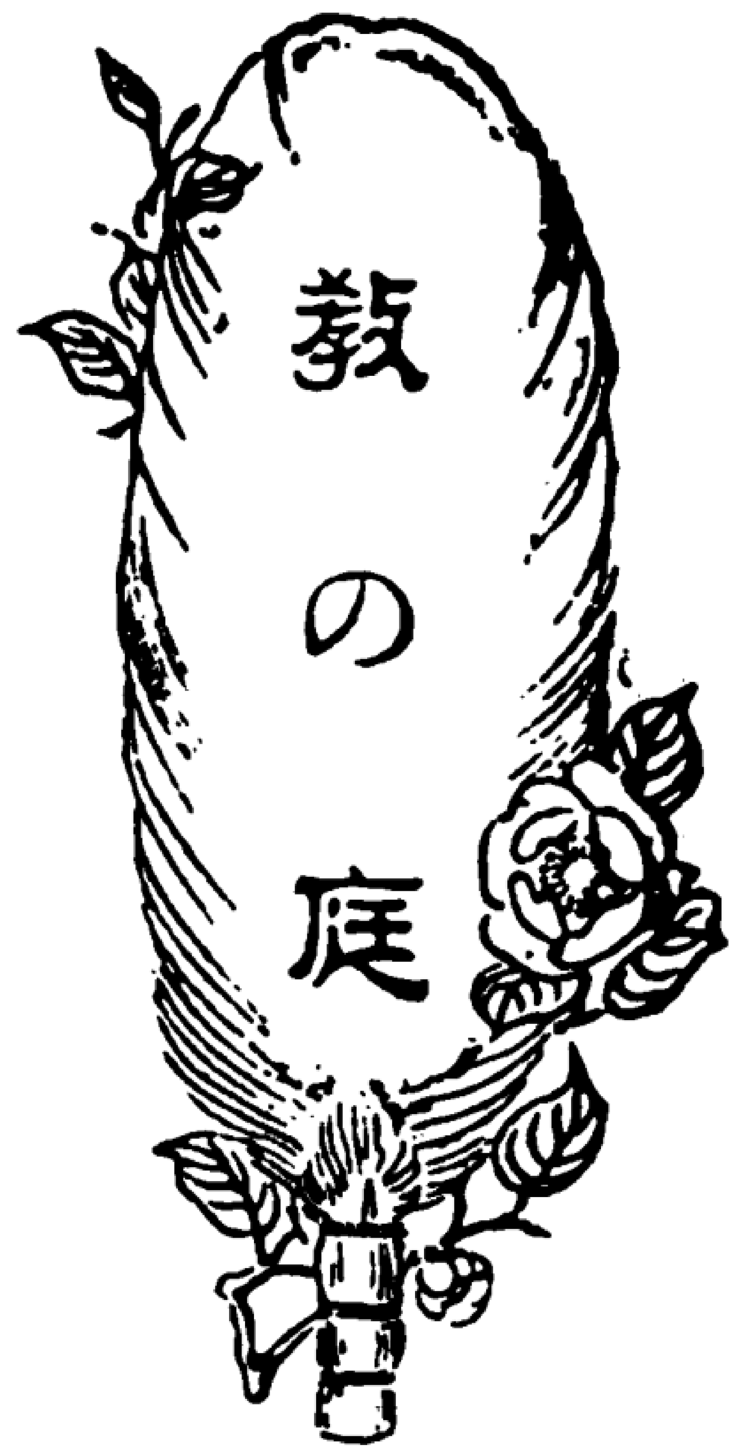
り體裁を同じくして、刊行せるもの幾種といふ事を知らず、其中に慶長二年の活字本にて、易林本と號する者最も古けれど、饅頭屋本より字數いたく增加せり、又元祿中刊行せる、合類節用集十卷は、本名を和漢音釋書言字考節用集と稱し、槇島昭武の撰なり、節用集と名づけし物の中にては、殊によろしき物と覺ゆ。

以上の書は、古訓を考ふべき資料となすべきものなれど、新撰字鏡以下は漢字を畵引として、それに注したれど、字書といふべくして、辭書といふべからず、和名抄以下は、漢籍に所謂訓詁の書にして、字書にはあらず、色葉字類抄、節用集に至りては、全く國音なる伊呂波を以て分類したるものなれど、辭書の始とやいはまし、然れども世俗に便ならんため、天文地理の類に分ち、猶漢字漢語をもて基としたれど、猶和名抄の部屬たるを免れず。

是よりは、全く言詞のみに屬する書を擧げて、當今學校にて行はるゝ、國語學言語學の始を云ふべし、但し此條は、去明治二十六年、第一高等中學校に於て、夏期講習會有し時、演述したるを、增減して載るに過ぎず。

我が國の古言を講明する業は、古へ聞く事なし、天曆の朝、梨壺の五人に命じて、萬葉集に傍訓を加ふる事有しに、當時既に明亮ならざる事の多かりしは、經年上流の人漢學にのみ心を入れて、本朝の古實古語を講談する事の、絶てあらざりし結果にや有るべき、然れども、延喜より以來、幸ひに詠歌の道盛に行はれて、勅撰の歌集打續き、諸人稍く此道を研鑽せしかど、堀河帝の頃時の名匠と稱ぜれたる、藤原清輔、(奥儀抄其他の著あり)藤原基俊、(悅目抄の作者)源俊頼、(無名抄を著す)の輩、後進に稗益あらんとして、萬葉集の古言をも考へ、其歌の解釋にも及びたり、中にも僧顯昭は、殊に博識なりしかど、著はせる袖中抄には、古へより當時に至るまで、歌の詞の子細ある事のみを各徵證を引て論せり、爾後又此類の學者に、仙覺、由阿、二人の法師あり、但し是等の人々は、後に云ふ歌學者の祖と云ふべくして、只勝れたる歌を詠出さん便として、此擧有しもの丶如し、當時又てにをは假字遣ひの事を云ひ出て、其門人に示しゝは、藤原俊成、其子定家の兩卿より始まれり。

(未完)



十月廿日 兼題 神嘗祭 （天地人のほかは原稿到着順なり）

天　本郷區森川町一番地　三浦 時子

としもよし世もゆたかにて神なめの
けふのまつりにあふかたのしさ

地　長野縣長野町　太田 貞子

にひよねを神にさゝけて此のとしも
ゆたけかりしとまついはふかな

人　廣島市稻荷町　香川 頴子

けふはとて備へますなりれはかみの
みめくみしるきあきのはつほを

おほかみの大ひろまへにたなつもの
さゝけまつれるけふのゆたけさ
大堀 こずゑ子

八束穗にみのりしいねをかりほして
かみにさゝくる今日のうれしさ
眞鍋 直子

豐かなるさしの足り穗のにひしねを
かみにさゝくる今日のかしこさ
大津 辰子

あめ風のなやみもしらすみのりてし
ことしのあきのはつほさゝけむ
松本 よね子

今日さいへはいはひまつらぬ人もなし
ことしのはつ穗かみにさゝけて
大津 千枝子

にひよねを神にさゝけてとよとしの
みのりをいはふ今日そめてたき
彦坂 尋子

とよとしのしるしの稻をさゝけつゝ
まつる今日こそうれしかりけれ
近山 濱津子

御てくらを神にさゝけてたみくさの
にきはふ御代そたのしかりける
勝家 かをる子

新しねの御け御きさゝけたみくさを
いのりたまへる今日のかしこさ
尾崎 亮子

おほきみにさゝけん物さあさゆふの
こゝろにかけしけふのはつよね
市川 桃子

いくあきもにひなめまつり祝はまし
伊勢の御かみにはつほさゝけて
曲澤 秋香子

あまてらす神のみまへにたなつもの
さゝけてまつる今日のたふとさ
德永 萬壽子

ゆたかなるさしを祝ひてにひよねを
いまそさゝけてかみまつるかな
小野田 のぶ子

八束穗のはつ穗をかみにさゝくらん
けふのまつりのみてくらとして
中村 芳尾子

たてまつるかむ嘗よりもたみくさの
しかほをかみのまつみますらむ
丸山 須磨子

ゆたかなることしの秋のたまつもの
鈴木 美惠子

御けにかしきていさゝけてむ

初穗もてしろきくろきをかもしてし
あかきこゝろをかみやめつらむ
牧野幸子

新しぼりいささゝけてむなになくも
かみきこしめせしつかまこゝろ
牧野淳子

すめみまにことしの秋のかけちから
さゝけてまつろけふそめてたき
牧野時子

かむ嘗のまつりかしこくかけちから
おきたらはしてつかへまつらん
佐々有鄰子

けふさいへは高きいやしきおしなへて
いせの御かみに御けさゝくなり
高井孟子

きよさしのしろしのはつ穗すめ神に
さゝけまつれろけふそうれしき
松本乙子

かきりなき御代の榮ねをいのらなん
うち外のかみにみけをそなへて
松田靜江子

あまてらす神にはつほをそなへつゝ
ゆたけきあきをいはふけふかな
靑木春子

新しれをさゝけまつりてかしこくも
かみまつりする今日そたふさき
田中りん子

天てらすかみのみまへにみさしろの
なたのはつほをけふさゝくらん
永井さい子

ゆたかなる御代のしるしさ神路やま
けふうちあふくかけそかしこき
植木鋼子

天つ日のみかけにみのるはつぼをは
さゝけてかみをあふくけふかな
加藤琴子

ゆたけくも神のめくみにみのりてし
初ほたむくろけふにもあるかな
松井千代子

神代よりかみのまもらすやすくにを
なほやすかれさいのろけふかな
古市義舞子

たなつものあまたさゝけて皇かみに
ゆたけきみよをつくろけふかな
内田たけ子

皇かみにことしのあきのたなつもの
さゝけてけふはいばひつろかな
内田はる子

ちはやふる神なめまつりかしこみて
けふのさかねをわれはいはゝん
土肥仙子

すめろきの御代の榮ねのしろしさて
千代もかはらぬけふのかむなめ
小幡富美代子

神なめの今日のまつりは千はやふる
かみもうれしさきこしめすらむ
小幡千代子

神なめのまつりのにはのゝさけさに
御代のさかねも見ねにけるかな
山田榮子

お任神のめくみになりしにひよれを
みまへにさゝけいはひまつらん
池谷榮子

神なめやさゝくろみけにおほきみの
めくみのつゆもかゝりけるかな
吾妻ちか子

八束穗にみのりしいれをさゝけつゝ
みまつりすなりかみのひろまへ
諸井節子

くにやすく民もゆたけきかむなめは
さかゆくみ代のしろしなろへし
伊賀直子

神なめにさゝけまつれる八つか穗に
山本いさ子

かみのみいつはあらはれにけり

わたらひやいすゞの川にきよめして
　つかへまつれるとしのかむなめ　舘脇ます子

ゆたかなる御代のしるしとはつ米を
　かみにさゝけていはふけふかな　杉浦いさ子

かむろきのうゑおほしけん八束穂の
　ながきめぐみをあふぐけふかな　保坂いま子

榮はゆく御代のしるしのかけちから
　かみもうれしとみそなはすらん　芳田芳子

いのりつゝつくれるみたのわさ稲の
　はつほをかみにいさゝけてん　福地ふく子

あきの田のたりほの稲をさゝけつゝ
　かむなめまつりいはふけふかな　島田悦子

雨かせのめくみゝちたるたらし穂を
　かみにさゝけて千代をいははん　徳武美子

うちひさすみやこも鄙もおしなへて
　けふにひしれをかみにさゝくる　杠秀子

みや人もこゝろゆたかにいはふらん
　ゆにはのみつ穂かみにさゝけて　河野文子

神なめにしつかさゝくるはつ穂にも
　ゆたけきとしのさまはみえけり　金松高子

大かみもけふさゝけてしいれのほに
　ゆたかなる世をみそなはすらん　久松せい子

千はやふる神代ながらのかむなめは
　たふときことのかきりなりけり　久松さく子

おほ神のめぐみになれるたなつもの
　さゝけまつりていはふ今日かな　河野た加子

ゆたかなることしの秋のはつほをは
　かみにさゝけていはふけふかな　大海原芳子

すめ神のみめぐみしるしたてまつる
　けふのみつ穂のうるはしきかな　静間みつ子

十月廿日兼題　女の心得

天　山梨縣北巨摩郡駒井村三十七番戸　保坂はま子

すべて女は立居ふるまひをはじめ言葉づかひなどやさしくしとやかにこゝろあらまほしけれあまりあら〳〵しくふるまひたらんは其人の品かたちはいかにもあれ心おとりのせらるゝわざなれはぞかしさてやさしくしとやかなる中にもおのづから動くまじき心をこゝろもちたけれたゞにみめかたちのみよしと見ゆるもそのこゝろ行ひよろしからざらんにはなどてかまことの女とはいふべき世にはいさゝか學びの道を心得たりとてなべての事にさしいでおのれのみものしりたるげにて學びにうときものをも事もなげにいひあなづりなどするありさてその人はいかなる事をかすらんとみれど學びの道を心得たりとはゐもはれぬふるまひのみ多かるはいとをかたはらいたしやその學びは稚兒に眞なる月を指も

てさし教ふるが如しまとかに明きものやがて月なりとしりてはさして教へん指もやうなし身修まり行正しからんにはそがためにすなる學びてふ事もまづはなくてもありぬべしとはいふものゝ學びの道をも知りたらんは一しほの事なるべしすべて女は高きもひくきも人のつまとなりて夫につかへ姑につかふるものなれど心どへすなはにかりにもみだりがはしきことなくかの清少納言のありがたきものにしつる姑におもはるゝよめぎみとならんと心すべくなんさてこそ國の爲君のためとなるべきよき人どもをやしなひたてゝまことの人の母たるべけれされど世の女とよぶもの能つとむべきことは千引の磐のなか〳〵に重くしらまゆみいみじき事なりかし

地

大阪西成郡今宮村六六三　松田靜枝子

女てふ女の中の人となれたゞ人なみの女ならずてその本みだれて末をさまるはあらじとかあはれ女と生れたる身が心得べきその本とはそも〳〵何なるべき裁縫に家事に紡織に庖厨にげにこれらは女子が心得べき事ならむされどいまだこれらをもて女子が心得の本とはなすに足らざらむ思へど女子の生涯にこゝろがくべきことは秋の千草の數にも劣らずあはれそが中にいかなる心得ぞその本なる

それ女子たるもの家にありては孝嫁しては貞この孝貞の道をふみ迷はず甲斐なき女ながらもこの敷島のうまし國にうまれしことを忘れず愛國の氣象は寐るまにも失はずおのが懐にかき抱き乳をふくめる幼兒を他日國家の干城と育てあげてこそ誠に女子の中の女子たれあゝ金鵄勳章は陸に海に功績をたてし丈夫の胸にかゞやくなり良妻賢母てふ名譽は女子をして耻かしからぬ女子の頭上に閃くなりあはれ女子にして愛國の士氣にとみなむこの本だにありなむなどかその末のをさまらざることのあるべきやは

人

播磨龍野　眞鍋直子

柔順温和なるこそ女の天性なれされど此天性にたがふ事なく立居ふるまひより萬物しづかに貞操をおもんじ慈愛を旨としよく人を敬ひ分に應じて節儉をことゝしおごりをつゝしみて何事をもよく忍耐して淑雅優美の德を養ふべしいかにみめかたちうるはしくとも女子に德の行なからんには人より尊敬をうくる事あらじされどよく〳〵容儀を修め常に身をかへりみて操正しく行を汚さぬやうにこゝろをつけてつゝしむべきことになん

人

播磨龍野 田津木ひさ子

女のつとめは人の妻となり母となり夫をたすけて家を治め子を養育して家をれてこすにわりされど夫につかふるにも子を教ふるにもまた何事を爲にも學問の力によらでは出來かたけれど常にたちぬひのわざ飲食の調理の外にいとまあらは怠らす學の道を心がくへしされとわつかの事をならひ得たりとて人にはこり物しりかはなるはいと〳〵かたはらいたく口をしき限りなれとよろづひかへめに言葉すくなくなさけ深くたの賢婦淑女を鑑となし德を修め行を正しよき女の路をつとめんところ心かくへけれ

碓井信子

女子は普通のまなひは云ふも更なれと 殊に貴きいやしきけしめなく心得へきものは育兒家事の整理起居ふるまひの法になんそ か中にも裁縫の業はかりしらで叶はぬものはあらず抑々 上代より賢母良妻なと ゝ稱へらるゝは必す裁縫の業にたけさる人はなし 然るを今の人やゝもすれは少しの文學を鼻にかけ裁縫の道はいやしきもの ゝやうに思ひ違ふ 人もありとかや 殊に辭事のきはみといふへし如何に文學にたけれはとて如何に文學のうるはしけれ はとて如何に顔や貌の美しけれはとて女子と生れて裁縫の業にくらくはいかてか誠の道をふむ事 を得ん終にはつまはしきを受くるやうに至りぬへし實に女子一生の恥辱になん如何 にとなれは女子は國の母なり 而して內事を治むる者なれは家政のわきまへなき時は一身一家の衰へより終には一國 にも及ほすやういたる事もやあらんと思ひて 賤か心にうかふ一ふしを物しぬあはれ明治の御代に生ひたちなから此等の業いやしとおもひぬる姉妹あらは とく心をあらためて女子の心得をなあやまりそ

梶井久子

至り深き人のきははいさ知らす大方女は感情強 くして之を抑ふる意志弱きものなれは 常によく怒りよく笑ひよく悲しひよく喜ふその怒り喜ぶ惡しきに非す怒るへき處を怒らさらは人我を辱めん喜ふへ き時を喜はさらは人我を譏らんされと 時にのろみ事にあたり感情の動くにまかせてさもなき事をたけく怒りいたく笑ひいみしう悲しひひころの愼 嗇うち忘れてあやしう口 さかなうなりひとのひめ事をさへうちいてての しりさわきなとしあさましき心のそこを人に見られはては親 夫にも疎まれ我子にも侮られ世の人々にも さみせられて家の內には時ならぬ浪風をたて世の中にも つまはしきせらるる事往々あるならひなりかし程へて思ひめくらしたらん時さいふ程の事にもあらさり しをとさりたらんにはいかて恥しからぬかは 千度悔ゆともすへなかるへしされは時と事とによりはいかに腹たゝしきもいかになしきもよく 耐へ忍ひていろにも出さすさて時ありて始めて怒り始めて悲しふともゆめ 口さかなくのゝしるへきにあらす聊少なに心深きは中々心にくしやこは 感情強き女の身には 極て難きわさなれと常にしか心かけたらんにはなさかはしねさるへきかかれは至らぬおのれらは心をもて心を抑 ふるを常の心得とし身を終るまてやあまちなからん事 をこそ願はしかるへけれ

佐々有鄰子

庭の訓をまもりて 朝は鳥かれに夕はねよとのかれに起ふしするこそさ故人の言葉げにわするましうなん內日刺みやこの 空も天さかるひなのすまひも貴賤 はありとも身のおこなひ心のつつしみは親に孝夫に貞君

に仕奉れは火をもふみ水にもいりてまきはしらふとくたくましき　大和魂をます〳〵光りくもらぬやうに男より女はひとしほみかかまほしきことにこそ

勝家かをる子

女に四徳といふあり女子とあるものはこを心得てはあるへからす　一には婦徳といひて孝弟の道は更なり和順を守りて貞信になさけ廣く　憐みふかきをいふ二には婦言といひて　言葉おたやかに數少なくうや〳〵しきをいふ三に婦容といひて身もちをさめ　きのそこ清く立ゐふるまひの靜におちつきたるをいふ四に婦功といひて　苧うみ績き縫ひ裁をはしめ煮やき料理のわざなとは　必手つからしならひ賓客のもてなしより上下旦夕のことまても皆其術を知り得て　常に用意すへきをいふ女の心得は唯この四徳にこそ

大堀こずゑ子

おしなべて人の心得はいと多きそがなか　にまして女の心得はことに夥しくかつ重しいざ賤が身の心に浮びつるまゝに筆　とらんなべて女たるものは年老いたると幼きとをあげつらはずひたす　らたちゐふるまひおとなしくおのが心をやさしくし言葉やはらか　にすべてのふしおとなしくすべしまた年やゝたけとつぎぬれば舅姑をはじめとしよく〳〵　良人につかへ貞操を守り内を治め母となりては子女をよろしきに教へ　導きつれに清きを旨とし衛生を守ることそのぞましけれされど心の　せまきまゝにともすれば腹立だしくあるはねたみあるはめうへに向ひ　禮なきなどありて女の心得をわするゝものあまたありて　御國の光をも落すはいと口惜からずや世の女たち少しは心すべきことにこそ

太田さた子

女の心得へき事はいと多からん古へ人のいひこにも心もちゐすへきをさる人のあるましきことそかなしけれわきて貞烈の道は女子の最も謹しむへきことになん口さかなく物云ひのゝしりかたちしとけなく　されはみたらんはやかて其の心迄おしは　かられていと心おとりせらるゝそ味氣なき織りぬふわざ又心すへきことなり家とみ豊かなるきはみも只此の道のかけたるそ口惜しうあかぬ心地　するや才高く學ひの道にくからぬほども針とるすへしらぬなときくからにれたういま〳〵し　優にやさしき風雅のはし〳〵またあらまほし花鳥の　色音につけて歌一つなとゆかしき限りなるへく　四季の花の道折りにつけての糸竹何れおとらぬすさひにていと〳〵まれはまほしうなん」

吉田芳子

女子はかり其務の重くして其業のしげきは　なからむ幼兒の教育家政の整理はいふに及はす舅姑を敬ひ　僕婢をあはれみ夫につかへ弟妹をなくさめ常に一家の和合をはかり　世の交際に心を用ゐ賢母良妻といはれむことを期せさるへからす

蓋し貞操は婦人の美徳にして温順は女子の天性なりされは　世の嬢君等育兒家政裁縫の道はいふも更なり讀書活花茶の湯なとも　一わたりは心得てます〳〵この美徳をやしなひこの本性をふるひ　おこし家の榮ゆをはかり國の譽をかゝやかさんとこころ勵むへきなれ

島田悦子

男は外をつとめ女は内を整ふと云ふ事は古へより　變ることなく傳はりたる道なりけり　されは女子たるものは其心して幼きなりより人となりての後内を整ふてふつとめに事欠かさらんやう　に常〳〵いそしみて裁ち縫の業食物調理の法病者の看護あるは兒を育つる　道なと何くれとなく學ひ習ひて後の日妻となり母となり　一身一家を整へ人たる道を盡すへき事は　女子の心得へき事にこそありけれ然はあれと　特に女子とし

て女子たる德と格と云ふものに心を置くへき事は束の間も忘ろへからす多くある德の中にてもわけて貞操は尤も重んすへく かならす守るへき道にして此德たに行はるれは 他の諸の德は自から行はるへし若し此德の欠けたらんには如何に學問深く 智識博くとも女としてあるへくもあらすなん

十月五日 兼題 鹿聲幽(追加)

きくまゝに哀れもいさゝまさりけり
つきにすみゆくさをしかのこゑ　磯部つや子

夕くれにつまやこふらんかすかにも
なくはいつくかさをしかのこゑ　碓井信子

山ふかくすみてなくらんほのかにも
つまこふしかのこゑそきこゆる　碓井武子

かすかにもみやまのおくになく鹿を
たひのまくらにきくそかなしき　碓井和哥子

松かせにふきおくられてきこえきぬ
みやまのみねのさをしかのこゑ　永井さい子

まつ風のたよりにつれてかすかにも
をしかのこゑそきこえくるかな　中島房子

をしかなく聲もかすかにきこゆなり
みねよりおろすけさのあらしに　青木敏子

打まねくのへのすゝきのほのかにも
つまこふしかのこゑきこゆなり　近藤秀子

ころもうつ音のたえまにきこゆなり
をちのたかねのさをしかのこゑ　遠藤ちか子

さをしかの聲もかすかにきこゆなり
つきもをくらのやまのしたいほ　荒川嬉子

さをしかの聲かすかにもきこゆなり
ふるさとおもふたひのまくらへ　溝口秀子

遠やまのまつのあらしやさそふらん
かすかにきこゆさをしかのこゑ　神田錦子

ねふられぬまくらの山にかすかにも
つまこふしかのこゑきこゆなり　水島辰子

夕かせはこゝろありけにさそひきぬ
をすのさやまのさをしかのこゑ　佐々有鄰子

打つけにきゝたるよりもあはれなり
かすかにひゝくさをしかのこゑ　降田まき子

さをしかのつまこふ聲もかすかなり
ゆふくれさひししからきのさと　溝口寛子

山のはのまつもあかれすくれそめて
かすかにきこゆさをしかのこゑ　西村菊子

うちまねく尾花かそてにかけおちて
かすかにきこゆさをしかのこゑ　西村さら子

やまかせのたえま〳〵にかすかにも
つまこふしかのこゑそきこゆる　浦島龜子

さをしかのつまこふ聲もかすかなり
ゆめもむすはぬをやまたのいほ　浦島榮子

さをしかの妻こふこゑもかすかにて
あはれもよほすたひのやとかな　島田好子

あきふかみ夜寒おほゆるたひやかた　芝田秀子

つまこふしかのこゑかすかなり

草まくらねさめてきけはふくるよに
しかのなくねそかすかなりける
楠　稍子

さをしかの妻こふこゑもかすかなり
よもふかくさのあめのふるひに
松原常子

秋かせになくねせかすかにきこゆなり
しかのたつこやいつこなるらん
野田千代子

あきかせのふくにまかひて遠かたに
ほのきこゆなりさをしかのこゑ
荒川清子

風のおとにをり〳〵聞ゆさをしかの
をちのたかねにつまこふるこゑ
木村兼子

妻こひにいもねさるらんよもすから
かすかにしかのこゑきこゆなり
吉川禮子

風の音にさそはれてくるさをしかの
こゑはいつれのたかねなるらん
遠藤錦子

もみちははまた色あさきやまさとの
つまこふしかのこゑかすかなり
澤田俊子

ふく風にかすかにおくるしかの音は
をちつかたなるみねになくらん
荒木純子

秋かせのみにしむよははなくしかの
こゑもかすかにきこえけるかな
越山雪子

山ふかくいへゐしをれとなか〳〵に
こゑかすかなりをちのさをしか
長島謙子

さなきたにみ山のおくはさひしきに
つまこふしかのこゑかすかなり
吉川久に子

きりこめしみやまのおくの夕くれに
あはれをさそふさをしかのこゑ
成田常子

ねさめするまくらの山のおくならん
すかかにきこゆさをしかのこゑ
曾山道子

遠やまのふもとのさとにゆふへ〳〵
かすかにきこゆさをしかのこゑ
松井住子

ふきおろすあらしのつてにさ小鹿の
こゑもかすかにきこえくるかな
吉川勝子

こゝろしてきかすは夫れと知ましや
とほやまさとのさ小しかのこゑ
根岸英子

山ふかみみちにまよひししかのこの
はゝをたつぬるこゑそかなしき
後藤みつ子

あきふけて聲もかすかにきこゆるは
をちのをしかのつまやこふらん
堀谷よし子

さ小鹿のこゑもかすかにきこゆなり
たかやまかせにふきなされつゝ
堀谷やな子

やま里のさひしきあきのゆふくれに
かすかにきこゆさ小しかのこゑ
花山保江子

秋ふけてさひしさまさるわかいほは
つまこふしかのこゑそきこゆる
花山操子

かすかにもつまこふしかの聲すなり
あれにし野邊のあきのつきよに
花山乙子

ふきおくる風にたくひてきこゆなり
みやまかくれのさをしかのこゑ
丸山すゞ子

山のおくに妻やこもれるさをしかの
鈴木みゑ子

ひとこゑことにとほさかりゆく

小夜ふけて遠やまさとのしかの音を
　まくらにちかくきくひとやたれ　牧野さち子

おほつかないつこなるらんさ小鹿の
　なくかあらぬかみねのあらしか　牧野さかき子

秋の夜のあめにましりておち來なり
　をのへにたかきさをしかのこゑ　牧野さは子

風の音をきくたにあきはさひしきを
　こゑもしくれてさをしかのなく　牧野さき子

山おろしの風のまに〳〵おちくなり
　みねにつまとふさをしかのこゑ　進藤かね子

さしくしのあかつき近くねさめして
　はるけきしかの音をもきくかな　進藤すゝ子

ふきおろすあらしのおとの絶間より
　つまよふしかのこゑそもりくる　進藤もと子

さらてたにねさめかちなる秋の夜に
　つまとふしかのこゑそきこゆる　中原貞子

あはれとは何にたとへんそらはれて
　さやけき月にをしかなくなり　彦坂尊子

十月五日兼題　菊を送られたるかへし（追加）　佐々布鄰子

唐土のなにかしは露をなめて不老不死の齢をたもちしとなんいへる黄金白銀なせる今を盛りににほへる菊花をおくり給へる嬉しさはなににたとへん玉たれの小瓮にさし床の上さらずうたひ出ぬ

露をなめ露をかさしてきせわたの

あつき心のおくをこそしたへ

あな口さかなしとなとかめたまひそ妾か心緒をのへたるのみあなかしこ　澤田槇子

御心入れてつくらせ給ひしにはあらておのつからなる野菊のうるはしきをあまためくませ給ひつる御心はへなか〳〵にゆかしくいと嬉しうて直に花瓶にさし侍りしに其色そ　のけはひの氣高く世にこひねさまめてたしともいとめてたく朝な夕なうち向ひては千歳の齢のへ侍りぬ

おのつから生ひし野菊を給ひつる
　人の心のいろのゆかしき
　　あなかしこや



深夜虫　諏訪晴子

物の音もふけしつまりしさよなかに
　むしのこゑのみたかくきこゆる

秋野遊　仝

駒場野のあたりをしめてくつわむし
　なくねきゝつゝともとあそばん

秋夕雨　太田貞子

むらすゝめかへりはてたる小山田の
　ひたにこゑあるあきのあめかな

藤袴　静間密子

ゆかしくもなすもろ風のかをれるは
　いつこにかけしふちはかまかも

鹿　松原保子

はぎの葉の露はなみたかさをしかの

つまこふこゑにおきまさりけり

秋山家　仝

山さとはいつこわかれこもみぢする
あきころこゑにさびしかりけれ

月前擣衣　松原ゆき子

音たかくひゞきわたりて小夜きぬた
こよひはつきにうちあかすらむ

紅葉　小幡千代子

あらしやまつゆのおき添ふ紅葉ばは
はるのはなにもおさらざりけり

紅葉映水　曲澤ひて子

たに川のながるゝみづにかけとめて
ちらぬもうかふみれのもみぢ葉

月下笛聲　仝

今宵たれつきをよすがにしらふらむ
ふしおもしろきふえたけのこゑ

秋旅　荒本すま子

のも山もけしきかはりてゆふかせの
たもとすゝしきあきのたびかな

鹿聲　曾山道子

すまのうらやなみのうきねにきこゆなり
をちのやまへのさをしかのこゑ

秋　高橋信子

たわむまでさきみだれたるたま川の
みれのあきはきなみやをるらん

仝　荒木純子

はなの上にひかりほのめくゆふ月の
かげもこぼるゝつゆのたまはき

月　溝口寛子

きりはれしをかへの松のこのまより
みゆるもきよきあきの夜のつき

仝　神田鈴子

くもりなき月にむかへはよのちりに
くもるこゝろもはれわたるなり

海邊月　楠精子

薄すみのかりのたまつさよむはかり
うみちさやけきなみの上の月

故郷月　西村菊子

みるひとのなきふる里のすゝきはら
ひとりつきこそすみわたりけれ

初秋風　吉川禮子

きゝなれしまつのあらしも昨日今日
あきのこゑにもなりにけるかな

蟲　長島綠子

行けはあとかへれはさきに聞ゆなり
千くさ咲く野のむしのこゑ〳〵

草花　根岸英子

さり〳〵に千くさの花のさきみちて
ふみわけかたきあきののへかな

暮秋雨　吉田芳子

まれけとも とまらぬ秋のつれなさに
なはなかそてはやつれゆくらむ

秋風寒　　遠山いね子

秋かせはよさむになりぬわかせこか
ころもいまたつくろはぬまに

高崎竹子ぬしの華族女學校を卒業せられしをことほきて　　仝

志けりあふ文のはやしにぬけいてゝ
たかくもみゆるたけのひともと

野へに蟲の音をきく　　芳山子

所せき庭の内すら明けぬるより暮るゝまてかくさま〳〵の蟲のなき渡るを同じくは野邊にわけ入りてその音を撰み その品を定めはやと思ひ立ちて夕霧の晴間もまたす夕露のおくもいとはて 友とち二人三人ととめつゝ來れは耳もさやかにふり出てゝ 鳴けるは鈴蟲なるへしはたすゝき袖打ちふる中になくは人まつ蟲なるへし萩原 錦志きたるわたりに聞ゆるは機織蟲なるへしくつわ蟲のと歌へるは 駒つなきけむ草れなるへしつゞれさせてふ聲にはわひにたる女郎花や 立てるならむ志かのみならす名も志らぬ蟲の聲もいと多けれは 何れかまさり何れか劣れるなと定めあへぬに夕日影俄にくれて夕月の 影ほのめけはいとゝしくなきほひて見渡す限りの野邊蟲の音ならぬはなし かしこの叢もこゝの草葉も

深山の花　　太田貞子

雨江の君の帝國文學にものせられたる深山の花の一編よ其心のめでたく其言葉のやさしきにかへす〳〵あかぬものから世の女子の鑑にもと思ひ立ちてかうやうなる文の樣に書きかへつるを拙なき筆の程

はひとへに許したまひてよ

三輪の川邊に秋立ちて行來の人もいとうとましく 眞柴刈る賤の歌聲の折〳〵波に答へ松の響にかよひて 苔傳ふ岩根の水も松の下葉に埋もるめりいと心細げなるに今はと打つらん 擣衣のおとも秋さひたりきのふけふすみまさる秋の景色を 大殿にながめくらさんも御心もとなうおぼしたまひけん朝倉の大宮居を 朝まだき出て立たして行く〳〵野に山に狩りくらさせたまふおほけなき御けしの袖には なひかぬあらものもなく尊ききゆはづの音には逆ふけものも あらぬなめり御心のまに探らせたまひ尚遠く〳〵と染めまさる 秋のけしきをも見そなはせたまはんとて三輪の流れのまに〳〵下らせまたへり岸の紅葉色ふかく染めて君かおほんみゆきをむかへ 水涯の松か枝翠こまやかに君か千歳をことふき顔なり 御かとにいとう御心ゆかせたまひ尚ひた下りに下らせたまふ

下らせたまひしにいふかしや微かに人の影見ゆ 尚ほ近う見させたまふに山にも似ぬ花のをとめすか〳〵しき脛も あらはに山下水の清きを掬ひあけて衣あらふなりけり袖も面わも紅葉の色の 色に出てゝ匂ふかんばせはまことに天つ乙女の姿にもたくへまほし 御かとは御心あやしう思ほしたまひけむ乘る駒の手綱もゆるはせて 暫しと立ちとまらせたまふ

駒の嘶に乙女も驚きけん匂ふおもわを牛は もたけて聲するかたを仰くに此の御行幸世のつれならぬ御けしきに はやくもさとりけん衣置く手忙かしくあやたすき取る手もせはしうおましの前にひれふしぬ

✿　✿　✿　✿　✿　✿

岩によせかへる波の音いと清きに駒の嘶も勇ましう聞えていと厳かなり御かどは御鞍をおりさせ乙女がそばちかう寄りたまひて「あはれい

ましは何處のものにか斯かる山里にも似ぬいましがさま身の上のことごもつばらかにかたれ」と御言葉かしこうもはせたまふ乙女もやんことなき御仰せのもたしがたくやひれふしゝかしらすこしもたげて「わらはは此の里なる名は引田部の赤猪と申し侍る　もとより世にましらはぬあやしの山賤のかうやんごとなき大前に　きこに上げまつらんもいと畏こしなと答へまつるもいとうやく／＼しく聲細う引き入るゝ袖もいとゆかし帝は御心ふかう目出させたまひて尙御言葉を續けたまふ

「あはれうつくしきそかおもわ　あはれすか／＼しきそか心よあたら匂を淺茅の露と消ぬ果てしめんはいと口惜し　やかて雲の八重垣造らせていましを迎へんほとに只一筋ゥ操をまもり　必す仇し心な起しそこの一本の矢はそか契りのしるしとも見ればほどなくたよりも　きかせんをゆめ人にな折られそとかへす／＼も結はせたまふ」

御心の尊さとうつくしみのふかきに乙女も　幾たびかかしこみぬかつきてゆめ御言葉にたかひまつらぬ事の　よしを聞ゆるもいと恥しげに散りかゝる紅葉の色もよしありけなり

✿　✿　✿　✿　✿　✿　✿

三輪の川波音かはりて又の秋はかへりぬ峯の紅葉　麓のきぬた何れ昔しの色音にかけらさりけり今年も衣あらふらん　乙女の裾の色いとふかく花のおもわも今こそと見受けらるれと連れそふ人もあらぬ　なめり染めぬ齒元には折く／＼あどけなき笑を浮へぬ

✿　✿　✿　✿　✿　✿　✿

峯の紅葉葉幾度染めてあせ三輪の川波幾度音かはりて　うき秋もこゝらかへりぬ　根の上の乙女も袖の色いつしかと　更けて額には早や八十の年波を重ねぬされと尙連れそふ人もなしともなふ人もなし

八十の年波はかへりぬれども帝の御たよりは露聞ゑさりけり　花の色香いやましにあせ袖の匂うらあさくのみなりまさりしか　怨きたねす鳴きわたるみ空のかりにはあはやと心を動かし門の松虫には　今かとまちわたりしか其の甲斐もなくて又こゝらの月日をすぐしぬ

さては御上にまかこと共のましましゝにかなと　斯くは御使の後れたまふならむいふかしさよさるにても尊きは　彼の篠矢只空しく賤か伏屋に埋め果てなは不忠の罪は三輪の淵瀬の底ひもさらんを　いちはやく返しまつらん…………返しまつらんとて　折れめくれる小路を辿り玉しきの都をさしてさし出でぬ置きあまる淺茅の　露いと寒けきに吹きかよふ萩の上葉の風もあはれなり

媼は玉の御庭におりたちて帝の御わたりを　今かとまちわひにしかやかて出てさせたまふを見奉れは御面影もいと老まさりて　御くしの上にかつかせたまふ霜の一村いとさやかにかされたまへる御年も　かきかそふ九十九の秋とそ見奉らる媼は御はしのもとにひれ　ふして「此の一本はいぬる八十年のむかし三輪の川邊の御ゆきにとゞめ　たまへる篠矢なり大君にも寄る年なみの數く／＼はさやかに見奉れども　いとすくよかにわたらせたまふ　目出たさ賤か　身にもあまりて　いともうれしうなんと聲細うきこゆるも涙なり帝はきかせたまひて　打ち驚き…………おなあやまちぬうたて忘れし朕か心に　惜しやあたら色香をむつかしきやとの淺茅に打ちまかせつる事のうれたさよ　あはれ朕か罪かへらぬことをとみけしの袖を打ちかへし歎きたまふもことわりなり

✿　✿　✿　✿　✿　✿　✿

其の後帝には雲の八重垣つくらせたまひて　媼を迎へ長閑けき老をすくさせまゝひけりとあはれ八雲殿いや廣き惠の　涙には媼か若かへるらんさところふ忠の光りには置きむすふ　かしらの霜もきえぬへしあはれ目出度き大御心よあはれ目出度き赤猪子や　あたら匂を淺茅の露とやつしも恨みの種かは中々　に高き操まめなる心は長へに　后の世の鏡にこそ

人の心の花とは、吾に對して善き人の心を、花によろへて云へるなり。うつろふとは移ると云ふ意なり。○一首の意は、草木の花は、皆色の見えて移り變るものなれども、世の中の人の心の花は、色も何も見ゆることなく、人の知らぬまに、移り變り行くものなり。實に頼み難きは人の心であるとなり。

人は、誰にても、獨立の心なかるべからず。獨立の心なく、人をのみ頼にする時は、此の歌の如く、人を恨み恐る樣になるなり。すべて世の中の人の心は、實に色も何も見えず、人の知らぬ中に變化するものなれど、己の心に油斷はすべかざるものなれども、人を頼に思はずして、己獨立さへして行く時は、如何に變化したりとて、何ぞ恨み恐る事のあらむ、獨立の心は實に事をなし、業を遂ぐる基礎にして、人の一身を保持する母なり。苟も、此の心なき時は、常に人の爲に左右せられて、心身共に定らず。恰も、浮雲の如く、風のまに〳〵東西南北にさすらはざるを得ざるに至る。故に、人は常に獨立の氣性を養ひ、我が身を以て、我が身を維持する樣に、心がくべきなり。又人の心も、實に此の歌の如く變り易きものなれど、如何なる人なりとも、心をゆるして油斷すべからず。まして近世に至

りては、人の心薄情に赴き、騙詐欺罔至らざる所なく、權謀僞譎施さゞる所なき時節なれど、少しにても油斷する時は忽不慮の災難にかゝり、非常なる憂苦にあふべきなり。

大江千里

あとまきのおくれて生ふる苗なれどあだにはならぬたのみとぞきく

後まきとは、後に蒔きたるを云ふ○あだとは無益と云ふに同じ○一首の意は後蒔になりて、前の苗よりおくれて生じたる苗にはあれども、必しも、其の苗は、無益なるものと云ふ譯にあらず、隨分前の苗にも劣らぬ苗となる望もある世のならひと聞く、故に、後まきの苗なりとも、決して侮るべからずとなり。

諺に後の烏先になると云ふことある如く、人も假令後に生れたる者と雖も、必先人に劣りたるもののみと云ふべからず。中には、先人よりも猶立ち勝りたる人もあるものなり。後生懼るべし。先に生れて居ても、油斷する時は、己より年の少き人にも、劣る樣になりぬべし。又後生なれどとて捨つべからず。侮るべからず。苗だにあだにならぬを、況んや人に於いてをや。世には、己より年少なる人を見

て、智識才藝ともに劣等なりと思ひ、之を輕蔑して、齡するを耻かしく思ふ人もあれども、其は大なる誤なり。又同じ年の者にして、他の者よりは、すべて何事もおくれたるを見て、有用の人物とはならざるべしと思ひ、之を捨てゝ顧みざるもあり。或は他に轉業さするものもあり。是亦大なる誤なり。大器は晩成すと云ひて、大なる器を造らんとするには、容易に速に成るものに非ず。人も亦非常なる人物とならんには、小さかしきものよりも、晩く成るものなり。其の進歩せざるを見て、之を止め、或は之を他に轉せしむる時は、遂に大器とならざるのみならず、小器ともなりえずして、身を終るに至る。人は小才あるよりも、大悠なるをよしとす。假令後まきにして後れたりとも、何ぞ憂ふるに足らむ。唯孜々黽勉として怠らざる時は、晩成すといへども、必大器となりぬべし。

讀人知らず

雪ふりて年の暮れぬる時にこそつひにもみぢぬ松も見えけれ

もみぢぬとは、紅葉せぬにて、色を改めざるを云ふ〇一首の意は、冬になりて、霜おき雪ふる頃に至れども、草木は皆色を改めて、其の寒に堪ふることを能はざれども、

ひとり松のみは、如何なる霜雪にあふとも、決して其の色を改めず、青々として緑なりとなり。

節義貞操は、人の尤重んずべき徳なり。節義貞操とは、如何なる艱難辛苦に逢ふとも、決して其の志を變ずることなく、行ふべき事を行ひ、守るべき事を守りて、死に至るも恐れざるを云ふ。恰も、松の霜雪を經て、而して少しも其の色を變ずることなきが如し。是を世にみさをと云ふ人は平生歡樂の中にては、其の節義貞操のありやなしやは別らずして、皆同じ樣に見ゆるものなり、恰も、松の春夏の時に於いては、他の草木と異ならざるがごとし。然れども、一朝世の變遷にあひ、備に艱苦を嘗むる時に至れば、節義貞操のある人は、其の志を守りて變ぜざるも、之なき人は、其の志を守ること能はずして、遂に操を變ず。是松は霜雪にあへども、色を改めざるに、他の草木は、之に堪ふる事能はずして、落葉するに似たり。是に於いて、正邪善惡別れ、君子小人明かなり。故に、人は艱苦にあひて、始めて其の志はあらはるゝなり。男子は君に忠を盡し、弱を助け貧を憐み、女子は夫に誠を致し、二夫に見ゆることなく、始終其の志を變せざるなどは、節義貞操の

尤大なるものなれど、必之を重んじて實行すべし。而して此の節義貞操は、變に處し難に臨みてあらはるゝものなれども、其の平生に於いて、此の心を充分に養ひ置かざれど、實地にあひて、之を守ること能はざるものなり。人たるもの注意せずんどあるべからず、

典侍藤原直子

あまのかる藻にすむ虫の我からとねをこそなかめ世をばうらみじ

あまは、海士にて、海の漁をする人を云ふ。○我からとは、藻に居る虫の名なり。○一首の意は、世の中の事は、すべて思ふ儘にならずして、或は歎き、或は恨む事など種々あれども、此は他人の惡しきに非ず。又世の善からざるにも非ず、彼の海士の苅る藻にすむ虫の我からおのづとなくが如く、憂きも苦しきも皆我が心我が身より起るものなれど、世の中の事は、皆我からと思ひあきらめて、世を恨み人を恨むべきことはせじとなり。

すべて人の恨み怨る事のあるは、皆みづから、我が身に求めずして、他にむきて求むれどなり。他に向きて求むる時は、成る時は喜べども、成らざる時は、恨み

怒るなり。又人の、我を讒謗罵詈する時、或は騙詐欺罔する時、或は輕蔑侮慢する時など、怒り恨むは、皆人の我に善からむ事を求むれぞなり。我が心善美ならむ、人は如何にありとも、何の恨むべき事かあらむ。我にして純正ならむ、人は如何にすとも、何の怒る事かあらむ。人を恨み世を怒る人は、大方己正善ならずして、他の己に正善ならむ事を求むるものなり。己正善ならずして、他の正善を求むるは、恰も水を汲む勞を取らずして冷を求め、火を焼く苦をせずして暖を求むるが如し。豈得べき事ならんや。己善を以て人に施す時は、人も亦善を以て己に報い、己惡を以て人に施す時は、人も亦惡を以て報ゆ。是自然の道理なれぞ、先第一に我が身を正善ならしむべし。正善なる時は、人も亦正善、世も亦正善なるが故に、人を怒り世を恨むべき事なし。古人曰はく、吾日に三たび我が身を省ると。賢人すら然り。まして凡人に於いては、十度も百度も、我が身を省みて、唯其の不正不善ならざらむことを務むべし。

源家長

津の國のなにはの事につけつゝもよしをばあしと云ひなかくしそ

なにはのことゝは、何やかやの事と云ふことを、攝津の國の難波に云ひかけ、その難波よりよしあしといひいでたることなり。〇一首の意は、攝津の國のなにはと云ふ名の如く、なにやかや、萬の事につけつゝ、善きことをあしと云ひ、あしき事をよしと云ひて、隱す樣の事はする勿れとなり。

すべて、人は正直ならざるべからず。人に秘し隱す事は、決してあるまじきなり。隱れたるより顯はるゝはなしと云ひて、如何に隱しても、後には必あらはる、否、隱すことは、返りて速に世に知るゝものなり。世の惡事を行ふ人は、自あらはさんとするものなし。必種々樣々の手術を以て、其の惡事の顯はれざらんことを計るされども、遂に世に顯はれて、刑罰に處せらる。是世の中の事は、すべて隱し果す事能はざる證據なり。故に、人には正直を以て貴しとす、正直なる人は、假令如何なる不遇に逢ひても、人之を憐みて助く、正直ならざるものは、假令如何に富貴なりとも、後必零落して、人顧みざるに至る。又事をなし、業を行ふにも、正直なれば、人之を信用して力をも添へ、正直ならざれば、既に成りたる事業も、終に遂げざるに至る。正直は實に人の頭腦骨髓なり。然れども、人の惡を發き、非

を鳴らすが如きは、不徳に屬する事なれど、君國或は公衆に關する事にあらざる限は、言行に施さゞるをよしとす。又諺に云ふ馬鹿正直の如きは、眞の正直にあらず。思ひまがふべからず。

從二位爲子

心だに我が思ふまゝはかなはぬを人を恨みんことわりぞなき

一首の意は、我が心ですらも、我が思ふ樣にはならずして、自由になすことも出來ざるを、他の人の、我が思ふごとくならぬとて、人を恨む樣な道理はなしとなり。

我が心は、我が物なれど、之を自由にして、我が思ふ如くする事の出來べき道理なれども決して我が思ふ通りに叶ふものにあらず。假令へど、心にはとかく〳〵の事を、口にも云ひ文にも書きて、人を敎へ世を導かむものと思へども、さて演擅に向ひ、或は机によりて、實地に物せむとする時は、容易に云ふことを得ず。又書くことも、出來ぬものなり。是口の惡しきに非ず。手の鈍きにも非ず。心が思ふ樣にならぬ故なり。又かく〳〵の事業をなし、世をも人をも益せむと思ひて、之を

實地に行ふ時は、此處に考の足らずして失敗し、彼處に心の至らずして不意の障碍を引き起こし、如何に心は矢竹にはやりても、其の事業遂に成らざるに至る。是事業のあしきに非ず、我が心の思ふ様にならぬより、此の如き結果には至るものなり。すべて人は、己が心だに思ふ様になりたらんには、如何なる事にてもなし得ぬ事はなかるべしと雖ども、思ふ様に叶はねばこそ、かくてもありつるなれ。我が心だに此の如し。如何でか人を恨む道理のあるべき。然れども、世の愚なる人は、人に依り物を頼みて、其の人が我が思ふ様に成らざる時は、不信切と云ひ、薄情と罵りて、之を恨む、實に無理非道と云ふべし。宜しく此の歌を味ひて、此の理を悟るべきなり。

和泉式部

己が身の己が心に叶はぬを思はゞ物は思ひしりなむ

一首の意は、己が身は己が物なれど、如何樣にも、心のまゝになるべきに、決して然らず、心は進まむと欲しても身進まず、退かんと思ひても退かず、中々思ふ様にはならぬなり。其を思ひて道理を考へ悟りたらんには、世の中の萬の事物は、

我が身の如く、我が物にはあらざれど、我が思ふ様になるべきものにあらざる事は、思ひ知らるゝならんとなり。

世の中の萬の事物の、我が思ふまゝにならざる事は、誰も知る處なれども、又事物の、思ふまゝに成らぬを嘆くものあり。此の如き人は、其の身分不相應なる希望を懐きて、みづから其の身分に安んずる事能はざるものなり。身分に安んずる事能はざるものは、遂に惡事を働き、盜賊をもなすに至る。世の罪人は、大方其の身分に安んずること能はずして、不相應なる富をなし、榮華をなさんと欲するものなり。然らざれど、人並に五體を備へ、知識を有するものゝ、勉強して衣食を得るに難きもの世にあらんや。故に、人は己が身分を知るを第一とす。分に應じて事物を行はゞ、何ぞ困窮することあらむ。分を知らずして強ひて勵むは、實に愚なるものなり。

正三位成實

一筋に思ひ定むる心だにあらばうき世をなげかざらまし

一首の意は、何事を行ふにも、心を左右にせず、唯一心不亂になりて、假令如何

なる場合に遭遇すとも、屈する事なく、撓むことなく、此の事をなしとげむと思ひ定むる誠心だにあらば、如何なる事にても、成らぬ事はなきものなれば、此の世を憂しつらしとて、嘆く樣なる事はなかるべしとなり。

凡一の事業をなし、一の希望を達せむと欲せば、誠心誠意只一筋にして、其の事に從事すべし。此の事もなし、彼の事も行はむと欲する時は、其の事決してなるべからず。其の事の爲には、他の小事の破るゝをも顧みるべからず。萬事にかへずしては、一の目的は達することを能はざるなり。古人も、誠心一筋に到る時は、如何なる事も、成就せぬことなしと云へり。實に然り。然るに世の人を見るに、若此の事成らざる時は、彼の事をすべしと思ひ、或は此の事にも關係し、彼の事にも從事せば、何れか一つは成就すべしなど、心に二つの事を挾みて、思を兩方に配れる故に、心常に定らずして一事に專ならず、是を以て、此の事も十分に出來ず、彼の事も目的を達する事能はず、遂に一つの事業も希望も、成就しえぬに至るなり。愚公が山を移すは、愚なるに似たれども、此の心ならずしては、何事も覺束なし。然にる智叟が如き心にて、事を處せんとするを以て、其の結果を見る

に至らず、意を失し心を損して、世を恨み嘆くなり。すべて、する事行ふ事、皆其の心の如く成就したらんには、少しも世を恨むる事もなく、嘆く事もあらざらんに、さる人の世におほかるは、失意の徒にあらざるはなし、失意の人となるは、心の一筋に至らぬが故なり。誠心一到せば何事も成就す。成就すれば、恨み嘆く事はあらざるなり。人たるものは、能く此處に注意して、何事も誠心一筋を以て從事すべきなり。

一筋に人をも身をも思ふかなうつ墨縄の直かれとのみ

前中納言定房

一首の意は、世の中の人おしなべて、他人も我が身も正直ならん事をのみ、只一筋に思ふことなり。恰も彼の大工が、材木などを計る時に、打つ墨縄の正直なるが如く、誰もかく正直にありたきものと思ふとなり。

人に貴ぶ所は、正直にありと云ふことは、既に前に述べたるが如くなるが、世の中の人おしなべて、此の歌の如く思ひたらんには、如何あらむ。實に樂しく嬉しきことの極なるべし。昔の聖代には、路に落ちたる物を拾はず、外の戸を閉さず

日用百科全書第六編廣告

從三位子爵 福羽美靜君題辭

從一位鍋島侯爵夫人榮子君通詠

正五位竹屋光富君夫人雅子君序文

衣服と流行

全一冊美裝紙數二百五十頁●正價金貳拾錢●郵稅六錢

挿畫 極彩色口繪…富岡永洗筆 木版彫刻極密圖數十個入 寫眞銅版畫●官女の風姿●加茂葵祭の風俗●日光祭禮車あらび●田舍の綿くりと繰糸●東京輿樣と娘風●美人洋裝●美人彈箏●東京藝妓と雛妓●鴨河納涼中の京藝子と舞子●大坂中の鼎に於ける浪花藝者と雛妓●藝子の着付

衣服は體を蔽ひ寒を防ぐ實用の外、又美を添へ氣品を加ふ、故に社會の進歩に隨つて衣服彌〻美に、流行益々盛なり。本書は和洋兩服の製法、用法より、模樣色合を始め、古來流行、嗜好の變遷及び今時の流行等を詳叙し、文の足らざる所は優麗精緻の畫を用ゐ、懇切丁寧に之を説明す。紳士貴女等若し本書を身邊裝飾の參考に資せば、風采彌〻優美高尚なるへし。

日用百科全書 自第一編至第十二編 目次

●第拾參編以下の目次は追て廣告すべし

◉日用百科全書正價●壹冊金貳拾錢●六冊前金一圓十錢●郵稅一冊六錢

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

三輪田眞佐子女史著

女子處世論

近刻　全一冊　定價金二十錢

本社は曩に女子の本分を發行し之を世に公にせり然るに世既にその有益なるを信じて之を購讀するもの實に多く第三版を發行するに至れり今や又この書を發行せんとすこの書は女史が女子處世の務を論ずること盡せりその論旨の如何は讀者乞ふ本書に就いて看られよ

東京京橋區築地二丁目二十一番地
（電話番號一九四六）
發行所　國光社

女鑑第九十五號目錄

（明治二十四年八月八日內務省許可
明治廿五年三月十二日遞信省認可）

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京**新富町**郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女　鑑

每月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	十錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊（三ヶ月分）	五十五錢	
十二冊（半年分）	壹圓	
全國無遞送料		

明治二十八年十月十九日印刷
同　年十月二十日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衞
同　編輯人　山根勇藏
同　發行所（電話番號一九四六）國光社

（印刷所　東京國光社印刷部）